

## 劍の柄塚 (富里)

富里村大字下川下字打越、小石、荒内の田の中にある。安氏が鮎川へ劍を奉持する時郷民におそはれ、遂に、柄を遺失したのであつた。併し柄だけ残つてゐても仕方がないので其のまゝ此の地においてゐたのを、近傍の者が崇敬のあまり、地中に埋め、玉石を積んでしるしとして其處に神を植ゑておいたが其の神は今でも古色をおびて數百年前の昔を物語つてゐる様である。

## 女僧と狼 (大都川)

大都川村大字大附と云ふ村に田舎の割合に立派な大きなお寺があります。千枚山福善寺と云ふ。もう百年位昔の事であるがその寺に女僧が一人住んで居りました。其の時分の寺は今の様に立派な寺ではありませんでした。勿論小さなみすぼらしい寺であつたのでしよう。或る晩女僧が念佛を唱へてゐると庭へ一匹の狼がやつて来て何か骨でもたつたのか非常にいたさうに喉をならしてゐるので女僧は可愛さうに思つて庭に出て、「おゝ狼よ人に食ひついてはいけないよ今私が骨を取つて上

げるから」と云つて狼の喉の骨を取つてやつた。すると狼は非常に喜んで尾をふりながら山の方へ行つてしまつた。それから明くる晩に又やつて来てくん／＼鼻をならしてゐる。どうしたのかと思つて出て見ると狸の皮を持つて来て庭に置いてあつた。

其の明くる晩も其の明くる晩も同じ様に皮を置いてある。其の様にして丁度千枚皮を持つて來たので女僧は其れを賣つて今日残つてゐる立派なお寺を立てたのだと云ふ。其れで千枚山福善寺と云ふ。

## 十善の森 (大都川)

大都河村大字大河内村と大附村と佐本村大字栗垣内村との三つの村境に十善の森と云ふ高い山があります。其の山は昔から天狗様らの遊び場所であつた。其處には今でも人間は行かないさうです。もし行けば天狗様にさらはれると云ふ事です。

舊の毎月の七日と二十八日には其の森で天狗様が笛や太鼓でどんちやんがりんと非常なさわぎをしてにぎ合ふさうです。それで昔は向ひの山に其のどんちやんがりんを聞きに行つたさうです。今でも十善の森を見上げると天狗様の居る様な感じがします。

## 牛鬼の瀧 (佐本)

佐本村大字宮城に牛鬼瀧と云ふ瀧があります。それは日置川の上流で川幅もあまり廣くはないが鬼に角も蒼々として晝なほ暗い森林中に白く光る瀧の姿は寧ろ恐ろしい不氣味な瀧であります。その昔吉平さんと云ふ親父さんが魚を釣つて居るとこの瀧つぼの真中に大きな牛が現はれて水にうつしてゐるではありませんか吉平さんの影を食つたのださうです。すると吉平さんの体は眞黒焦になつて死んでしまつたさうです。それで今でも其の瀧で魚を取らないのです。側を通つても身の毛のよだつやうな音をたてゝどろ／＼とたぎり流れてゐます。

## がまの瀧 (佐本)

佐本村栗垣内にがまの瀧があります。其所は樹木鬱蒼としてゐても淋しい所であります。其所には大きな穴があつてそれが一つ山を越えた隣村の尾添村にある芝の瀧までぬけ通つてゐると傳へられてゐます。

昔或る人が鍬をがまの瀧壺の中につけて置いて明くる朝取りに行つた處がそれがない。探して見ると三十町もへだてた芝の瀧まで行つてゐたさうです。

## 硯の大師 (大都川)

大都川村大字大谷と同村字大鎌との境に大谷坂と云ふ急な山坂があります。其の中程に硯の大師と云ふ神様がおります。此所には夏でも氷る様な冷い清い水があります。此處には二つの傳説がある。一つは弘法大師が諸國を巡禮する時に此の水で字を書かれたので硯の大師と云ひ、他の一つは坂を下りた所に土井の瀧と云ふ大きな瀧がある。昔ある人が其の瀧つぼの中にわがまを落して取りには入つた處が不思議や瀧壺の中に青疊が敷かれてその上で美しい娘が糸をくつてゐた。其處で其の娘の云ふのには此處は人間の來る處では無い早く歸りなさい、これを土産に上げるからと云つて硯箱をくれた。それからそこを硯の大師と云ふのださうです。

## 四郎五郎鳥 (佐本)

昔佐本村に四郎五郎と言ふ兄弟がいました。兄弟は獵師で一人の母につかへ何一つ不自由なく

暮して居りました。

ある冬の日でした。兄弟は山奥深くわけ入つて行きましたが今日にかぎつて何一つ獵がなく朝から曇つた空はやがて大雪にさへなり路の遠近を忘れて行けどもくく山又山雪又雪とうく踏み迷つてそのまゝ何處ともなく行衛がわからなくなつてしまひました。

家にはとり残されたたつた一人の母の悲歎といつたらありませんでした。母親は二人の兄弟を思ふあまり一人とぼくくと兄弟の子供を探がして山深く老の弱い足を引きづりながら歩るきましましたが翌朝になつて村の者どもが母親の足が片方だけ見えて雪の中に埋まつて冷たくなつて居るのを見出しましたふとそばの松の木を見ますと小さな黒い鳥が居て四郎さん五郎さんと泣いて居りました。

### 小 房 殿 (川添)

私の住んでゐる村に昔小房殿と云ふどこからともなく來た一人の武士がありました。自ら俺はこの殿様だといばり勝手に村人を使つたといひます。此武士金を多く持つて居たのでそれを自分の家の後の大木の下へ埋めて置いたのださうです。

或る時村人に俺の子になれば金をやるといつたがあまり無茶なので誰もその子にならうとするも

のがありません。間もなく武士は病死しました。その遺言に家の後の大木の下を掘れば俺の金があるから掘出した者にはやるといつて死んだのださうです。村人は九ヶ月間かゝつて掘つて見ましたが金は見つかりませんでした。終には大木まで掘り倒してしまひました。

村人はがっかりしてそのまゝ歸らうとしますと不思議な事にはその掘穴から一羽の白い鳥が飛びたちました。村人は非常に不思議に思つてこれはきつと何かたゝるだらうといつてその穴はもとの様になほしそこに石碑をたてその上大字を小房と改めました。それで今川添村大字小房と申すのださうです。

### 七人塚の由來 (市鹿野)

市鹿野から彼の清い流れ日置川に沿うて田邊へ出るには關場の渡しを超える。其處を渡つて二丁計り街道側に三四戸の土路といふ小部落があつて此處に今は只形ばかりの七人塚が残つてゐる。

それは今から凡そ二百五十餘年前市鹿野の莊に當時庄屋を勤めて居た温井角太夫といふ者があつた。此者が自分の役目を亂用しいろいろ不正な事をしたので百姓達は非常に難儀をした。遂に延寶六年午八月重立つた者三十名餘り連名して時のお目附に角太夫の横暴を訴へた。併し取調に出張し

た役人は角太夫から澤山な賄賂を貰つて却つて角太夫に味方し無實を誣告したものとして訴人側を罪にした。

終に詮議の結果三十餘名中の主謀者七人は到頭延寶七年己未十二月廿二日關場砦の小池といふ場所角太夫の爲に斬られてしまつた。其の首を葬つた處を七人塚と呼ぶのであつた。あくる年の元日の朝の事である。角太夫が顔を洗はうとすると手水鉢にあの七人の首が恨めしさうにもの凄くも映つて無氣味にニヤリ／＼笑つてゐた。

そんな不吉な變事があつてから以來さしも不義の榮華を極めし角太夫一家にも打續いて不幸が起り久しからずして没落してしまつた。それは無實で斬殺された七人の怨讎のたゞりだといふことである。

## 串本及其の附近

## 串本といふ名の由來 (串本)

◎「クシモト」は即ち「幣串の本」であるといふ説。

串本は上古「濱の浦」と稱し中古「鹽崎の浦」と變じ串本となつたのは後土御門天皇の明應二年(皇紀五三年を距る)からである。即ち同年時の神主正六位下伊豫守景利攝州住吉へ使を遣はし本來一丈あつた幣串を三尺だけ相譲つたにより「幣串の本」を約して其後地名を串本と改めたといふのである。元祿時代に書いたと思はれる潮崎本之宮神社神宮小原家の系圖中第二十七代景利の處に「明應二癸丑年攝州住吉へ使を遣す。幣串三尺を相譲りて串本と改む」と附記してゐる。又同神社の縁起を見るに、この社は最も上古より存在せるもので、攝州住吉神社とは古き縁由を有するのみならず、住吉神社より奉供の記録も残つてゐる。又現在串木谷の名稱も等しく産土神の幣串を作るを木伐りしより起つたといふ傳説もある。

◎「クシモト」は即ち「靈木の下」であるといふ説。

當地産土神潮崎本之宮神前なる古樹柏楨は樹齡古くしてその何れの年代に植ゑられたものかは全く不明である。土民は古から之を呼んで「奇しき樹となし又「靈しき樹」と稱した。「クシモト」なる

地名は即ちこの「靈木の下」から発生したものであるといふのである。

◎「クシモト」は即ち「越す本」だといふ説。

紀伊國續風土記に申本を「久志毛登」と読み、浦の名義は「御崎に越す本」の義だと解説してゐる。是に依つて見れば「越す本」が「越し本」となり、遂に轉訛して「クシモト」となつたとする様である。

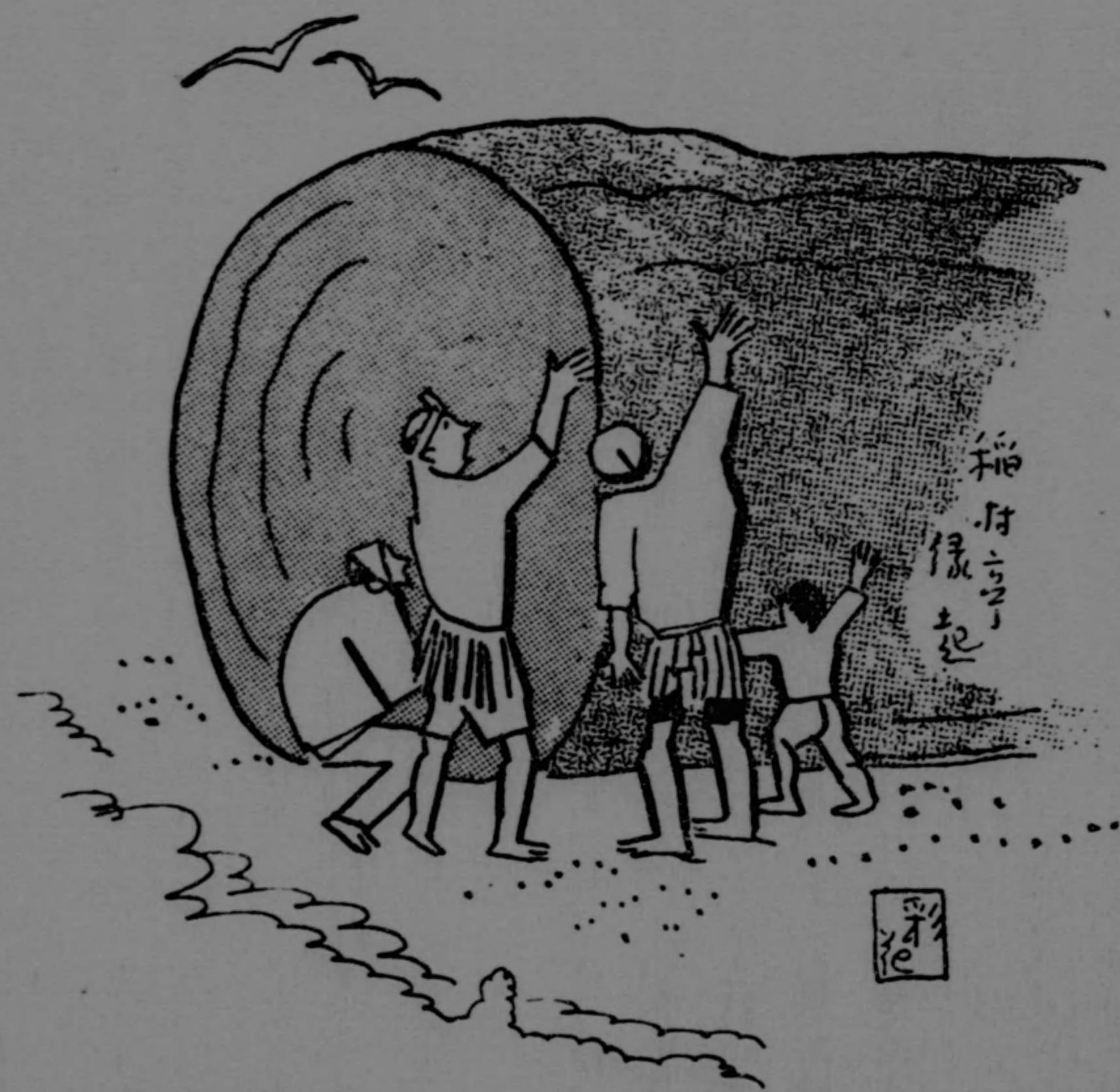
◎「クシモト」は地勢上「申刺の本」だとする説。

◎「アイヌ」語から出たとする説。

### 稲村亭 (申本)

「申本に亞米利加から流れてきた家がある」といはれる。それは今申本町八百七十九番地に在る神田清兵衛氏の邸宅稲村亭といふのがそれだ。この家は今から四十年程昔申本から程遠からぬ有田村の海岸に途方もない大きな材木が一本大浪に打寄せられた。

折ふし通りかゝりの漁師何某といふ者が逸早く見付けて拾ひ取つたが長さが二間の切口一間もある大木、轉がした端に人が立つと丁度頭と木がすれ／＼になつたといふ。四方は一面に虫に侵され水にさらされて切口などはもう丸くされてしまつて居る。何十年海につかつて居たものか見當がつかぬ位であつた。拾ひ上げた後に諸方から大分買手がついた。



所でその時から二十年ほど前稻村に大饑饉があつた。神田家が其倉庫を開いて盛に救恤を行つた事がある。漁師はこれを徳としてせめてかゝる折にこそ其の恩誼の萬一にも報いんものとの一切の買手を盡くしりぞけてこの珍しい大材木を惜氣もなく無代で神田家へ贈つた。

神田家では折角の好意と喜んでこの贈物を納めたがこの邊にはこんな大木を切る大鋸もなければ木挽も居ない。俄かに人を大阪に走らせて急に別仕立ての鋸を拵へさせるやら、仕事に慣れた木挽を雇ひあつめるやらやつさもつさ大騒ぎをした末、愈々この木を挽き割つて見ると驚いた——今の今まで水に蝕はれて薄汚い材木とのみ見えたものは割つて見ると中は幾十年間水に浸され木汗の全く抜けた亞米利加のレッド、ウッドさながら鼈甲の様な色に光つてゐる。立派な木であつた。神田家の人々は驚喜した。

それから濱に二間に餘る大風呂を沸かして挽き割つた材木を一々これで煮て鹽出しを行つた。何分長い間潮に浸つて居た事として切口から潮を吹いて持て餘したといふ。而し鹽出しがすむと木は堅いし色は美しいものであつた。記念の爲めにこの木許りで家を建てたら何うだらうかといふ議論が起つて遂にそれに決まつた。そして稻村亭が出来た。その室は八疊十疊の二室で柱、梁の類はもとより、襖、障子から、この室備付けの衝立、屏風、煙草盆に至るまで盡くこの一本の木で作つたのである。これに付いて幼時お伽噺の様なもの聞いた。

それはその饑饉の後に村人は神田家に何かお禮をしようとして居た。ある時にその村の忠吉といふ子供が海岸の漁の見張りをして居ると小鯨がおよいで來たので村人を呼ぼうとすると鯨は言ふに「報らさないで呉れ、そのかはり良いものをやるから私の背に乗れと言つた」ので乗るとやがて遙るく北米に着いた。鯨は「山に神が居るかららへと言つたので忠吉はその理由を山神に言ふと一本の大材木を切つて呉れたのでそれに乗つてまた遙か太平洋を渡つて申本の隣の稲村にかへつて來た。村人は驚いて忠吉を迎へた。そして今までの話を村人に物語つてそれを恩を受けた神田家に贈つたのであると。

### 蘆雪寺（申本）

錦江山無量寺は禪宗臨濟宗で申本唯一の寺院である。元は袋にあつたが寶永四年の海嘯のために流されてしまつた爲舊記の残るものは殆んど無いが爰に天下に誇るべきものが一つある。それは同寺に保存されて居る應舉及び蘆雪の名畫である。一休この熊野の涯にどうしてこんな名畫があるかといふと、その謂れは次の通りである。

寶永の海嘯から百年に近い寛政の末の頃東福寺で修業してゐた若い僧に愚海といふ者があつた。

ふとした事から同じ京の町で繪の修業をしてゐた圓山應舉と親しい交りを結ぶ事となつた。或時應舉が愚海に向つて「あなたがつていつまでも雲水では居るまい、あなたが一ヶ寺を建てる時分には私も一簾の繪師になつて居るからその時分に襖も壁も皆私の筆で飾つてあげるよ」と言つた事があつた。

その後愚海は諸國行脚してとう／＼此の熊野の涯の申本まで來て無量寺に足を止めたが追々と檀徒の歸依が深くなつて遂に大きな寺を再建する事となつた。そこで往年の口約を思ひ出した彼は遙々使ひを出して應舉を迎へに遣つた。

當時應舉の名聲は隆々たる者で殆んど一世を歴してゐた。應舉は使者を受けて舊約を想起し懷舊の念親愛の情油然而として胸底に湧いたが如何せん時あたかも宿痾に擒へられ遽に愚海の需に應ずる事が出来無かつた。止むなくその使者を一旦熊野に歸し更に襖壁の寸法を取り來らしめた上、群仙の圖、鶴の圖、記念金時繪三つ重ねの木杯等を齎らし高弟長澤蘆雪を代理として使者と共に遙々熊野に寄越した。

蘆雪は無量寺へ來て本堂の大襖に三龍間のと三間の虎とを描いた。この繪の墨色を出す爲めには硯の水は態々鶴川の谷から取つたものだといふ。本堂正面の左右巨大なる龍虎の相睨んだ状態は實に凄壯の氣に溢れて居る。この外鶴の圖、猫の圖、寺小屋の圖、唐獅子の圖及鶴の圖等の傑作を多く



残した。殊に極彩色の牡丹の幅の如きは實に驚くべきものである。かく書院の貼壁も袋戸棚の襖も軸物も應舉の圖にあらずんば悉く蘆雪の筆である。

愚海和尚は享方三年六月十九日に亡くなつた。其後五六十年村人の誰彼は應舉の名だけは覚えて居たが其繪は左程貴重な物とは思はず年中襖は入れ通しで動もすれば腕白小僧が鶴の目をぬいたり虎の鼻へ穴をあけ兼ねまじき有様であつた。所が明治二十四年圖書頭九鬼隆一男がこの寺を訪問しこの繪を見て驚き檀徒有志にその保存方を忠告したので俄に完全な土藏を建て、替へ襖を作り名畫はこの倉庫内に納める事としたのである。

### 丹敷戸畔の森 (串本)

昔二色に丹敷戸畔といふ酋長が住んでゐてこの地方ではかなりの勢力を持つて居た。

ある日の事有田稻村崎の彼方から見たこともない船が幾艘か現はれた。土民は驚いて直ちに酋長に告げ多くの土民を集めた。丹敷戸畔は土民を従へて二色灣を一時に集むる南方の森にかけ上つた。見れば荒れ模様岬の沖に餘程航海に困難らしく波のまに／＼漂つて居た。

あれは全体何船であるか。何處から來た船かと土民等の大なる驚異であつた。船は次第に灘近

く寄せて來た。土民等はこの未曾有の出來事に口を尖らせて騒ぎ立てた。

船が汀に着いた頃土民は手に／＼獲物をとつて集つてゐたが初めは罵り騒ぐのみで近づかうとする者とはなかつた。それもその筈船に乗つてゐる人達は何れも強さうな人ばかりで各々武装に身を固めてゐたからである。けれども酋長丹敷戸畔は土民を勵まして上陸をさせない様に命じ頑として手向つた。

軍船に打ち乗つた人達は餘りの舉動に大いに怒り直ちに弓矢をとつて撃ち出した爲め遂に酋長初め多くの土民は死傷し程なく征服せられてしまつたのである。軍船とは今から二千餘年前神武天皇御東征の御船であつてたま／＼二色沖で難船され、からくも避難されたのであるが酋長始め土民等には斯くも尊き御船とは知る由もなかつたのである。

今も尙二色の南方に戸畔の森として山頂に松樹生ひ茂り空吹く風にも昔を偲ばせるものがある。

### 尉の杜 (串本)

二色に南明山法雲寺といふお寺がある。そのお寺の西方に聳ゆる山を尉の杜といつてゐる。

昔この杜に一人の老人が住んでゐて毎日のやうに桶を提げて麓の尉井戸に水を汲みに來た。白髪

の老人が一本齒の高足駄であの山道を桶を持って上下することは村人にとつては何よりの驚きではあつたが何だかその姿が神々しく感ぜられたのである。

老人は里に来る事は滅多になく山の上から東は二色西は丹生と左右の里を見下して村人達の立働く様を眺めてはその日その日を靜かに暮して居たが何時しかこの氣高い老人が姿を見せなくなつた。

村人は初めは不思議に思つたが誰言ふとなくそれは定に入つたのだらうとのことで、里はその評判で持ち切つてゐた。定に入るとは生きながら埋まつて寂滅することである。そして翁は後の世の爲めと稱して小判千両を埋めてあるといふ噂も傳はつたので慾の深い人達は自分の仕事も忘れてこつそり鍬をかついで山に登つては其處か此所かと掘つて見たが遂に何物も出て來なかつた。

この人達はほんとうの小判は杜から見える二色や丹生のあの廣い田圃の中に埋めてゐるとは知らなかつたのである。尉井戸といふのはかなり廣い井戸で井戸の中側に石段をつけて水を汲むやうになつてゐて周圍に小さな古木や雜草が生え茂つて内部が暗い程であつた。それが近年迄残つて居たが百姓が埋めて耕地にしてしまつたといふことである。

### 高畠と牛越 (串本)

神武天皇が御東征の折に串本街道をもお通りあらせられた。町の西の端の田圃の邊り高畠といはれて居る所がある。神武天皇が其處へ高い旗を立てられたのが今は訛つて高畠となつたともいはれて居る。又姫村へ越へる坂の上り口、一面は牛越しと呼ばれて居る。これも又神武天皇が此處をお通りになる時に馬で坂を越されたその牛越しといふ字が間違へられて牛越となつたといふ。

### 彌助芋 (串本)

豊臣秀吉時代の五奉行の筆頭で關ヶ原の役に有名な石田三成の一族に石田五治兵衛といふ人があつた。興亡常なき浮沈の世を嗟嘆し武を捨て、この熊野へ身を潛めた。五治兵衛十四世の孫の彌助といふは植松の姓を名乗り甘藷翁と渾名を取つた。彌助は慶應二年の頃所用あつて九州日向國に行つた時、偶々同地方に蕃殖してゐる甘藷が一種異類なるを見てその種子を數個持ち歸つて試殖したが幸ひ風土に適しよく繁殖したので婦人達は競ふてこれを植付け附近へも傳へるに至つたがそれは、偉大なる蕃殖力を持つてゐた。

潮岬上野を中心として串本西向津賀等では現今毎年五百貫つゝの産出を見るとさへいふてゐる和歌山地方に行くと彌助芋とか熊野芋とかいひ伊豆地方では紀州芋と呼ばひ附近町村に於ては上野芋と

稱へその後この地方民が常食として生活の方面に多大の餘裕を生じたのは齊しく感謝してゐる所で其功績は彼の石ころ畑に芋蔓のつゞく限り永久に忘れることが出来ない、今串本の墓地に潤道芋榮居士といふ立派な石碑が建てられてゐるのは明治十五年病歿された彌助即ち植松甘諸翁の墓碑で遠く伊豆の大島にさへこの芋の記念碑が建てられてゐる。

### 橋 杭 岩 (串本)

本州の最南端串本町の東北に橋杭の立岩といふ一群の島がある。日本海流の黒潮は滔々と絶えずその巖頭を嚙んでゐる。

鯨潮ふく熊野灘に突兀として大小數十個の岩石が一直線に南北にのびてゐる橋杭岩、其岩質は石英粗面岩である。春は棚引く霞に遠近の群島夢の如く浮び秋は照り映ゆる紅葉に錦の島を數ふるがやうだ。島の蔭には鷺鷥が閑眠を貪り舟子が網を擧げて細鱗を捕つてゐる。雅なこと奇なこと誠に一幅の名畫である。

今は昔この串本に與兵衛と云ふ一人の漁師があつた。彼は幸福な日をすごしてゐた。然し南國の秋には毎年海が荒れた。逆まく波は十數日間島と大陸との交通を絶つたのである。與兵衛はたゞそ



れが心配だつた。彼は一年中島を大陸からはなさせまいと決心した。そして遂に神の御前に跪いた。その誠心は神に通じた。神は與兵衛の志を憐まれて、或夜與兵衛の枕頭に現はれた。「與兵衛、今夜鶏の鳴くまでに橋杭をつくれ。橋は立派に俺が架けてやる。」神はかうお告げになつた。

與兵衛は雀躍して喜んだ彼は神を伏し拜みつゝ身仕度甲斐々々しく山から石を運んだ。重い石も與兵衛の眞心の前にはなんでもなかつたのである。彼の仕事は着々とはかどつた。石は一本々々海岸から立ち並んだ。そして橋杭は殆んど半ば出来上つた。

驚いたのは海神である。彼は與兵衛を呼びとめてその譯を聞いた。正直與兵衛はありのまま鶏の鳴くまで橋杭を造らねばならぬ事を告げ、そしておのが仕事を観て美しく並んだ杭に見入つた彼の兩頬には得意の微笑が浮んでゐた。

突然黎明を告ぐる鶏の聲が響いた。與兵衛は驚いて自分の耳を疑つた。コケコツコーといふ聲は確に與兵衛の耳に入つた。彼は狂氣して持つて居た石を捨て、海に身を投じてしまつた。鶏の鳴聲は海神の眞似であつた。

橋杭は遂に完成しなかつた。そしてそのまま中絶した。然し神は非常に與兵衛をあはれんだ。さうして村雨が晴れて日光が雲間よりもれ出てくる時はいつも與兵衛を慰めた。「與兵衛心配するな橋は立派に出来たぞ」と。神がさういはれる時には常に大島の磯から串本の山へと七色の虹の橋が

美しく架けられてゐた。

## 女郎島 (潮岬)

吾が潮岬村は本州の最南端であるから、大太平洋から押し寄する波は澎湃として巖礁を打ち、その侵蝕作用で巨石は悉く不思議な形状を形造つてゐる。其波高い小入江の中で、特に其の名稱が波浦といはれるのがあつて、他の入江の静かな日でも、いつも泡立つた白波が一つの岩を包圍してゐる。この岩にして不相應な女郎島といふ優美な名稱を附せられてゐる。

或浪の静かな日に、大帆船がひそかに一人の小女郎を乗せて岬南に祭つられてゐる潮御前神社の前の海面を東から西によこぎらうと企てた。勿論この時代の舟人は皆神威を汚さんことを恐れて、女性は一切岬灘を乗切ることを果されないのに拘らず、此の舟の船頭としては大膽不敵の振舞である。さて舟は東から順風に意氣揚々、檜野崎を過ぎ呉崎を過ぎやがて最後の難關にかゝつた。西南の空俄かにかき曇り、風向一變、波湧き返つて、さすがの巨船を一呑にせんとする勢大膽不敵の舟人も氣勢を殺がれて策の施すべきようがない。遂に相謀つて小女郎を波の中に投げた。橘媛の美しい行のそれならで、可憐な小女郎は七人の舟人の犠牲となつて、無慘な最後を遂げた。

舟は難をまぬがれて遂に難關をきり抜けたのであらうか。否、否、否、波は益々兇暴を逞しうしてやがて舟も人も海底深く呑まれてしまつた。小女郎の怨靈は大きなあはび(方言かひ)となつて大きな釜の底に附着して永久に海底に生きてゐる。物移り星換れども、浪浦の女郎島附近は永久に海の静かな日が来ない。漁夫は特に警戒を加へてこの巖に近づかない。

明治の初年快晴の日歸港を急がぬ二艘の漁船が、牧崎から發動機で競漕を始めた。女郎島の附近に來り一艘は近路をとつて島に接近した時、大波が俄に起つて舟を覆へし積載の網に卷かれて、和田左文衛門なる母一人子一人の漁夫が溺死を遂げた。母は悲嘆にくれつゝ子の冥福を祈つて孤獨の一生を終へた事は、今更吾等が父祖母の語草となつてゐる。

## 通夜島 (串本)

神功后皇が船にお乗りになつて熊野へ御出になつたが海が大へんに荒れて船は流され流されてとろ／＼大島の南に在る一つの島にお着きになりました。そしてその島で一晩を明かされましたから通夜島といひます。

その時串本と大島と出雲の船が御出迎へに行つた所が串本の船へ乗られて今の本之宮へ御成り遊

ばされたさうであります。その記念として本之宮には御鏡と御櫛とが置かれてあります。それから  
は串本では毎年祭典には大島と出雲から一人づゝ選手を出させて本之宮弓の試合をして居ります。

### おほな魚（和深）

私の村和深に「大菜」と云ふ魚がとれます。それはくゞ大きなものです。丁度菜のおいしい芽ばえ  
が出て家々のお膳には菜の「オカズ」が上る頃から菜が成長して花が咲き實のなる頃まで此の魚が捕  
れるのです。そして貧しい家にも金持ちの家にも出来た菜と共にたかれてその芳味をほめられなが  
ら食べられる魚なのです。此魚は珍らしいことには外の村にはとれないで只私の村にのみ捕れるの  
です。そして又そのとれる期間も短いので非常に重寶されます。これには面白い傳説があります。

それは始めから私の村には捕れなかつたのです。所が今から大分前のこと私の村の某漁家へ一人  
のみすぼらしい行脚僧が非常に疲れきつた顔つきでやつて来て「何か食べるものはありませんか。  
あれば何でもかまいませんから少しやつてください」と云つたのでした。その時は寒い冬でした。  
彼僧は空腹と寒苦とでうちふるへてゐました。

この言葉をきいた某家ではそのみすぼらしい姿をいたはり暖かい御飯を與へ、又熱い茶まで與へ  
た。旅僧は勿体ないと御禮をくりかへし乍らそれを戴だいた。食べてしまつてから行脚僧は猶も  
禮をかさねて云ふには「この十里沖百尋の所におほなといふ魚があるから漁に行きなさい」と告げ  
て何處へか去つてしまつた。

この家の主人は喜んで隣家の人々にも此話をつけて早速漁に出たさうです。行脚僧の云つた通り  
果して今までに見たこともない珍らしい魚が澤山とれたのでした。そしてそれはあまり大きいので  
彼は嬉しい中にも驚きと不思議とにみたされたのでした。

その明る日はもう此の話が村中にひろがつた。そして誰云ふとなく「それは御大師さんぢや。御  
大師さんが情を恵まれたのだ。」と云ひ出した。それから毎年菜の成長する頃には漁舟が澤山出るや  
うになりました。

おほなの捕れるのは毎年春ですがそこをおほな地といひつてよく釣れる場所がきまつてゐます。  
その形は鯉に似て目方の三十貫以上もあるのが捕れることがある。又おほな魚は方言ちゝこといふ  
頭の大きな河にすむ魚にも似てゐる。

舊曆七月廿一日には村人が集まつて餅投げをする。餅を拾つたものはそれを戴くと功德があると  
いふこれも弘法大師を信仰するからです。

## 雨島の宮 (和深)

和深村の「雨島」と言ふ所に「キノモト」と言ふ宮があります。此の雨島には「キウリ」は一本も造ることができません。外の所から「キウリ」をもらつて食べるのです。それも外の家から持つて行くに此のお宮の前を通つては行きません。他の山道を通つて持つて行くのです。それは此のお宮の神様が胡瓜を嫌ひなのです。だから宮の前を通らないのです。お宮の前を胡瓜を持つて通れば手にしつかりつかんで居てもすべり落ちると言ひ傳へて居ります。不思議な話です。

## 楠の木之神 (有田)

氏神有田神社は昔は大字吐生と云ふ所にあつたが大水が出て宮殿ごとくく水の爲に流され現在ある有田上の大きな杉の木に至つて懸つたのであつた。そのまゝ其處に社を定めたものであると云ひます。そしてこの宮にある周圍六丈餘の楠の木は其當時この木を神となして参拜したとの事であ

る。その木の上を吹く風の音の様子で明日の天氣や日々の村の運勢など知つたと云ふ傳説がある。

## 河童と牛 (江住)

私の古郷は江住村ですが昔から河童が河の中から出て来てあばれるといつてゐました。所が例の河童が出て河岸で草を食つてゐる牛の綱を捕へて河の中へ引きずり込まうとしましたが牛の方が大い力であつたと見え却つて河童が引けずられながら尙手を放さずとう／＼お寺の門前迄やつて来た。それを見た和尚さんはやさしく、河童に向つて「河童よ此の豆を此所に蒔いて置くが、もし是が芽を出したならば河から出て来て来てもよいが、さうでなかつたら出て来てはいかん。」と云ひながら煎つた豆を蒔きました。煎つた豆は金輪際芽を出す氣遣ひはありません。それ以來河童が出なくなつたさうです。今でも絶えず水が出たりは入つたりして波が／＼音を立てゝゐる暗い深い岩穴があります。そこに河童が居たと云ふ事です。

## 遠良浦のがば (江住)

江住村里野に遠良浦のがばといつて大きな岩穴がある。中は眞闇く何處で穴が切れてゐるのだから

わからない。昔からこの穴の奥まで行つた者はないといふ。穴の口に行くと中の方で異様な無氣味な音がして物凄しい潮が來るとその穴の口には行けない。昔は穴の上の禿山で美しい／＼娘が唄を歌ひながら糸をとつて居るのをよく見たさうである。その美しい唄の聲が波のさあ／＼とさゞめく間をとらして耳に入れば一心に魚を釣つてゐる人もその聲に引かされ魚つりの事も忘れてその方へ／＼とひきつけられて行つて果ては恐ろしい岩穴へ引きこまれるのだと聞く。

この眞闇な穴はそこから一里先きの大山の大瀧へ續いて主はこの穴を通行して海に來たり大瀧に歸つたりするさうである。大山の大瀧には海の貝殻や砂が持ち運ばれてゐるさうで、波の高い時は瀧にまでひびく響くさうである。

或る時鹿をこの穴に追ひこんだがいく時たつても出て來なかつたさうである。何そんな事はないとその巖窟の中に行く人があつたがどれ程奥へ行つても／＼奥はますます／＼廣い。そしてワーンジャラ／＼と奥の方で異様なもの音がする。これには如何な大膽者も恐ろしくなり色を失なつて出て來たさうである。その時あの恐ろしい穴の主に出あつたらどうであらうか。主はその時丁度大山に行つて居たのであらう。

## 二人のかたわ (江住)

昔次郎兵衛と太郎吉といふ者があつた。二人共大釜の奥で炭を焼いて居た。この二人は未だ海邊へは出た事がなかつた。

あの少し大きな釜の中位しかない四方山で圍繞まれた大釜の土地をさへ彼等は雜貨店もあり茶店もある町よりは餘程よい位に思つてゐた。炭焼小屋のことだから屋根は杉皮、壁は椎薪、家の廣さは席二枚敷ける位のものだつた。それでも住めば都大釜はよい所とばかり思つてゐた。

或時二人は炭を一釜焼いてから一度海へ行つて見ようと相談した。そして仕度は出來た。が二人共不具者であつた。次郎兵衛は鼻かけ。太郎君はちんばで足がかゝんでゐる。これは困つた。これでは灘の人々の嘲笑を買ふにきまつてゐる。二人は色々考へた。と次郎兵衛ははつたと手を拍つて妙案々と叫んだ。自分ながらこの頓智がよく出たものであると獨り悦に入りながら太郎吉の所へやつて行つた。

お前は糞ふんだ／＼といつてちんばをひけ、俺は臭い／＼鼻むけはならんといつて鼻をおさへて通らうと言つた。太郎吉も此妙案に思はず吹き出すやら、手をたたくやら其頓智を喜こんだ。二人は急に元氣が出た。朝早くより雪の様な白飯を炊いて出かけた。足並は輕かつた。山また山を越えてやつと町へ出た。そして豫ての妙案はまんまと功を奏した。町の人々は何等二人の舉動をいぶかり怪しむことなく、ほんとにちつとも氣付かなかつたらしい。かくして二人は無事町を通りぬけ海



邊へ出た。生れて始めてほんとに始めて廣々とした海をながめ汽船、帆かけ舟の通行するのを見た太郎吉は驚いておーとのし上つた。そのはづみに足のかゞみは伸びた。次郎兵衛は海を見たといふ自慢でかけ鼻は天狗の如くなつて無事山奥へ歸つたとさ。

## 八 人 塚 (江住)

奢る平家は久しからずあはれ權花一朝の夢、無慘にも一の谷の合戦には源氏の爲に討ち破られてこゝに落武者八人は西牟婁郡江住村鳥越浦の御待の坂へ落ちのび來り待てども暮せども大將は遂に來なかつた。こゝに彼れ等八人時の大籤と云ふ舊家に道具を藏めて裏の畔道を通り小高い山の麓へ行つてあはれにも果敢ない最後を遂げたと云ふ。

現在江住村を流れて居る川の上流十五六町行くと八人塚と云つて淋しさうに八箇の石塔が苔に蔽れて石に刻まれた文字も風雨にさらされわからなくなつて谷間の中に轉がつてゐるのを見るであらう。御待の坂の大松や大籤の古家などは今も昔を語つて居る。

## 筆 島 (田並)

村の海岸から程とほからぬところに筆島と云つて筆の様な形をした島がある。此の島は元は太く短い島であつた。或る時土地の漁夫が鰯を取りに行つた。あたりは眞の闇で僅に魚の腹が夜目に光つて見えるばかりだつた。愈々網を揚げるとなると非常に重い。大漁だと喜んで揚げると腹が光る様に見えたのは大蛇の鱗で、件んの大蛇の眼光はいやにももの凄く口から火を吐かんばかりにして漁夫達を睨むのであつた。

漁夫等は皆驚いて船の下へ入るやら上を下へのさわぎをして居る間に蛇は悠々と岸に渡り筆島をとりまき、力を入れると見る／＼島の形が今までと變り小さく細い島になつたと傳へられてゐる。

## こんびらの淵 (田並)

田並川中流にこんびらの淵と云ふのがある。此淵の一番深い所に細長い穴があつて有田村の川の下流に通じて河童が兩川を往來すると云ふ事であつた。

或時田村と云ふ家の馬が水に足を入れて居ると其の穴から河童の手が出て馬の足にまきついた。馬は驚いて逃げやうとして後脚をピン／＼跳ねるのであつた。とう／＼河童の手はちぎれた。馬はちぎれた河童の手の脚に纏つたまゝ逃げ歸つた。家人は其の手を取つて奥の座敷に置いた。

すると其夜半のことである妙な聲が戸外に聞えた、よく耳を敏てゝゐると「手をくれ、手をくれ」と呼ぶのだつた。それではといふので家人は一つの誓を立てさせて手を與へることにした。それは四つの條件であつた。一、煮た豆が生えるまで二、川が上に流れるまで三、日が西から出るまで四、岸のよのみが向ふ岸に着くまで此の四つの一つが行はれるまで田並に来てはならないといふのである。今に於ても大きなよのみが向ふ岸に着きさうになるとその枝を切つて居る。

## 双 島 (田並)

昔直徑二尺五寸五分長さ十二間位の大蛇がベラ／＼と赤い火を吐きながら双島より我が田並村へわたつて来たといふ事である。それはこの双島に二匹の大蛇がすんで居た。それは雌雄でこのへんの人はぬしと稱して居た。或日一人の獵人がその雌を取つて来た事がある。この雌にあひたさに双島より雄が會ひに来ると云ふ事である。

## 鎧 石 (田並)

明治維新前のことであつた。仇敵と狙はれてゐた一人の荒武者が此の田並の土地に来て上地の行

者山の上に一小城を築いた故に其の山の下にある家の名を城の下と云ふのである。傳へ聞くところによると

仇敵の荒武者なるものが山上の小城に立籠つて居、家來數名は山麓に居つた。大將が用のある時は矢文を以つて家來に報じ用を足したと言ひます。其の中に彼等は敵の爲に討たれて城を焼き捨て、自分等の着てゐた鎧を一々地中に埋めて相果てたことであると云ふ。今も尙その鎧を埋めてあると云ふ印に一つの圓い石を置いてゐる鎧石と云ふのがそれである。

又今も山上に三十坪位の廣さの平坦な芝生がある。中央に一千兩と刻んだ一石碑がある。それはこの人々等が持合せの金子を埋めたものであるといふことである。そして其所には當時の人々を記念する爲の小さい祠があつて今も毎月二十九日にこの山上に人々が參拜する。

## 旭 の 森 (潮岬)

武内宿彌が應神天皇を守護し奉り、熊野御通りの時、御崎旭の森に御登りになり、遙か太平洋の彼方幅廣う流るゝこゝ熊野灘の海原より今しさし出づる旭を御覽せられて御感斜ならず御製をお作りあそばされたといふ。今に至るまで此森に注連引きわたし神主の外登らないといふことである。

近時無線電信に通づる電信柱が立つて昔日住民尊崇のあとも漸次に荒廢せんとしてゐる。

### 番所の芝（潮岬）

御維新前黒船の來るのを見張り番せし所で長い石垣を繞らし、其東南に突出せる「狼火の鼻」より狼火を擧げて、江田の大庄屋に報じた。よつて番所の芝の名がある。

近來海岸望樓を建設してより望樓の芝ともいふ。この邊一帶に黒潮熊野灘を一眸の下にして風光絶佳である。

## 東牟婁地方

## 佐吉と鯨（太地）

南の國熊野の一端に太地と言ふ港があります。そこに一人の一兵衛と云ふお爺さんがあります。一兵衛爺さんは村の小供達を集めて話をするのを好んで居りました。そしてその話はきつと鯨のお話でありました。それで村の小供達は鯨の一兵衛爺さんと呼んで居たのでした。或日も子供達を集めてこんな話を致しました。

「昔々、それは此の爺さんがまだ小さかつた頃です。此の太地の港に佐吉と言ふ人が住んで居たのです。その人の家は代々鯨捕りをして居りました。そして此の村で鯨捕りの名人と言はれた位上手だつたのです。その佐吉さんは或晩眠つて居ると「佐吉さんく」と誰か呼ぶのです。佐吉はひよつと目を覺ますとそこに大きなく鯨が居りました。さすがの佐吉もこれにはびつくりして居りますと、鯨は大きな口を開いて、

「佐吉さん、明日此の沖を子連れの鯨が熊野權現さんへ參詣に行くのが通るからどうぞ見逃がして下さい御恩は決して忘れません」

と言つて鯨は姿を消してしまひました。

やがて鶏が鳴いて、東の空に赤い丸い大きなお日様が昇り始めて夜が明けました。佐吉は昨夜の夢などは氣にも取めずに居りましたが不思議にも晝前に遙か沖に子連れ鯨が表れました。元から鯨捕りをするやうな男ですから、

「何鯨が熊野参りをするやうな事はない」

と言つてその鯨を二つながら捕へてしまつたのです。それで佐吉は大金持になりましたが、それから佐吉の家に不幸な事が續いて、とう／＼しまひに佐吉の乗つて居つた船が難船して佐吉も死んでしまひました。それから間もなく佐吉の家も跡絶えてしまひました。

## 山の御殿（高池）

池野山を過ぎて一つの大きい坂をこすと「楠」に至る。この所は昔は「楠村」と云つたが今では高池町に編入されてしまつた。しかし人口は數へる程しかない。

この村にはいろ／＼な云ひつたへがある。

昔この村落と池野山（高池町大字池野山）との境の山の中腹にいつの間にか壯麗な宮殿が建てられてゐた。麓の村人達は屋根と云はず壁と云はずキラ／＼山の林の中から黄金色に光る不思議な御

を眺めながら暮した。

ところが更に不思議なのは麓の村にはたとへ雨のふらぬ日でも、その山の御殿には空が掻き雲つて雨のふる日が多かつた。さうした日には黄金色に光るその御殿はいつの間にか夢の様に消えてしまつて、その跡にはたゞ一つの古沼が木の間から雨に煙つて見えた。

村人はそれを見てあれは山の神のお住居だと云つた。あれは此村の守護神だとも云つた。そして誰一人も此山に登つて行つて、不思議な謎の御殿の正體を見届けようとする者がなかつた。何故なればこの山に一人でも登つた者があつたらその村にはたちまち悪い疫病が流行して、村中の者が全滅して仕舞ふと云ひつたへて、村人達は恐れて居たから。その山の地は人間の踏む事の出来ない清浄な地だと思はれてゐた。

雨の降らぬ日は山の空には美しい星が多く輝いた。そして何人が吹くのかそれは天國から漏れて来る様な美妙的な笛の音が、村の山に聞えた。その美しい笛の音を聞くと不知々々眠りに誘はれるやうだと村人達は云つた。

その頃からたれ云ふとなく、あの御殿には月の精のやうな美しい若者が一人住んで居ると傳へられた。けれ共たれも其若人を見た者はなかつた。盆踊りも過ぎて女も男も皆田へ出て働く秋が來た。

「今年もどえらい豊年だぞ。山の神さんが恵んでくれたんだ」と村人は云つて喜んだ。

その村には亭主に早く死別れた女主人と二人の娘との三人暮しの村一番の大金持があつた。そしてこの村の大部分の土地——田畑——はこの家のものだつた。

村の小作人等は此女主人の地主を村の大屋さんと云つて尊敬した。この大屋さんの姉娘は龜の生れ變りのやうな醜い娘であつた。けれ共娘はやさしい心の親孝行者であつた。村の人達のうちには「なんぼ長者の娘つ子でも可愛さうにあれでは一生獨り婆で暮さなあなるめえ」と蔭口を云ふ者さへあつた。それと反對に妹娘は花の精の様に世にも稀なる美人であつたので、近所隣村からも降る様に縁談が來た。けれ共妹娘は「姉が嫁入らぬ先にはいやだ」と云つて訊かなかつた。

村の親達は生れたばかりの我が子に「大きくなつたら大屋の姉娘の様なやさしい子になれ。そして妹娘のやうに美しくなれ」と云つて育てた。

秋も半となつて村人達は皆田へ出て行つた。その頃から姉娘は時々家に姿を見せぬやうになつた。夕暮になつて村人達が田から歸る時分に山の麓の方から獨りとぼとぼと娘は歸つて來た。そんな日が幾日か續いた。「あれは山の御殿の若者を思つて居るんだ」と口の悪い者等は云つた。そんな言葉がいつか母親の耳にもはいるやうになつた。

「お前は毎日そんなに何所へ出て行くんだ」と母親に訊かれる時があつても娘は何にも云はなかつ

た。そしてやはり毎日出て行つて夕方になると山の麓から獨りとぼとぼと淋しさうに歸つて來た。さうした日が一ヶ月もつゞいた後の或る日娘は夕方になつても到頭歸つて來なかつた。母親は狂人のやうになつて姉娘の行衛を心配したが、村人はあの山の御殿の神の崇りを恐れてたれ一人として山へ登つて行かうとする者もなかつた。そして一日は過ぎ二日は過ぎた。たゞ一人の姉を失つた妹娘は村人のとめるのも訊かず姉を探しに山へ登つて行つた。それきり妹娘も又歸つて來なかつた。姉妹娘が居なくなつてから村には稀な好天氣がつゞいた。御殿はきら／＼とまばゆいばかりに輝いた。けれ共その晩から笛の音は聞えて來なかつた。村人達は皆田へ出て行つた。そして娘を失つた母親は一人寂しく日を暮した。

或る日妹娘は美しい姿をして大屋の内へ歸つて來た。母親は夢かとはばかり驚き喜んだ。妹娘は姉の事をもう忘れてしまつたやうに何も云はなかつた。そして「自分は山の御殿の美しい若者に嫁いだのだ。そして二人で楽しく暮してゐるけれ共決して其所へは訪ねて來て呉れるな」と母親に云つた。「もし山へ登つて來て呉れたらお母さんの命はないのだ」と云つた。夕方になつた。娘は若者が待つてゐるから歸らねばならぬと云つて母親の止めるのも訊かず山の方へ歸つて行つた。

それから二三日してから娘はまた訪ねて來た。母親は台所で晝食の支度をしてゐた。娘は今日は非常につかれてゐるから暫く休ましてくれと云つたので、母親は奥座敷へ案内してやつた。

其時娘は母親に「どうか自分のねむつてゐる間は決して私の姿を見ないで下さい。萬一その姿を見られたならば私はもう再びこの家に来る事が出来ないから」と云つて自分が這入ると座敷の戸をかたく閉め切つた。

娘を休ませた母は先刻娘が云つた不思議な言葉が氣になつて不安でならなかつた。娘が自分の姿を見られたならもう此の家には來られぬと云つた。けれどもねてゐる時だつたら知りさうな筈がないと思つた。母親は暫らくしてから足音を忍ばせて座敷に近寄つて、そして窺ふやうに襖を細目に開けた。と同時に母親は顛倒せんばかり喫驚した。そこには十疊の間に一ばいに擴がつて皿の様なつた大蛇がねむつてゐた。そして眞中には可愛い、自分の娘の首が抱かれて共に安らかさうにねむつてゐた。浮くやふに重なり合つた大蛇の大きな鱗は凄艶な黄金の色を放つて座敷中を目映ゆいばかりにしてゐた。母親は臆て以前の如くに襖をしめて台所の方へとさがつた。

半時間程経て娘は起きて來た。その姿は以前の通りの美しい自分の娘だつた。娘は何も知らぬかのやうに母親に種々な話をして夕暮まで居た。そして山へ歸る時「お母さんがくお世話になりました。けれ共もう今日限り私は此家に来る事が出来ません。お母様の顔を見る事も出来ません」と悲しさうに云つた。母は驚きそして悔いて泣いた。日が暮れた。娘の姿はもう見えなかつた。

其の日の夜半になつて山に暴風雨が起つた。そして間もなく村にも來襲した。村人達は突然の此

の來襲に驚きながらも夜明けを待つた。けれ共暴風雨は益々烈しくなつた。そんな日が數日つゞいた後山の方から大洪水が村を襲つた。村人達はあの雨の日に、見えた山の御殿の跡の古沼が崩潰したのだと云つた。

今ではもう車の通れる程の道も大部分出來たがその山の御殿のあつた所だけはなかく道も出來かねるやうな場所である。

### 蒔かずの稲田 (西向)

西向村古田の盡くる處、重疊山の磐根に接して一軒の離れ屋がある、當家の主人は白石吉藏と云つて、此白石家から近い一步の田は、古來蒔かずして稔る不可思議な佛縁を持つてゐる田である。

頃は弘化元年の春まだ浅い二月半だつた。朝の仕度を整へて居る白石家の軒端に立つた一人の旅僧があつた。身には破れた衣こそ纏ふては居たが、其面もちは遍照光の相を現はし、溫威を備へたゆかしい僧であつた。主人の新兵衛友綱は小山の一族として聞え、殊に佛道に信仰が厚かつた。

旅僧の誦する經文は、而も未だ聞かざる心を動かすものがあつた。新兵衛友綱はかけ寄つて此旅僧を先づくと我が家へ招じた。

「旅の勞れも在はさうに、むさき家ながら善根の寸志何卒一夜なりとも……」と勞らうた。  
「難有し一音は十方に遍ねく善根は末代の爲めこれ金剛心の所由、之れ邦家安心の締也」と賞讃した。この旅僧こそ空海弘法の前身であつた。

新兵衛一家は、此僧を有らん限りに勞らつた。そして閑を得ては佛道の奥底を聞き波羅密多心經の講義をも聞いた。實に磐若心經は佛道を悉くした聖典であつた。

觀自在菩薩行深より説き起して、諄々として説く處は悉く聖者の聲と響いた。

「菩提藍埵依般若波羅密多」

の條を説くに至るや新兵衛、廓然として悟道し、遂に師傳弘法に従ふて重疊山開拓に力を盡した。後空海上人が此地を去るにのぞみ、

「御恩報施の爲め……」とて此地一圓の田園を蒔かずして稔るべしと念じ、思ひ多き此地を後にしたが、其後數代、此附近の田は年々に豊饒にして、干魃天災を知らず、不思議の田として傳へられて居たが、年處の久しき、多くの田地は自ら人手に移ると共に田は舊の荒地と化し、或は山崩れの爲めに埋もれ、今は僅かに一步の田を残すのみになつた。今猶弘法蒔かずの田として不思議の傳説と共に今日も蒔かずして年々稔つてゐる。

弘法大師が重疊山開基にからまる此蒔かずの稻田と共に白石家重疊山開山の功勞は永く傳へられ

たものである。

## 那智山縁起 (那智)

補陀洛や岸打つ浪は三熊野の

那智の御山にひゞく瀧津瀬

西國一番熊野より三十三番谷波までの御詠歌は人皇六十五代花山天皇が親しく御順拜の砌御製あらせ給ひしもので苟も其名號を唱ふるものあらば直ちに苦縛をお解き下さる意味であります。

當山の別願和讃に

南無や大悲の觀世音

苦海の我等を助けんと

寂光無爲の都より

那智の御山に出現し

五濁の垢を瀧津瀬の

清き流れに洗ひつゝ



皆得解脱の鳥の聲

便得利益の花の色

願はしなく變れども

今世未來の二世かけて

救はせ給ふ御誓

施無畏の御手に縋るべし

今を去る千五百餘年の大昔人皇十七代仁徳天皇の御代、天機獨發深く修禪の妙境に達せられた裸形上人が此那智山を以て神仙の靈場と定め朝には飛瀑の淨潭に心垢をそゞぎ夕には眞如の牀に端坐して怠ることなくひたすら苦行を續けて居りました。が感應空しからう筈がなく或日天地震動するかと思ふ利那不思議にも瀧壺の間から御丈八寸の靈像が忽然として立ち現はれ其の尊像から無邊の淨光をかゞやかして四圍に立こめてゐた雲は光に彩られて五色の絹を張りつめた様でありました。

上人は喜かぎりなく唯々稽首合掌して念佛稱名して恭しく掌を捧げ給へば尊像は直ちに上人の手にのりうつゝた。此から上人の練行の志いよ／＼堅く本堂のある地に庵室を結んで其靈像を安置し心事の供養倦む時とはなかつたが上人はたゞ生果を食するだけで聊かも且夕のたくはへもなせず里人が衣食を供養しても之を用ひたことがない。それで世人は皆な無染無着の徳を表はして裸形上

人と申しました。

此事があつて長い年月がたつて推古天皇の御代に生佛和上が此の地に遊行して來て壯嚴な那智の飛瀑にうたれ百日の間普門品を讀誦したのであつたが、此願滿つる百日目の夜に裸形上人生佛和上の夢にあらはれて告げるに「我れ今汝と多劫の宿縁あり、汝を待つこと年久し、我か昔苦行の砌り瀧壺より出現したまへる御丈八寸聖如意輪觀音の尊像庵室の石匣の裡に安置せり、速に尊像出現の由緒を朝廷に奏し奉り遺跡の地に本堂一字を建立し天地長久寶祚無窮を祈り、普く衆生を誓願して救ふべし」と告げ夢は忽ち醒めました。

和上は此の靈夢を蒙り感涙に袖を絞り信念肝に銘じて一山の衆會を催して天聽を経て本堂一字を建立し和上自らは玉椿の靈木を求めて一刀三禮して御丈一丈の坐像を彫み瀧壺出現の靈像を御胸佛として納め大願を成就しました。

もぐらとくぢら (那智)

むかし文覺上人といふ大層えらい坊さんがありました。世間で苦しんでゐる人達を、どうにかして氣樂に安心してゆけるやうにしてやりたいと思ひ立ちまして、此の爲なら、どんな辛いこと、苦

しい事でも辛抱しようと思つて決心しました。そこでまづ日本一の那智の瀧で荒修行しようと思つてでかけました。途中熊野浦で、一頭の鯨が鯨に逐はれてひどく苦しんでゐました。坊さんは、

「憐れなもの助けてやらねばならぬ」

と、鯨を逐ひ拂ひ、鯨を逃がしてやりました。鯨は坊さんへ御辭儀をして、

「生命を助けて頂いた御恩返しは屹度致します」

と、言つて海の中へ這入りました。坊さんは船から上つて街道を瀧の方へ歩いて行つてゐますと、道端で一匹のもぐらもちが、どう間違つたものか土の中から迷ひ出て大勢の子供に捉まり、なぶり殺しにされようとしてゐました。そこで坊さんは子供に頼んで、もぐらもちを助けてやりました。もぐらもちは何度も御辭儀をして、

「きつと御恩返しを致します」

と言つて土の中へ潜り込みました。もう瀧の音も聞える程近づいて來た時分でした。不意に可愛らしい子供が、坊さんの前に現れて、

「旅の坊さま、どこへ行くのです」

と尋ねました。坊さんは、思ひたつたことをすつかりお話し致しますと

「瀧には恐ろしい天狗が棲んでゐます。若し天狗が出て來たら、之を甜ぶらせてやりなさい」

と言つて可愛らしい子供は、坊さんに飴の入つた壺を渡して其のまゝ消えてしまひました。この可愛らしい子供は観音様が假りの姿で現はれたのでした。坊さんは観音さまから頂戴した飴の壺を持つて瀧へ着きました。

そして下から見上げますと、何しろ高さが五十丈幅が十八丈もある日本一の大きな瀧ですから水の落ちる音がゴー／＼と山に響いて、見た丈でも目まひがしさうな物凄さでした。さすがの坊さんも思はず後退りをして四邊を眺めてゐますと何處からとなくヒュと舞ひ風が起つて怖しい天狗が飛び出して來ました。天狗さまは坊さまへ六ヶ敷い難題を持ちかけて、若し坊さんが問答に負けたら掴み殺すと申しました。坊さんはニコ／＼笑ひながら、

「さあ御土産を上げませう」

と言つて、飴の壺を天狗に渡しました。天狗はちよつと甜めて見ると美味い／＼飴でしたので難題のこととも忘れてニチャ／＼と飴を甜めてゐました。其の間にもぐらもちも御恩返しはこの時と世界中のもぐらもち總掛りになつて、瀧壺から海の底まで二里ばかりの間、墜道を掘りました。そして瀧の水を海の中へドシ／＼流し出し初めました。是れを見た鯨は又御恩返しは此時と世界中の鯨總掛りになつて墜道を通れる瀧の水を片端から吸ひ込んで、もぐらもちを溺れ死なぬやうにしてやりました。坊さんの文覺上人は瀧の直ぐ下手の流れがたいさう水量が減つて樂になつたので、そこで荒

修行をしてえらい坊さんになりました。もぐらもちが那智の瀧から掘つた鑿道は勝浦といふ湊の海の底に出てゐまして今でも綺麗な眞水が海の底から湧いてゐます。又世界中の鯨は今でも吸ひ込んだ水を暇さへあれば海の上ではき出してゐます。文覺上人荒修行の場所は今でも那智の瀧に残つてゐます。天狗の甜めた飴は那智飴と云つて名産になつてゐます。

### 河内大明神 (高池)

古座川に沿つて川上の方に高池町大字宇津木と云ふ處に至ると丁度川の曲つた處に深いく淵があります。其處に翠綠滴らんばかりの樹の繁つた島があります、その島の中の祠がこゝにいふ河内大明神である。

明治の始までは其の祠へ毎年男女二人の子供を「いけにへ」に供へる事になつてゐて丁度祭の前々晩には十歳位の小供のある様な家へ白い矢を軒下にさして行く。あはれその家の小供は「いけにへ」にならなければならなかつた。其の家の人々は狂せんばかりにそれを悲しんだ。なぜなれば運命に呪はれた犠牲者としての子供はもう再び歸つて來ないからである。そこで村の人々は心配して、かく毎年々々小供をさし上げてはたまらないと云ふのでこの島の上に祠を立て諸々の神主をよんで祈

をして毎年そこで祭をするやうになつて今では「いけにへ」を供へる事がないのである。

### 魚植の瀧 (七川)

東郡古座川の源なる、七川村の大河山中に高さ四五十間水ゆたかにして岩に激し白龍玉を跳らすが如き一條の瀑布がある。里人はこれと呼んで魚植の瀧と云ふ。

昔この大河山に住む木樵の兄弟が有つた。兄の方がある日海邊に出て一尾の魚を買つてきた。魚の名前は分らないがなんでもたいへん美しい魚であつた。兄は携へ來つて弟と共に此瀧の前で料理した。深山の中で二人がわけあつてその魚を食べた。それがこの世に又となない程の美味であつた。兄弟はこの美魚をたべてしまつてから、こんな魚は又とたべられないのだからなんとかして、この山中に住ませたいと思つた。そこで二人は魚に靈あらば吾等が願望を叶へさせたまへと祈りながらのこつた魚の尾を瀧に入れるとその尾は悠然として泳ぎながら瀧壺に入つた。それからこの瀧に足の六本ある魚がすむやうになつた。その魚を佛の小魚といふ。又その瀧を魚植の瀧と呼ばれるやうになつた。

## 七川村の先祖（七川）

今もなほ寂しい村であるがそれよりも尙寂しい且つ開けなかつたところは漸く家が二三戸建てられ至る處茫々として草が生へて道さへなかつた。今の田畑も、そのころはみんな草原や森であつた。七川村西川の昔、村上清重なる者が、何時頃の時かはかり知れないが、賊の爲に追ひつめられて此の西川に來て隠れた。賊方は追ひかけて來たがふと彼の姿を見失なつた。いくら探しても見當らない。仕方がないので遂に賊は歸途に就いた。

丁度その時或竹箬で何かバサ／＼と音を立てゝゐる。賊は之を聞き引き返して探してゐた處一匹の鹿が出てあちらの方へ驅けていつた、賊は又歸らうとした時再び音がしたので引き返して探して見たが、一羽の鳩より外に何もものもなかつた。

かくして賊は歸つて終ひ村上清重は山深く入つた。そこで野生のものを採り或は粟を食つて永住した。それから清重がこの村の先祖となつたといふ。

## 十七岳（古座）

東郡古座川を約半里溯れば左に雲表に沖して屹立した高山がある此山を十七岳といふ。この十七

岳の名の由來を尋ぬるに此山の附近に十七歳になる美しい娘があつた。或時悲しいことがあつてこの山の上から傘をさしたまゝ古座川に向つて飛んだ。すると首は首谷に飛び足は足谷に飛び手は手谷に飛んださうだ。

## おたへ山（七川）

古座川の上流で東牟婁郡の極北に位して居る七川の松根といへば村の又極北で昔は人跡未踏の地と稱へられて居た。この松根の一部落に太甲といふ七軒人家の一區は俗に松根太甲といつて山又山の部落眞に幽豁窮僻の地である。此處に哀艶悲痛なおたへ兄妹にかゝる傳説がある。おたへには清七、捨吉といふ二人の兄があつた。

おたへ……それは野に咲く百合の色香にもまさる……見るからに此の深山に珍らしい美女であつた彼女の家は村外れの川邊に處にあつた。碧山と清溪の此寒村に生れた無垢の乙女おたへの嬌姿はいふまでもなく在所の若い男達の戀心をそゝる目標となつた。

こゝに兄二人は獵師であつた。此の太甲の向ひの幾つかの山を越へた所に昔から怪物が住んで居ると云ふ峰山があつた。然し此の怪物を誰一人として退治した者はなかつた。

或夜おたへは使に出たきり兄二人がいくら待つても歸つて來なかつた。兄弟は心配して彼女を捜すべく家を出た。すると森蔭を黒い一つの怪物が人を片腕に抱へて向ひの山に向つて一足に二十間位づつの早さですん／＼と飛ぶやうに走りながら闇の彼方に消え去るのであつた。兄弟二人は顔見合して驚きの目をみはつた。もしもおたへ子が一ふと足もとにおたへの草履の落ちてゐるのを見た。兄弟は一先づ我家へ引返し獵銃をおつとり、すつかり狩人姿の支度をして峰山を指して眞夜中に怪物の後を追つた。

毎日山又山を狩ることになれた山道のことゝて飛ぶが如くにして後を追ふのであつた。けれども夜の事とて深い峰山は黒白もわからぬ暗さでさすがの兄弟も困じはてた。それでも兄弟二人は一刻もおたへの身を案するあまり別れ／＼になつて山中を探す事にした。一時間程経たと思ふころ向ふの山中で銃聲が聞えた。此方の山を探して居つた兄の清七は弟が確かに怪物を見つけたのだと思つて一目散に音のした方向にひた走つた。走つて居る中にこんどは續けさまに又銃聲が聞えた。彼は銃聲の方向を目あてに山をわけて辿りやがて川の傍に出た。四邊は不氣味な程ひっそりとして何の變つた事も見あたらなかつた。兄の清七は聲を限りに捨吉、捨吉と呼んだしかし何の答へもない。唯だ夜半の寂寞を破つて彼自身の聲が山から山へ反響する山彦のもの凄さに身の毛もよだつ恐ろしさがあるばかりであつた。

しばらく清七が銃を杖に付んで居ると山の彼方の谷底からかすかにオーイオーイと呼ぶのはたしかに弟の聲續いて女の聲—それはおたへの兄を呼ぶ聲か、清七はいても立つても居られない、銃をおつとり又もや聲する方向へ走り出さうとする時目の前に突如黒い怪物が姿を表はした。清七は怒り絶頂に達し弟妹の仇思ひ知れと怪物に向つて引金を引いた。ズドンと一發深夜の深山の寂寞を破つて物凄しい餘韻は山から山へ谿から谿へ反響した。

と怪物はグラ／＼と笑つたかと思ふと五尺位むく／＼と一度に背高くなつた。さうして彼方へ飛びのいた、彼が二發目を打つと又グラ／＼と笑つて怪物の丈は更に二間位の高さとなつた。清七は續けさまに弾丸を打つた。打てば打つ程不思議にも丈が高くなるばかりで少しも命中しない。最早弾丸も餘す所あと一發となつた時清七は何丈とも知れない怪物の足元を覘つて打つた。すると怪物は大木の倒れるが如くドツと清七に肉薄したかと思ふと矢庭に清七に飛びかゝつて彼をひつ攫むと何處かへ消え去つた。其後此の峰山には眞夜中になると三人の兄弟がかわる／＼名を呼ぶ聲が聞えるさうだ。村人は此峰山をおたへ山と呼ぶやうになつた。

### 愛宕神社の由來 (高池)

烈風は行者、愛宕の兩山の間の清水の町を思うさま吹き荒して居た。人々は雨戸を固く閉ざして

薄暗い中で慄えて居た。その時だその物凄しい烈風の中に「火事、火事」といふ女の聲が聞えた。

人々は水桶をもつて出たときに清水の町の中程にある豪家中西の家から火を出してさしも廣大な同家を火燄でついでしまつた。人々はもはやこの烈風ではと思つて全焼を覺悟して家人を促がして持てるものを持つて川邊の廣地に集まつて焼さかる火を如何とも手の下しやうなくなつた。神佛に祈りをあげて居た。その時だ烈風に吹きまくられて、濛々と上る煙を見ながら泣叫んで居た時だ。立上る火煙の中に白馬に木の鞍にまたがれる衣冠正しき白髪の老人が、その渦巻く煙の中を掻き潜つて乗廻るのを見た。あれよ／＼と人々の呆然として此の不可思議の光景に見とれてゐる中にさしもの強風も吹き止んで猛火も程なく鎮まつた。そして同時にその人馬の姿もかき消すやうに見えなくなつた。と今まで呆然としてその人馬を見てゐた村第一の長老であり中西家の隠居である孫兵衛さんは突然「あれは愛宕様だ、愛宕様だありがたや／＼」とつぶやいた。人人は「さうだ愛宕様だ／＼」口々に言ひながら灰燼のぼつ／＼と立つ中を水をくむべく井戸邊に駆つけた時だ。天より一度にどつと雨降り出せば風なく勢衰へし火も遂に全く消えてしまつた。町の人人は雨に濡れるもかまはず「ただありがたや／＼」とのみ繰返して平伏して拜みました。

愛宕様は此の地の豪士である中西の孫兵衛さまの家の傍にあつてそれは隠居が常日頃信じて日參して居た神様で天照大神の御子迦遇土命をお祀してあつた。そして迦遇土命は火の神であられたと

いふことです。

そのことを目撃した村の人々はこの村一村を救て下さつた愛宕様のその祠を今の小祠ではと談議して全村一致で愛宕山上に宏莊なる本殿を造營してそれにその像を安置しました。まもなく孫兵衛隠居がなくなつた。そして村人は隠居の木像を愛宕さまの側に安置しました。

愛宕様の本殿は清水の町並を下瞰する山頂から今も一村の平和にあるやうにと鎮守しますのであの大火の後は此里に火事はすつかり絶えしました。

清水は高池の重要なる地位をしめて居ます。その火事のあつた時は享保年中(吉宗卿在職中)のことで享保七壬寅年五月勸請とあります祭禮は二月中旬です。

## 硯の大師 (古座)

僕の家から五町程はなれた所に高さ三間位の小さな瀧がある。

すつと昔この瀧の上に佐々木といふ姓の家があつた。その家のおぢいさんが或夏の暑い日瀧の下の淵で巖上に腰を下して夢中になつて魚を釣つてゐた。ひよいと氣が付くと何時の間にか日が暮れかゝつてゐる。歸らうと思つて魚を見ると今までピン／＼はねて居た魚が一匹もなゐい。びつくり

して茫然と薄暗い中に立つて居ますと何處かで「おちいさん魚はこちらに」といふ女の聲がするので「ハテナ今頃瀧へ女など来る筈はない待てよ耳のせいぢやないかしらん？」と不思議に思つてゐますと又前の様に呼ぶ聲がします。耳をすまして聞いてゐますと瀧つぼの中で聞えます「ハテいよいよ不思議だ、人間ではないらしい」「ゴイツてつきり狐にひねられたな」と思つて見たが生れつき元氣なおちいさん何はともあれ瀧へ下りよう死んだらそれまでだ一度は死ぬんだとそろ／＼瀧へ下りていつた。そして瀧壺をよつく見つめてゐると女の子が獨佇んでゐます。

「フン女の子だな。お前かい、わしを呼んだのは」とキラ／＼光る水面に顔を近づけようとする天女の様なほがらかな聲で「ハイ私です貴方に願がござますからどうか下りて来て下さい」おちいさんは娘の顔をジツと見て「おりてこいといへば行かないこともないが水の中に入ると息ぐるしいからな」。すると少女はやさしく手をふつて「イエ／＼目をつむつて、水を一口のんでごらんささい、息は出来ますから。」と教わるまゝに水を飲んで水中にとび込みました。しばらくして目を開けて見ると水の中には想像も出来ない様な金銀で造つた門があるそれを通り門内に入るとあらゆる草木にはきれいな花が一ぱい咲いてゐます。そして奥から美妙的な音楽が草木の間をもちて聞こえてきます。おちいさんは内の事などわすれてしまひました。目もまばゆい室に案内されました自分の前には色々の御馳走がならべてられあります。其向には自分を呼んだ少女が座つてゐます。何が何や

らさつぱりわからないでたゞ茫然としてゐました。すると少女は「ゆつくりお上り下さいまし」とやさしい言葉で言ひました。しばらく黙つてゐたおちいさんは「此所は何處の何んといふ處だ」とたづねました。少女はしづかに話し出しました。

「こゝは古座川の魚の集會所で毎年こゝに集まつて色々相談します、それは人間に取られぬやうに工夫するか、又住所を定めるといふ様な事の相談です。今日もあなたの爲に捕はれた魚をすつかり助けて病院へ送りました。あなたが折角捕つたのを横取りすると云ふのはお氣の毒ですが相談會で決議して居ますから仕方がございません。それであなたにお願いといふのはこの瀧の魚を以後捕らないやうにしてほしいといふ事です。」少女はこゝまで話しておちいさんの顔をのぞき込みました。「それは今まで知らなかつたので澤山捕りました。今後はきつと取らないやうにするから安心するがよい」「それでは約束を守つて決して瀧壺では捕らないで下さいませね」と念を押して頼みました。

おちいさんはそれから三日間と馳走になつてゐましたが四日目の朝「わしはもう歸るから陸へあがらして下さい」と言ひました「それはお名残りおしうございます。では決して約束を忘れてはなりません。もし忘れるやうな事があつてはいけないからこの硯を上げます」といつて小さい硯をくれました。おちいさんはこんなもの位と思つたが貰つて「では約束を守るから決して心配する事は

いらぬ。」といつて陸へ出してもらひました。

陸へ上つて見ると草木が繁つて自分が置いてあつた釣竿さへない。不思議な事だと思ひながら内へ早く歸らう、内では心配してゐる事だらうと思つてすん／＼自分の内へさして歸つて來ました。庭へ入ると何んとなしに自分が三日前に内を出た時より様子が變つて居ます。おちいさんは躊躇つてゐたが家へ入つてみるとばあさんは「マアあなたは三年前の今日内を出ていつてから瀧壺にはまつて死んだではございませんか。」言はれてビックリ。「三年だ。わしは三日しかおりはせん。」「イイエ貴方は出ていつて見えなかつた當時は中々の大騒ぎで死んだものとあきらめて葬式をかりにすまし今日あなたの三年忌だと言つて親類をよんで手傳つてもらつてゐるところです」「それは水の中は短かいやうで長いものだ浦島さんも三日と思へば三年だつた。然しお前も無事で何によりだ親類の方々をよんでこい」と言つて一日中水の中の話でにぎはひました。

間もなく二人はなくなり子が無いので家は絶えてしまひました。今も祠があつて硯が祀られてゐると傳へられてゐます。それから後は瀧で魚を捕るものはありません。これを硯の大師といつても參詣人が絶えませんが。

又此處の地上には盡くる事のない水があります。その水を汲んで字を書くとな手になると言傳へてゐます。

## 牛 鬼 淵 (三尾川)

古座川の支流に三尾川谷と云ふ小さな谷があります。しかし小さいと云つても水は充分にあつて深い潭になると五尋位もあります。其の谷の中の淵の一つに牛鬼淵と云ふ潭があります。今から三十餘年前此の淵から遠く離れたある山邊に住んでゐた上田又之助と云ふ當時十五歳位になる少年がゐました。

彼は學校に行くには毎朝そこを通らなければなりません。亦學校迄は随分遠い山路を通つて行かなければなりません。その通り路に牛鬼淵があるので。

或日又之助さんは元氣で學校に出かけましたが淵のそばまで來た時急に氣分がわるくなりました。又之助さんは傍にあつた平坦な岩の上に横になつて倒れてゐました。するといつのまにか眠つてしまひました。目がさめると丁度晝時分でした。やがて氣分も癒つたやうだし辨當を出してたべてゐるとそれは／＼美しい少女が何處からともなくやつて參りました。そして又之助さんに云ふには私は非常に腹がすいてゐるのですが少しでも良いから辨當をわけて下さいと云ふので根が同情の深いやさしい又之助さんは辨當を惜しげもなく分けてやりました。すると少女は嬉しさに食べ終つて御禮をいつて去りました。



それから二ヶ月もたつた頃でした。大水が出て水が谷に溢れました。又之助さんはどうしたとか渦巻く濁流中にと陥ちこんでしまひました。そして牛鬼淵迄流れてくると前に辨當を分けてやつた少女があらはれて、綱で又之助さんを助けて下さいました。そして云ふには私は此の前あなたに助けていただいたお禮に今貴方をお救けしました。私は此の淵の主ですから貴方の御身をたすけたならば私はあなたの代りに死ななければなりませんと云つて渦巻く水中に飛びこんだかと思ふとたちまちその牛鬼と變じ、牛鬼は亦隣く間に眞赤な血となつてとけて流れて行きました。牛鬼淵と云ふのは其の時から名づけられたのださうです。

### 天 磐 盾 (新宮)

神武天皇御東征の砌り初め浪花の方より大和に入らんとして長髓彦に支へられて果し給はず、紀州筋に入られんとして名草戸畔等に遮られて果し給はず、更らに遠く熊野に廻るの策を取つて、舟師を帥ゐて進ませられたが海上風波荒く御難儀一方ならず、漸くにして今の東牟婁郡勝浦港の邊に御到着遊ばされたのを茲にも丹敷と呼ぶ土蠻あつて遂に一戦となり、丹敷戸畔を丹敷浦(今の那智浦)に誅戮せられました。餘賊猶頑強に敵對しかて、加へて瘴癘の氣に侵され、皇軍いたく惱ん

だ折柄熊野高倉下命、靈夢によつて神劍を授かり、精兵を率いて馳参じたので皇軍大いに揮ひ、狭野の邊の一戦に難なく丹敷の餘黨を平げ、新宮る御手洗の磯邊で御手を洗ひ清めて熊野神邑(今の新宮町)に到り、天磐盾(神倉山)に登らせて天祖大神を拜し祭らせ給ひ、天神の御示教のまゝ八咫鳥の先導によつて熊野川に沿ふ險しき山路に分け入り十津川を経て吉野の川尻に至り遂に大和に達して茲に帝業を建てさせ給ふたのであります。

神倉山は即ち天磐盾で明治十年頃迄は神社があつたが今は纔に斷礎の名残を留むるのみ。二月六日の御燈祭は千炬先を争つて急坂を走り壯觀なものである。

### 浮島蛇身物語 (新宮)

「浮島の森」は東牟婁郡新宮町字蘭の澤にあり面積一千五百一坪の文字通りの浮島である。地質は完成せざる泥炭と水苔、草根の類からなり、その上に松、杉、山桃、檜の巨木が鬱蒼として森をなし樹下には天臺烏薬や、一ツ葉その他、寒暖の植物が群落してゐる、全島じめ／＼と多量に水分を保ち試みに地上に竹竿を押し込めば一丈二丈はわけなくめいり込み、底の深さはどれだけあるか知れないといふ無氣味さだ。

以前は全島の周圍が泥沼で容易に人の近づくを許さなかつたものだが十四、五年前現在の浮島遊廓がこの森の北方に移轉してから周圍の泥沼は次第に埋立てられ今日では僅かに東北の一部がその面影を存し南西方面は悉く宅地となつて森につゞき「浮島の森」本來の孤島的生命を失ふに至つた。かゝる廣大な面積を持つ浮島と寒暖さま／＼の植物が群落する状態は全國でも珍らしいとあつて内務省の天然記念物に指定された結果新宮保勝會でも一段と力瘤を入れ、最近宅地になつた周圍の土地買入れ交渉を開始するやら、島の周圍に柵を立てゝ心なき人々の植物の濫伐を防ぐなどこれが保護に躍起となつてゐる。

何しろ昔は純然たる浮島、風荒き日は樹木が丁度船の帆のやうに見え全島恰も浮城の如く風の方角に従ふて移動するといふ有様で風に對する抵抗を弱めたから樹木の損傷など殆どなかつた。然るに現在では前記のやうに島が陸續きとなつて固定したゝめ勢ひ抵抗力を生じ強風にあへば千年の巨木も軟弱な地上に立つ悲しさにもろくも倒壊してあたら風致を損すること夥しいものがある。

「浮島の森」の世に出たのは内務省の天然記念物に指定される前後のことで、まだほんの最近である、それまでは「蛇の穴」の傳説地として熊野の人々に知られ、一種陰慘な「神祕の森」の感を興へてゐたのであつた。「蛇の穴」にはおいのと呼ぶ美女の奇しくも悲しいロマンスがひめられてゐる今でも熊野の地方では

「おいの見たけりや蘭の澤へ御座れ、おいの蘭の澤の蛇の穴に」

といふ俗謡が口ずさまれてゐるほどの傳説は熊野に取り相當馴染深いもので、日高川の如く全國的には行かずとも縣下では恐らく蛇身物語として日高川に次ぐ資格があり、なかんづく近時上田秋成氏の雨月物語中「蛇性の淫」の對象として郷土歴史家に研究され出したなど今や大いに有名ならんとしてゐる、物語は源平の昔に遡つて彼の源爲義が六波羅の戦ひに敗れてその娘丹鶴姫と共に熊野に逃れ新宮に潜んでゐた時代のこと（傳説だからつきりした年代は知る由がない）

新宮蘭の澤に「おいの」と呼ぶ美しい年ごろの娘があつた、父は樵夫で、おいのは家にあつて母の手助けの傍、父の仕事先きにお晝の辨當を届けるのを日課としてゐた。或る日おいの父は浮島の森へ杉を伐りに出かけた。おいのはその日どうしたものか森の中が非常に懐しいものゝやうに思はれた。暗くしてしめつぽい。そして小さな蛇達が樹の枝でダンスをしてゐる、あの陰慘な森の中が何んで慕はしいのであらう。おいのはその日の自分の心が不思議でならなかつたが、強いてその誘惑に勝たうとはしなかつた。それで晝を待ちかねて父の辨當と自分もまた少しばかりの握飯を用意していそ／＼と出かけた。おいの母は日ごろ温なしい娘がああやうな陰氣な森に進んで出かけるのを不安氣に見送つた。そしてそれが森の中で寂しく仕事をしてゐるであらう父を慰めるための孝心であらうと勝手に解釋して可憐でならなかつた。こちらはおいの父に辨當を届けるや森の中央へ

一人で踏み込んで行つた。

丁度大きな松の樹の下に苔むした臺石があつたので腰を下しその附近で手折つて來た薄のくきを速成の箸に辨當をひろげた。眞夏ではあつたが水氣を多分に含んだ森の中は水のように涼しかった。シーンとした静寂の中に父の生樹を挽く鋸の音がしめやかに眠氣をさへ催した。ふとおいは眼の前に大きな黒い影を見た。それがスル／＼と伸びて冷やりとおいの肌を觸れた。ゾットして辨當を投げ出し「父さん……」と叫んだ時はもう遅かつた。おいの身體はふわりと宙に浮いて、一抱へもあるであらう大蛇の口に横になつてゐた。おいのをくわへた大蛇は暫く鎌首を宙に上げてゐたがやがて蛇身を沈めると、しだの繁みにある、暗い水溜りの中へ悠々と姿を消した。

一方おいの父は、けたましい娘の叫びに不吉な豫感に襲はれ、直ぐさま馳せつけたが、徒らにそのあたりがなまぐさい風の氣配がするのみで可愛い娘の姿は見えなかつた、然し附近の雜草をなぎ倒した無氣味な光景から察しさすがにそれと感付いたので、取り急ぎ我が家に歸り、妻に急を告げ夫婦とも／＼再び森に引き返し蛇の穴と思はれる水だまりの前に両手をつかへ「大蛇殿、娘の姿をもう一度見せて下され」と血を吐くやうに哀願した。

すると一陣の醒風、さつと起り、いたましま大蛇の口に横たわつた、娘が今は生氣を失ふて人形の如く、恐ろしい鎌首と共にする／＼と宙に浮ぶこと三度びかくしてまた元の穴に大蛇と共に没し

去つた、夫婦は今更の如く我が子の愛着にたへかね、恐ろしさも忘れ、聲を限り泣き叫び「せめて今一度見せて下され」と底知れぬ蛇の穴を覗き込んだが娘の姿は再びこの世に出てこなかつた、それから以後、新宮の人々は無論、この物語を知る熊野の人々は決して薄のくきを箸の代用にはしない、現に今でも固く禁じられてゐる。

### 徐 福 の 墓 (新宮)

新宮驛の東一町。もと七塚といつて徐福の臣七つの塚があつたが、今は一つも残つてゐない。徐福は始皇帝の暴戾なる政治を怖れて、不老不死の藥を求めると云ふ口實の許に、我朝孝靈天皇七十二年（凡二一三〇年前）男女數千人を連れ、五穀及び農具を用意して永住の覺悟で渡來した。もと飛鳥神社にその祠があつたが、今はその礎石を残すのみで墓は楠藪にある。碑は紀州藩祖南龍公の建立にかゝり、朝鮮人の李梅溪の筆にて「秦徐福之墓」と認められてゐる。徐福は熊野に來て捕鯨事業を拓いたと云はれ、俗謡にも

大島原からよせくるつち（槌鯨）を二十艘秦氏がさしてくる。

秦氏とは徐福の後裔である。現在の捕鯨地である太地浦はもと秦地浦と書かれたもので秦氏の住んだ土地だとも云ふてゐる。

## 村上家の八幡様 (七川)

昔村上清義が賊軍に追はれて七川村の平井と云ふ所に逃れて来ました。そして幼な子を抱いて木の洞穴にかくれました。賊軍は大勢で攻め寄せて来ました。そしてあたりを探しましたが少しも見つかりません。所が木の洞穴を見つけました。洞中では清義はいきをころして居ましたが敵はこんな所には居ないと思つたか、そのまゝ通り過ぎました。が又引返して洞穴を探さうとしました。すると其洞穴から鹿が飛び出しました。それで敵は鹿の出る様な所には人は居まいと思つて引きかへしました。

かくして清義は漸く一命を全たうしましたが敵が餘程向ふの方へ行つて山の岨を下らうとしますと清義の抱いて居た幼な子がオギャーと泣きました。それで敵は再び引返して来ました。そして今にも穴に這入らうと致しますと今度は中から白い鳩が飛び出しました。それで敵は又こんな鳩の出る様な穴には人が居ないといつて歸つてしまひました。此の様にして清義は危き命を儲けて此所に部落を作り丸山神社を造營して自分の家には八幡様を祀りました。今でも村上家には八幡様をお祀りしてゐます。鳩は八幡様の使だからです。

## 護摩を焚く蛇の谷 (三里)

熊野川を隔て、二十五町、寶玉山と云ふ嶺がある。そこは私の村から隣の村に行くのに通らなければならぬ要所である。今は毎年八月中に京都から山伏が来て護摩を焚く。そのわけはかうである。

昔ある一人の老人が杖をたよりに何處からともなくヨボ／＼と落着かない足どりで此の山を下り始めました。そしてだん／＼下つて來るとそこは深い谷である。樹が鬱蒼と茂つてゐて一條の日光をも漏らさない。そして竹が叢々と生えてゐる所へさしかゝつた時、大きい／＼大蛇が道に横たわつてゐるのを見た。老人は杖を振り上げたと同時に「エイ」と一聲あたりの深山に響いて木霊した。すると今迄静かで風のない静寂な中に笹の葉すれの音が不氣味に彼の耳に傳はつた。ふと向ふを見ると前の蛇は何處へ行つたか分らなくなつた。それから老人は又ヨボ／＼足で山を何處へか立去つてしまひました。

それからは毎年山伏が来て此處で護摩を焚いてゐたが此の谷が國有林となつた爲、火を焚く事が出来なくなつたので彼の寶玉山頂に於て護摩を焚く様になつたさうだ。

ある年の夏私は此山に登つて見ました。三四十人の山伏姿をした男が「法螺の貝」の音、萬山に朗々と響かせて投げつける様な暑氣をもいとはず業を行つてゐました。寶玉山に於て業をすまじ前に話した大蛇のあつた谷で御念佛を唱へてゐました。

此の大蛇のあつた處を稱して「蛇の谷」今は立札に「蛇の谷國有林」と書いてゐるのが特に目を引きます。今はもう雜木は伐倒され檜、杉の蟲々とした樹々が天を磨して繁茂してゐます。

しかし國有林であるが爲誰一人として樹を切る者はありません。昔の巨木の朽ちたのが所々に轉々と横たわつてゐるのを見受けます。此の邊が蛇の横たわつてゐた所ではなからうかと無氣味に思はれ吹く風の笹に囁く音を聞いては當時の事を物語つてゐるかのやうに思はれます。

### 小栗判官と湯峰 (湯峯)

東牟婁郡湯峰温泉場より約一丁程の所に蒔かすの稻といふところがあります。

昔小栗判官が悪者に毒酒を飲まされ身は癩となり藥品効なく歩行さへ出来なくなつた。妻の照輝の姫は心配一方ならず夫の病氣を癒さんと車に乗せて毎日自ら車を引いて所々方々を彷徨ひました。遂に夫の病氣には湯峰の温泉がよいと聞き直に湯峰に向つて出發しました。處が湯峰に行くに

は殆んど山道ばかりです。それ故車を捨て、自分は夫を負つて行きました。これが今に車塚として残つてゐます。

それから温泉より一丁程の所まで來たとき妻は草鞋が切れたので捨てました。其の草鞋から稻が生えて毎年種を蒔かないのに稻が實ると云はれて居ります。之が「蒔かすの稻」であります。

小栗判官は此處で三年間入湯し全快して歸つたさうです。

### 柳の精―楊枝薬師と傳説お柳 (楊枝)

有名な京都三十三間堂棟木の出所でその淨瑠璃は豊竹小椽の名作といはれてゐる。物語の要點をつかむと

X

X

秀仲が鷹狩の日勢よく空にかけた鷹の足緒が柳にかゝり所詮柳の木を伐り落して鷹を助けねばならぬ事になつた。この時横會根の畜平太郎が山中より罷り出でた、一矢を以て柳の小枝を伐り鷹を助け、同時に伐らるべき運命の柳を無事に救つた。やがて柳の精お柳は平太郎を戀して其の妻となり中に一子縁丸といふ男の子をさへ擧げ、愛そのものゝ生活を送つた。

然るにこのたび後白河法皇お惱ありお堂を建て、御平癒を祈ることになつたが或夜ふしぎの御甕夢に柳の大木にて通しの棟木として御堂を建てよそは熊野の谷蔭に年ふる柳の大木あれば探し求むべしといふことであつた。こゝに藏人家貞旅の用意の挾箱、家來引連れ遙々熊野に來り遂にこの柳を伐つて三十三間堂の棟木にするといふ、お柳はその木を伐られては既に魂なき生ける屍である。こゝにお柳平太郎に悲しき愛別離苦の嘆がある。「やゝ母は、今を限りにて元の柳に歸るぞや必ず草木成佛と回向を頼む夫よ子よ離れがたや悲しやといふ聲さへしのびなき……」の悲嘆場が生れるわけだ。

### 犬 鳴 き (三尾川)

昔一ノ谷の戦に平家方が負けて屋島へ逃げたが或一部分の者が紀州に廻り、古座川を上つて居ると源氏が追つかけて來た。ところがそこに飼つて居る百姓の犬が平家方に源氏の來た事を知らせる爲に鳴いたと云ふ。それで犬鳴と云ふ。

### 薩摩守忠度誕生地 (九重)

九里峽中九重村宮井字音川に薩摩守忠度の誕生地がある。現に新宮町植松新十郎氏所有の音川炭坑事務所となつてゐる。平忠盛鳥羽法皇の命を承け熊野新宮に來た時、時の別當の女と契りその女懷妊して此の地に來り忠度を生んだといふ。平家物語にも「熊野そだち大力の早業にておはしければ……」とあり源平盛衰記にも同様の事がある。

### 赤 い 猫 (田原)

田原の村から一里離れた或寺の住持が大變猫好きで一匹の赤い猫を貰ひ大事に育てゝゐました。大變大きくなりましたして鼠も時々捕るようになりました。二月ほどたつてから或夜住持が十二時頃であつた、猫の外に出てゆくのを見ましたが別に氣にもとめなかつたが毎晩同じ時刻に出てゆくので住持も不思議に思ひある晩猫の後からそつと隨いてゆくと村の外れに出ました。やがて谷に入りました。杉の大木が大變しげつて晝さへ小暗いといふとある廣場に出ると住持はあつと聲をたてるどころでしたが、こらへてよく見ると大きなく、小牛ほどもあらう怪猫が大勢の猫どもと踊つてゐるではありませんか。

そして彼の赤猫はいつのまにか美しい娘に姿をやつして踊つてゐる。住持は前後をも考へず逃出

して恐しい一夜を明かしました。それより住持は決して猫を見やうとはしなかつた、又彼の赤猫もそれつきり戻つてこなかつたといひます。

### 維盛の末葉 (色川)

壽水の昔平家は西海の波に沈み、三位中將維盛は屋島を忍び出で紀州高野山に登り、瀧口入道に對面あつて後、入道の案内で與三兵衛重景、舍人武里石童丸等を引きつれ熊野に落ち延び勝浦沖の山成島より投身と見せかけて太地より下里を通り市屋で一夜を明かし色川村藤綱の要害に入つた。色川佐兵衛盛重は維盛の子孫として代々色川を領し今もその子孫が此村にゐる。

### 勘九郎磯 (津賀)

古座街道から津賀の鼻を迂廻した處斷崖の突端は廣いく磯で絶えず滔々と波の音をたてゐる。此處は俗にカクロが磯と言つてゐるが昔は勘九郎磯と云つたさうである。廣い海、島と山の趣のよいその浦邊には黒潮が絶えず押し寄せてゐる。こゝにも情調に満ちたローマンスが育くまれて

ゐる。それは哀艶悲痛なおたへにかゝる情話である。

「おたへ……十八……花なら盛り、盛る色香の年頃は……」と歌はれた見るからに此漁師町には珍らしい美しい女であつた。家は津賀の村はずれの磯近い所にあつて寒村に咲いた紅梅一輪にも譬へん「おたへ」の姿は如何に近郷近在の若い衆の血を湧かせた事であらう。今でこそ大邊路街道も開けて村の家も數十戸の多きには達してゐるものゝ其の頃はわづかに數戸の漁村で……いそな漁る……蟹女生活の詫びしい在所であつた。

X X X

村の少女の心を浮き立たしめた春は去つて津賀浦の磯には早や飽狩る夏半ばとなつた。十五夜の夏の月も冴えて涼しい夕暮れ。漁に出た父の勘九郎の歸りを迎ふべくお妙は磯傳ひに……答志の岩に腰をおろして往き來る舟の邊に心を奪はれてゐた。夏の夕は波の音に送られる風も涼しく繪の様な美しい浦……さも美しい……おたへの姿は又なく綺麗に彩られて磯邊に狩る村の若い衆の目をそばだてしめた。

「オヤ……おたへさんちやねーか」突然呼びかけたのは村の青年中でも篤學で温厚で親孝行者だと評されてゐた上野清七であつた。……今しがた磯から上つたと見えて破れた襦袢の裾からはポタリくと零がしたりつ落ちてゐた。

「あれ清ちやんかい何時も精の出る事ね」彼女は常に清七の男らしい活潑なキビ／＼した其姿と言行には一種の懐しさと敬虔を持つてゐた。村の若い衆の集會其都度演壇に立つて條理ある演説によつて村の長老達を感服させたのも清七であつた。

「まだお父さんは歸らない——待ち遠だね」清七は腰をおろさうとして何か思ひ出した様に……矢つ張り……己れも獨りの母を持つた身だ……「たへさん……左様なら……」清七は我が家へ歸つて行つた。

清七は獨りの母に……おたへは獨りの父の愛によつて……恰も似たさびしい境遇に置かれて居たのであつた。而も其の家が隣り合であつた。だから幼いからの友達であり少なくとも近隣の愛を以て禍福を伴に泣きもし又笑ひもした。けれども二人の間には兄と妹より稍々温かい……情は動いてゐたらうが物固い父母に養育された二人の間は誠に純なものであつた。

X X X

けれども蟹女娘の痴話が平氣に物語られる此の里に……此の二人の美しい戀も土地の娘と同じ様に醜い噂をたてられるのであつた。

其の後清七の母は偶々風邪の氣分で打ち臥したがその病氣が原因をなして遂にその月の末七十二歳を最後にこの世から去らなければならなかつた。

清七は獨り取り殘されて淋しい生活をおくらなければならなかつたが唯獨……清七の淋しさを慰さめ又生活を助けたのはおたへの父とおたへであつた。其の後又おたへの父は病氣に罹つて日に／＼重つていつた。おたへと清七は力を盡し介抱したが八十七歳を一期としてこの世から去つてしまつた。其の臨終に際しておたへの父の勘九郎爺は二人を病床近く招いて、

「もう私もこの世の中に縁がなくなつた、お前達二人を見ずして先立つ罪をゆるしてくれ實は今日までお前達の素情を明かさなかつたが……マア聞いてくれ何を隠さうお前達は兄妹だよ、頃は去ぬる延元元年の六月だつた西向村の小山家が南朝の爲に兵をあげ尊氏の族石堂義慶や熊野法眼の兵を田原沖にて要撃した時其の敵將石堂の兵船が小山氏の爲めに破られあはれや船は轉覆して將士悉く戦死を遂げたが其の中に上野豊後は石堂の兄妹ふたりを僅かに身を以て助け巧みに敵手をのがれて船と共に流れついたので此の津賀の浦であつた。今思ひ出せば誠に夢の様である。わしは其の上野豊後の長男勘九郎で父の遺言によつて主命をつぐ爲に小山高瓦殿の目を避けて今日まで御身達を見まもりしてゐた。清七、おたへとは別の名本名は石堂左兵衛、梢殿に相違ござらぬ今とても領主の手前遠慮せねばならぬ御身達強い蟹女にしたて、淨き艱難の永の生活、われ此の世をさりし後は兄妹力を合せて主命の回復をつとめゆめ／＼油斷あるな」と言ひ殘して此世をさつて終つた。

X X X



戀憧れの的とならうとしたおたへは妹であつた……よい殿御と思つた男は兄であつた。二人は夢からさめた如く打ち驚くと共に勘九郎の死をいたく悲しんだ。

両性から醒めた幻滅の哀感に加ふるに生くるに狭い敵國の遺子である事を知つた二人は勘九郎爺の死を悲しむと共にいたく現在を悲觀せざるを得なかつた。「父母は敵國の將地は皇國の地又兄妹に一人の頼るべきものがない」斯うした落莫な哀愁は常に此可憐な兄妹の心を痛ましめた。

家々を繞る虫の聲に……山河もみな物のあはれを感じしむる秋の半ば突然勘九郎磯の岩礁に二つの火の玉が流れた。村の人々は何事がおこつたかと駆けつけたが何事も怪現なものは無かつた。而しかうした事が二夜續いた。其の最後の夕其の二人兄妹は忽然として此の村から何れかへ姿をけしてしまつた……村の人達は勘九郎磯の人魂は兄妹二人の靈であると云ひふらした。そして名主の濱地左門の特志で此の二人の靈を弔ふべく二基の塚を立てられた。それから後勘九郎磯に鮑を漁る蟹女で……海に入る物に一人として返つてくる者が無かつたのでカグロ磯の名と共に怪奇な傳説を生んで今でも荒波はげしいこの磯邊に誰あつて近づくものがなくなつた。

X X X

彼の巨浪……其の岩礁のすさまじさは此二人の怨恨が永劫に咀はしく奏でる交響樂となつた。

### △ 鬼ヶ城の海賊の妻 (木の本)

岩裂けて黄泉の扉をあらはしぬ

思ひがけざる人のふためき

歌人吉井勇氏をして驚異の眼を瞪らさせた紀州木の本の鬼ヶ城を根據として暴虐を逞うする海賊團があつた。彼等は時々人家を襲つて金銀財寶を掠奪したり、美しい女を誘拐して來て苦しめたりしてゐた。

残忍な彼等の間には無論道德も秩序も何もなかつた。たゞ腕力のみがすべてを支配する最高の力であつた。當時の浦人は彼等を鬼と呼んで怖れてゐた。

木の本、三木里、二木島、九鬼などの地名も音の通じる所から木を鬼と呼んでゐたらしい。

ある夏の夜の事であつた。鬼ヶ城には未曾有の大きな酒宴が開られた。晝のやうな月光を浴びて彼等は大勢何處からともなく集まつて來た。首領は熊の皮を敷いて自分の席に直ると口もとに氣

味の悪い微笑を浮べて輪になつてゐた乾分を見まはしては二木島からの船を待つてゐた。然し船は手間取つたのか、なか／＼やつて來なかつた。彼は自燥つたさうに何べんも見張りの立つてゐる岩角へ人を走らせた。やがて夜も更けた頃美しく飾られた船は岬をまわつて姿を現はした。乾分共は一様に知らせを受けると歡呼の聲をあげて船を迎へるために席を立つていつた。首領はひとり會心の笑を洩らした。權の音もやんで大勢の人の足音とともに二木島の賊の首領は美しい娘を連れて入つて來た。

父の後から恥しさうに入つて來る彼女は噂に違はず美しかつた。少女期を脱したばかりの娘々した態度は人を引きつける力を充分有つてゐた。鬼ヶ城の首領と二木島の首領とが將來同盟して仕事をする計畫に夢中になつてゐる時、彼女は怖る／＼自分の夫となるべき人を迎へた。年からいつても親子程の距離はあるが、何も知らない彼女にはそれが不自然であるとさへ思はれなかつた。そればかりでなく自分が首領の妻として多くの乾分の崇敬の的になることを想像しては、子供らしい喜びを感じた位であつた。毛が一杯生えた、たくましい男の腕を見ても、却つて男性の力強さを一層たのもしく思つた。

二木島の賊の首領の娘として世間と没交渉に生活して來た彼女は、いつまでも自己を知らない女として生きてゆくことが出來たであらうか。若しさうであつたなら悲劇も何も起る筈がない、政略

のためになされた結婚は未だうら若い彼女に幻滅を感じさせないでおかなかつた。鬼ヶ城へ來た當座こそは胡蝶が夢を趁ふて飛びまわるやうに、歡樂から歡樂へとその日を送つてゐたが、すでにあれから早くも一年の時日を終た今では、何か知ら物足りなさを覺えて憂鬱に襲はれることも度々あつた。殊に人質として里から捕へられて來てゐる若者を一目見てからは彼女の心に生れてから、これまで一度も体験したことのない、異性に對する戀の芽が恐ろしい力を有つて延びていつた。彼女はこの怪しい力を、どれだけ怖れもし、押へつけようとしたか分らなかつた。然し自然の力には何物の努力も無駄であつた。

夜になつて人々が寢靜まると何時も彼女はこつそりと寢所を抜け出して、磯づたひに若者が縛ましめられてゐる水谷の方へ忍んでいつた。そこには此の里の財産家の獨息子が金と引き替へられるために捕へられてゐた。はじめのうちこそ番人の眼をは、かつて遠くから岩陰に身を隠して男の姿を眺めるだけで満足してゐたが、日が経つに従つて彼女は益々大膽になつて行つた。よく利きさうな酒や、するめの焼いたのを番人に振舞つては若者とのほかない逢瀬を楽しんでゐた。番人が酒に酔ひつぶれてしまふと、彼女はあたりに氣をくばりながら懐に忍ばせて來た握り飯を、若者の口に入れてやつたりした。「あなたは一体どういふ人なんです」若者は不思議がつていくら訊ねても、彼女は答の代りに優しく微笑むだけであつた、餘りにしつこく訊ねられると「今に分ります」と言

つて悲しさうな眼附をした。」

かうした何日まで續くべくもない逢瀬は幾日か續けられた。二人の間には何日のまにか次のやうな言葉が交はされてゐた。

「あなたを助けてあげたら、私をつれて何處かへ逃げてくれますか。さうして何日まで私を捨てないと誓つてくれますか」

「無論、私はあなたとなら何處へでも行きます。あなたを知らなかつた前ならばいざしらず、知つた以上はどうしてひとり家で歸れませう、家へかへる位なら、このまゝいつ迄もこゝにかうしてゐた方が、どれだけ幸福か分りません」

「では逃げて下さいませねえ」

「ええ」

若い二人はすでに心から許し合つてゐた。さうして機會の來るのを神々に祈りながら待つた。

遂に待ちに待つたその日は來た。彼女が最初に此の鬼ヶ城を父と共に訪れた日のやうに月の明るい夜であつた。其處此處に散らばつて悪事を働いてゐる彼等の仲間の者は皆鬼ヶ城へ集まつた。大舉して南の方の里を襲ふ前祝ひの酒宴が開かれた。馬鹿騒ぎのあつた後皆所かまわず酔ひつぶれて寝てしまつた、彼女は夫を寢所に連れていつて寝かしつけると、細心の注意を拂つて若者の所へか

けつけた。

番人が彼女の持つて來た酒に酔ひつぶれるのを見きわめると彼女は素早く忍ばせてゐた刃物を抜いて若者の縛めを切つてやつた。重苦しい沈黙のうちに二人は失心したやうに立つてゐた。

「何處へ」男は我れに歸ると不安さうに聞いた。

「あの舟へ——さうして私の故郷へ」

女が指さす所には誰が乗つて來たのか、小舟が岩に繋いであつた。二人は手を取り合つたまゝ舟に乗り移ると女は必死になつて櫓を漕いだ。舟は死の様に靜かな空氣に櫓のひびきを殘して進んだ。進む毎に海に映つてゐる月影が美しく碎けた。すると其の時何處からか長い光つたものがひゆうと礫のやうに風を切つて飛んで來た。次の瞬間に疲れ切つた身体を船尾によせてゐた若者は「あつ」と叫んで仰向けに倒れた。

女は彈かれた様に走りよつてみると鋭利な刃物が若者の心臓を貫いて血が凄じい勢で噴き出してゐた、彼女はどうしていゝか分らなかつた、すると突然近くからカラ／＼と勝ち誇つたやうに笑ふ聲がした、ふり返つて見ると、そこには首領が殘忍な笑をたゞへて立つてゐた、女は恨めしさうに極度に憎悪と敵愾心のこもつた眼で、睨み返すと何の躊躇もなく血に染つた若者の死骸を抱いたまゝ底知れぬ海へ身を投げた。

その翌日、あの静かであつた海は俄に湧き返へる程荒れ狂ふた。見る／＼うちに鬼ヶ城は言ふまでもなく現在の木本の町のある所一面に海となつてしまつた。

若し此の地方へ旅行する人があつたなら注意して公園、花城山附近の岩を見るがよい。そこには牡蠣のついてゐた跡が歴然と残つてゐる。幾百年かの推移は又もとの地形をひとりでに作つてしまつたが嘗てそこは海であつたことを想像することが出来るだらう。

盆になると此の町の人々は今でも海の崇りを怖れて此の海で死んだ人々のためにひやくはつたいといふ追善供養をすることになつてゐる。夕景から夜にかけて幾百とも知らぬ松炬は鬼ヶ城附近の磯につけられる。

### 道具長者と諸平 (那智)

直下八十餘丈餘、瀑淵の周廻ほとんど三丁餘、皇國無比の大瀑布として偉名を謳はるゝ那智の瀑布は、昔にあつては實に今日以上の壯觀であつたといふことである。仁井田長群の記文などを見るに昔は今のものより十倍の大きさがあつたらしい。

長群は嘉永年間の人で、有名なる藩儒仁井田好古(無詩補傳の著者)の息である、當時今の牟婁

郡は二區に分れ、一は東熊野一は西熊野と稱へたのである。そして西熊野の治廳は田邊および、周參見に、東熊野の治廳は新宮および木の本にあつて、長群は木の本廳の令であつた、長群は篤學の士で熊野の天地に取りては忘るべからざる恩人である。

古來那瀑に関する詩歌文章の類が少くない、なかんづくかの馥玉集にある歌道の大家安田長穂の大瀧のつらゝが中のなちごもりかみも驚くいのりならまし

の和歌など最も異彩を放つてゐる。

那瀑といへば直ちに文覺上人を聯想せしめる、この歌は那瀑靈顯の氣と、文覺の一心不動の信仰力とを想像し得る。そして長穂のこの歌について興味ある逸話がのこつてゐる。長穂は熊野本宮の名門大宮司竹坊正全の二男に生れ、幼名を虎彦といひ十八歳の時懇望せられて和歌山市安田宣全の養子となつた。これがすなはち日本一の道具長者と謳はれた雜賀屋長兵衛のことで、今の雜賀屋町はその遺跡である、長穂は古道、および文學を好み、歌道を本居大平に學び名吟が頗る多い。常に公卿諸侯と交はつた。紀伊藩國學所總裁の顯職にをつた國學の大家、加納諸平とは莫逆の友で諸平の居は雜賀屋邸と僅に丁餘を離れてゐたので、その親交は一層深かつたといふことである。

ある日諸平が雜賀屋の邸を訪ひ長穂の書窓に入つた、室の廣さ二十疊、これに大きな虎の皮を敷き和漢の書籍を積んで讀書に餘念なかつた長穂は喜んで諸平を迎へた。

諸平「御近詠は如何」

長穂「いさゝか會心の詠を得申した」

と取出して諸平に示した、諸平がこれを見るに

大瀧のつらゝが中のなちごもりきく人さへも身は氷りけり

諸平「誠に傑作と見ましたが惜むらくは上の句詞大きくして下の句弱く聞ゆるのうらみがある」

長穂「可然御斧鉞を加へられよ」

諸平笑ひながら、確に一樽酒の價があるといつたので長穂は諸平の面前に酒を運ばせた。それから陶然と酔ふにおよんで諸平は筆を執つて

神も驚くいのりならまし

と下の句を訂正したのである。つまりこの名歌のうちにはかうした無邪氣な逸話があつたのである。文覺も諸平も長穂も今は現世の人でないが那瀑だけは轟々として長へにその偉容を誇つてゐる。

澗のぬしさん (澗八丁)

春の水はどろの八丁に温い匂りを見せて、萌え出た木の葉の中によどんでゐた。幸右衛門は蝶蜂

にうながされて、釣りの糸を垂れること、けふで七日、日毎にこの清くぬるんだどろの精と見えぬ手の交渉を續けていつた。「幸右衛門様」軽くやはらかに、彼の肩に手をかけたものがあつた。ことの意外に振り返つて見ればそれは女だつた。若い女だつた美しい眼もくらむばかりの女であつた。一人暮しの幸右衛門が喜んで若い女を自分の宅へ請じ入れたのは勿論のことである。女は別に名もいはなかつた。そして何を語らうともしなかつた。たゞ男のいふがまゝに「はい／＼」といつて働き、暇さへあれば麗しい笑を投げかけては幸右衛門を嬉しがらせてゐた。そのうちに女は臨月になつた。或る日のこと、改まつて願ひがあるといつて、「どうか川の邊りの誰も知らぬところへ小さい家を建てて下さい。そして、私にそこで身二つにならせて下さいませ。誰に見られるのも恥かしいのでございます。」といふのであつた。幸右衛門は承知して、何人にも氣づかれぬところへ小屋掛をした。「身二つになつたら歸りますから、それまで見に来ずに待つてゐて頂戴」といつて家を出た。

幸右衛門は待つた。けれどもなかく歸つて來なかつた。もう五日になる。もしか産後が悪くて弱つたのではなからうか。とそれからそれへ思ひめぐらすにつけて矢も楯もたまらず、彼は見に行つたのである。静かに／＼に足音を忍ばせて小屋によつた。すると、中には大變な物がゐた。そ

それは蛇であつた。大きな蛇は小屋一ぱいにどぐろをまいて、頭の所に人間の赤ん坊をだいてゐた。が、物音に気づいたのか、頭をきつとこちらにむけると、急にもとの愛らしい女になつて、子供をかへて出て来た。「幸右衛門様、あれ程御約束をしたのに、もうかうなつてはこれまでとごさいます。あゝ、幸右衛門様。私はこのどろのぬしであつたのでございますが、餘りに美しいあなたのお姿にみとれて……どうかお許し下さい。私の代りに、この子をおたのみ致します。では左様なら、お名残り惜しうございます。」

X X

ぼかんとしてゐる幸右衛門の前に紅衣に包んだ可愛い乳兒を置くと見る々々女は水の中へ消えてしまつた。「待つて呉れ。」といつたが何の答へもなかつた。後悔と淋しさと、やるせなさに赤ん坊を抱いて幸右衛門は泣いた。朝日の登る頃、小船には生れて間のない可愛い女の子に乳水を含ませながら、八丁のどろをこぎめぐる幸右衛門の姿が氣の毒であつた。

川の主さん八丁の長さ

可愛いぬしさん舟の中

といふ唄は、かうした傳説から読み出されたものである。

## 海賊藤四郎と少女峰 (古座)

「沖の暗いのに白帆がみえる、あれは木の國蜜柑船」

X X

紀の國屋文左衛門の船は熊野灘岬の突端へ南下東折の航路をとつて、この岬ともにも魚の尾なりに突出してゐる大島の檜野岬の沖合を黒潮の流れに乗つて風のやうに過ぎたものであらう。がその當時檜野岬の灘影九龍島に根城をかまへて變幻出沒した海賊の九龍島藤四郎が魔手を張つてゐたのであるから、蜜柑船が事なく通り得たとすれば、千に一つの鬼の目こぼしであつたらうか。

南紀州の一角——山岳重疊たる間に一水をひいて自ら溪谷をなすこれが古座川峽で、峽水が蒼海をつくところ、風波荒れて巖骨を晒すもの大島となり、九龍島となつた。昔は古座浦とこの一帯を呼んでゐた。

藤四郎の海賊船が夜の翼のやうな黒い帆をあげて現はれたが最後、すべては鯨口の鰯の如く吞まれていつたものである。しかし海の魔王の藤四郎も陸の最期はあはれであつた。いやそれに絡んだ乙女の死こそあはれであつた。

古座川の郷、月ノ瀬に、月の精のやうな美女があつた、年は十七名はお藤といつた。藤四郎はこの美少女のゐることを知つた、さうしてやがて魔手を伸ばすのであつた。山月が落ちて漆のやうな闇が古座川の流れを包んだある夜のこと、村から矢の如く下る舟があつた。それはお藤を奪つた藤四郎の魔の舟である。

お藤は舟の中で身もだえ、藻掻いたが甲斐なかつたことはいふまでもない、舟が海に出て九龍島めがけて漕ぎ出されたなら——もう運命は知れてゐる、が幸か不幸か、勢ひこんだ舟が六丈の瀬尻に来るとドシンと大岩に突き當つて横腹をかへした——と、船も人もすべては闇の水に落ちた。

お藤の手は水の中のかなにかに觸れると、必死の手繰廻りに笹根の攔めるところまで寄れたので、手繰つて来た竹らしいものを捨て陸へのし上ると懸命に山の手へ走つたが水に手繰の藤四郎は川岸へはひあがると、お藤らしい氣配にすぐ後から追つて来たのである、追ふもの、逃ぐるもの、川嵐が暗の草木に吹き散つた。

古座川の西岸に描いたやうな秀峰がある、参差として影を流れに落してゐる、昔はたゞ西の峰とのみ呼んでゐた。

お藤はこの峰の頂きまで追ひつめられた。藤四郎は猿臂をのびして引つかまうとする、もはや絶體絶命！お藤は流れを目がけて身を躍らせると、風こたへ闇光つて、あとは太古の様な寂寞にかへつた。死んでしまつた阿女には用はないと舌打しながら峰から降つて来た藤四郎、それでも氣残りしてか、もう一度峰をふり仰いだその時、暗中から秋水一閃！梨割に切りさげられてぶつ倒れた。餘程の達人か稀代の業物であつたものとの取沙汰であつたが、こゝに不思議は一つ、謎となつて残された。

それは里人がお山と呼んでゐる雲深い重疊山の山腹に、小さな柴の庵を結んで眉目秀でた僧がゐたがそれからといふもの、ついぞ姿も見せないとのことであつた。

物語はこれで盡きる。西の峰の現今の少女峰である、十七ヶ嶽ともいつてゐる。そしてこんな小唄が残つてゐる。

けはしい峰にやさしい名

なぜと問ふならその昔

かなしい話がござんすの

戀の清さを守らうと

十七娘お藤さん

峰から飛んで死にました

ふもとに紅い花が咲く

### 蛇の子與太郎 (高池)

古座川の支流、池の山川は源を檜山に發して、羊腸の流れを古座川に注ぐところ、高池町字清水である。此の邊一帶に玲瓏たる冷水湧くをもつて清水の名あるものか？山麓に沿うて流るゝ池の山川は私の生家の裏徑を一町とは離れてはゐない。小徑をおりたところ——そこが稚子の淵の名あるところである。私の幼かりし頃には小瀬を水の走つて岩鼻を突くところ水淀みて紺碧に澄み、魔の如き静けさに渦を巻いてゐた。子供心にもこの神秘的な稚子の淵には恐れを抱いて誰一人として淵に浸るものはなかつた。その傍の岩間から滾々と湧く冷水を稚子の水と名づくこの水は非常に冷く我々は恐らく一分間と手足を浸してゐることができないであらう。

X X X

昔村に與助といふ若者があつた、早く父に別れ、母子二人貧しい暮しの樵ではあつたが、實直な

若者として村のほめものだつた。或日の夕べ、いつものやうに樵の歸り道、雜木の茂つた小徑を急いでゐた。すると道端に腰をおろして物思はし氣にうな垂れてゐる乙女があつた。乙女は與助のかつて知らない女で、顔には少しく憂ひの色が見えてゐたが、すき通つたと、紅をさしたやうな唇と、ぬばたまの黒髪とを持つた美女だつた。恐ろしいものに出會つた時のやうな感じを抱きながら與助はそこに、つたつたまゝ暫しは一足も動けなかつた。やがて美女は寂しく

「どうぞ私を助けて下さい」

とたゞ一言いつた時、與助は漸くわれにかへつて

「あなたはどこから來たのですかそしてどうなされたのですか」と尋ねた。

「どうぞ妾の身の上について聞かないで下さい、妾は遠い處から参りました、そしてどこへ行く的もありません」

正直な與助は乙女を伴つて家に歸へつた。

美女はお光といつた。優しい與助の母親はお光を勞り、お光はまた眞實の母の如く仕へた。お光が與助と共に樵に出掛るやうになつた頃は、二人の間に戀が芽ばえてゐたことはいふまでもない。與助は村一等の果報者として若者どもから羨まれた。やがて二人の間に玉のやうな男の子が出來た。しかし好事魔多しのたとへに漏れず、一子與太郎は月日のたつに従つて不思議にも身體一



面に蛇の鱗のやうな斑點ができて來るのだつた。與助はお光に「どうしたことだらう」と話すといつも「これは妾の罪でございます、許して下さい」とさめく泣くばかりで、深くは語らうとはしなかつた。與助にもお光にも楽しませぬ日が續いた。

x x x

或夜魔の淵に騒然たる水音が起つた。與助がその恐ろしい水音に目を覺した時にはお光の姿は此家から消え去つてゐた。その後お光の姿を見たといふ人はない。母に別れた與太郎は夜なく泣いた。與助は與太郎をなだめすかしつ、いつも無意識に戸外に出るのだが、何ものかに引つけられるやうに魔の淵附近へ來ると與太郎は泣きやむのが不思議だつた。

或る夏の夜、與助は隣村の縁者方に泊り翌朝急いで家に歸へつて見ると、何と悲しいことだらう母は眠つたやうに靜かに世を去つて、與太郎は影さへ見えなかつた。氣も顛倒した與助は狂人のやうにあてもなく走つた。魔の淵の邊りに與太郎の着物と下駄が残されてゐたが姿は更になく、淵の傍の岩石が崩壞して洞穴をなしそこから滾々と冷水が湧いてゐた。

x x x

その後村人は誰いふとなく、この魔の淵を「稚子の淵」と呼び、この清水を「稚子の水」といふに至つた。

x x x

年月移り星かはり、稚子の淵も今は淵の名もとめず僅かに水をたへ人々にもこの傳説と共に忘れられつゝあるが、たゞこの不思議な冷泉のみは昔に變ることなく盡きざる姿に湧いてゐる。

### 釣鐘を着た鬼婆 (那智)

昔、那智瀧の附近に恐ろしい鬼婆が住んでをりました。旅人を取つて食つたり、田畑を荒したり、時には人家を襲ふやうなこともあつたので、村の人達は恐れて誰も瀧へお参りに行くものがありませんでした。この話を聞いた侍が「よし、おれが退治てやる」といつて瀧へ上つたが、誰一人として生きて歸つたものがありませんでした。

x x

或る夏の暑い日でした、一人の立派な武者修業者が那智の山へ登つてきました。

「ゆるせよ」

「ようおこし」

武者修業者はついと茶屋へはいつた、そして腰を下して汗ばんだ肌をふきながら風を入れてゐた



が……

「時に異なことを尋ねるやうちやが那智の瀧に鬼が住んでゐるといふことをちよつと驚で聞いて来たがそりやまことか」

「えい、そりやもう本當に恐ろしい鬼でござしてな……、たびくお強いお武家さまが退治に行かれましたが、生きてもどつた方がねいのちやよ」

「む、それやあけしからん、よし拙者が退治て後難をのぞいてやる」

「めつそうな、とてもくお武家様の五人や十人では手に合ふ奴ぢやねいだよ、悪いことはいはねいげに、やめなせえよ、見ればまだお若いのに……」

「ハハ、心配するな、で、まことに氣の毒ぢやがその瀧まで案内してはくれぬか」

「めつそうもない……」

茶屋の婆さんはふるくふるへながら手をふつた。

「ぢやあ、拙者が一人でまゐらう」

修業者は茶屋の婆さんのとめるのをふりきつて登つて行つた、そして若侍の手には何處から持つて来たのか百本の矢が握られてゐた。

x

x

やがて瀧壺にたどりついた若侍は、岩の上に腰を下して、今にも鬼婆が飛出して来るかと、じつとあたりに氣を配つてゐた。暫くすると生温い風がスウと吹いてくるのに氣づいた侍は、ふと前に目をやつた時、大きな杉の古木の間をぬひながら釣鐘が歩いて来るのをみつけた。

「すはこそ噂に違はず出てまゐつたよな」

と足場を見はからつてビュツと釣鐘目がけて矢を放つた。ブスツとさしも厚い釣鐘を突き破つて中の鬼婆の胸板を見事射貫いたかと思ひの外、カチツと矢が二つに折れて跳ねかへされてしまつた。

「チエツ」ビュトカチ。——ビュトカチ。第三、第四、引次いで飛ばしたが、悉くはねかへされてしまつた。怒りにもえた釣鐘の鬼婆は「猪口才なやつ」といはぬばかりに侍の身邊近く追つて来た。侍は何を思つたのか、すばやく一本の矢を後にかくした。そして九十九本射切つてしまつた時大聲で

「もう駄目だ、百本のこらす射切つてしまつた、お前にはとても敵はない、引裂いて食はうと、どうしようと、おれの身體はお前の望み通りに呉れてやらう」と叫んだ。

鬼婆はしめたとばかり釣鐘を脱いで侍の身體に飛びつかうとした時すかさずかくしあつた一本をビュツと放つた、狙は違はず鬼婆の胸板を見事貫いたと同時に今まで晴れてゐた空が俄にかき曇つて那智の山もぶつ裂けるばかりの雷鳴と共に大粒の雨がじやく／＼降つて来た。

x x

鬼婆の息の根が全く止まると、さしもの雨も雷の音も、からりとやんで、しん／＼たる静けさに返つた。やがて村の人々が集つて来て

「これは有難い、これからは安心してお瀧へもお参りすることができる」  
と口々に喜び合つた。そして後の祟りのないやうに、鬼婆の死骸に火をかけてその場に埋め一つの塚を建てた。

### 破天荒な仇討 (潮岬)

みさき岬は七浦岬

潮の岬は荒瀧ぢや

まこと申本節に謳はれるとほり果しらぬ海の彼方から押よせる怒濤は、百尺にも近い断岸を打つて碎けた飛沫は高く月を洗ふ、本州の最南端雄大無比の海岸美、潮岬は「荒瀧ぢや」以外にその景趣を傳へる豪壯な言葉がなからう——

◇

紀州藩祖南龍公時代のことである——申本の漁師灘兵衛は潮岬にどんと打つ浪をうけて氣性が荒い、大酒呑み、女房に捨られて、やもめ世帯、とはいへ子煩悩でいつも四五歳になる子供を連れて漁にでる板一枚、赤銅色の腕二本、松の木のやうな五體をもとでに鯨や鮪と一騎打ちの大勝負や鱈の大群を遙な沖へ追跡する間にも絶えず船中の子供を見返つて満足さうに微笑をうかべる。

◇

潮岬の荒波に揺られて糸を垂れ次第に増える生簀の魚の数をながめて、こりや今宵もしたま寝酒にありつけさうだと悦に入つてゐた或る日の灘兵衛、「父ちゃん、しよんべだ」に夢を破られ、チョツと舌打ち、船玉さまを汚さぬやうに船のこべりに高々と可愛い子供を差出した刹那であつたさつと波を分けて跳り上つた怪物！「アツ、さめだ」さすがの灘兵衛色を失つて叫んだ時、無残もう愛兒の下半身を鋭い歯で食ひとつた海の怪物は水底深く沈んでゐた、紺碧の海面はばつと血に染られた。

◇

沖の漁にまで側離さぬいとし子が無残にも奪はれて憤怒の灘兵衛、しばらくボロ、ボロと涙を眞赤に染んだ水面に落してゐたが、悲痛のあまり氣が狂つたか、愛兒の残骸にぐさりと舟の錨を突立て、どぶりとばかり海に投じた、と、見よ、灘兵衛を乗せた漁船は矢のように沖合さして走りは

じめた、痛ましくも悲しい灘兵衛の苦肉の策になる大釣針を執念深いさめがばくりと呑んだのである。さめは三日三晩、灘兵衛の舟を西に東に南に北に熊野灘を曳いて走つた、必死に綱をにぎつてへさきに立つ灘兵衛の姿は鬼神のやうに物凄かつたといふ。

◇  
荒れ狂ふ海上で海の怪物大さめと戦ふこと幾日、灘兵衛はつひに力つきた怪物の巨體を串本の濱に引揚てあの白い腹を裂いて愛兒の屍を奪換することができた。「逆縁ながら破天荒な仇討をやりおつたのう」英主南龍公は莫大な銀を贈つて熊野の荒男灘兵衛の孤獨を慰めたといふ。

## 日 高 地 方

## 道成寺の傳説 (藤田)

人皇六十代醍醐天皇の御代奥州白川と云ふ處に安珍と云ふ僧があつた。常に三熊野を尊信して山伏の姿となつて紀伊國室の郡真砂の庄司が許を宿として毎年此處に宿つた。

この庄司に一人の娘があり名を清姫と呼んでゐた、幼稚の頃から容顏麗しく、殊に怜悯であつたから、かの僧大層惜しんで戯れ言など云つて、後には妻として奥州へ連れて行つてやらうなどと云つたのを、娘は稚き心に誠と思ひ、大層嬉しうにしていなむ氣色もなかつたのは、惡縁の初だと後になつて思ひしられた。

延長六年八月の事であつた、安珍は例年の如く庄司の家に宿つたのに、かの娘夜更人靜りて安珍の間に忍び來て云ふには「わらは最早や今年は十三歳になりました。いつまで斯様にすて置き給ふのか、此度は是非連れて陸奥へ下り給へ」と申すので安珍はよしなき戯言を云つたものであると後悔したけれども、色にも出さず、ひとまづたばかり見ようと思つたので、いかにも今年は連れて下りませう、併し未だ參詣を遂げて居りませんから、必ず下向を待ちなさい、伴ふて奥州へ下りませうと云ひすかして、明くれば庄司の家を出立するに娘は門送りして一首の歌を詠みました。

先の世の契りのほどを三熊野の

神のしるべもなかなかからん

と紙に書いて示した。安珍心の内にさても乙女心の末おそろしやと思ふが返歌をしなければ、如何なる事が出来るか解らぬので、おそろく

三熊野の神のしるべと聞くからに

なを行末の頼もしき哉

と詠じてやがて下つて來ますと云ひ捨て、別れました。夫より清姫は、指折り數へて安珍の下向を待つたけれども安珍は歸つて來ない、待ち侘びての餘り、外に出て行くともなく、歸るともなく吟ひ行くに、先達とおぼしき老僧に行遭つた、清姫問ふて云ふに、「わらは尋ねる人は若き僧であります、手箱を取つて、逃げましたが、さやうの僧に逢ひませんか」と云ふ。老僧は逢つた僧はあたが夫は七八町あとであると云ふ、今一人は十二三町も過ぎただらうと答へたので、清姫心の中に扱は我をたばかり逃げたのであらう、いづく迄も行つて、追付かうと飛ぶ様に走つて行く、その姿有様は全く恐ろしく、變つてゐるので旅人も是を見て、さてくすまじい女性の氣色である、何故にその様に急ぎなさるのかと口々にいふけれども清姫耳にも更に聞入れずに追かけるのでした。

夫より目切川と云ふのを打渡り、名田村上野と云ふ處でやうやく安珍の姿を見つけやがて追付き

聲を掛けるに、安珍あとをも顧みず心中に權現を念じ、欲知過去因果。見現在果。欲知未來果。見現在因果。の四句の文言を唱へ、一生懸命逃げたのである。此の文言の功力に依つて清姫の眼忽ちくらみ石に腰掛けしほし息を休めて居つたのに、首より上は蛇となり、腰掛けてゐる石はくぼんだと云ふ。―それが(即ち腰掛石である)―

やがて清姫は天田川(日高川下流)迄追ひ來たが、渡守は安珍に頼まれてゐて渡さない。清姫はいよ／＼怒つてさんぶとばかり川の中へ飛び込んだ。渡つた時はすでに惣身蛇体となつてゐた。渡を越へて夫より道成寺に行く、是より先き安珍は渡守に今に後から恐ろしい女性が來るから決して此川を渡さぬ様にと頼み置き直ぐに道成寺に行き、和尚に具に事のわけを話して頼み入つた。僧共が集つて此の事を議してやがて鐘を取り下し此の若い僧を鐘の中に伏せて隠すことにした。

さうする中に蛇体の清姫は火を吐いて石階を昇つて來た。堂を一二度廻はり安珍の足跡を嗅いで(又は鐘を伏せた時に草鞋の端が少し外に出て居つたとも云ふ)終に安珍をかくした釣鐘を見付けて七卷半まいて火を吹いたので鐘は湯となり安珍はそのまゝ黒焦げに灰となつた。清姫の蛇体はそれより道成寺を出て入江に沈み死んだのである、即ち側の蛇塚である。今も道成寺に鐘が溶けた所だと云つて二王門の側に圓くくぼんだ所がある。

清姫の關係のある土地でよく繪などに出る所は左記の處々であります。

眞砂の庄司。切目川。切目五体王子神社。物見の松。清姫草履塚。腰掛塚。壘屋浦。日高川。道成寺。蛇塚。

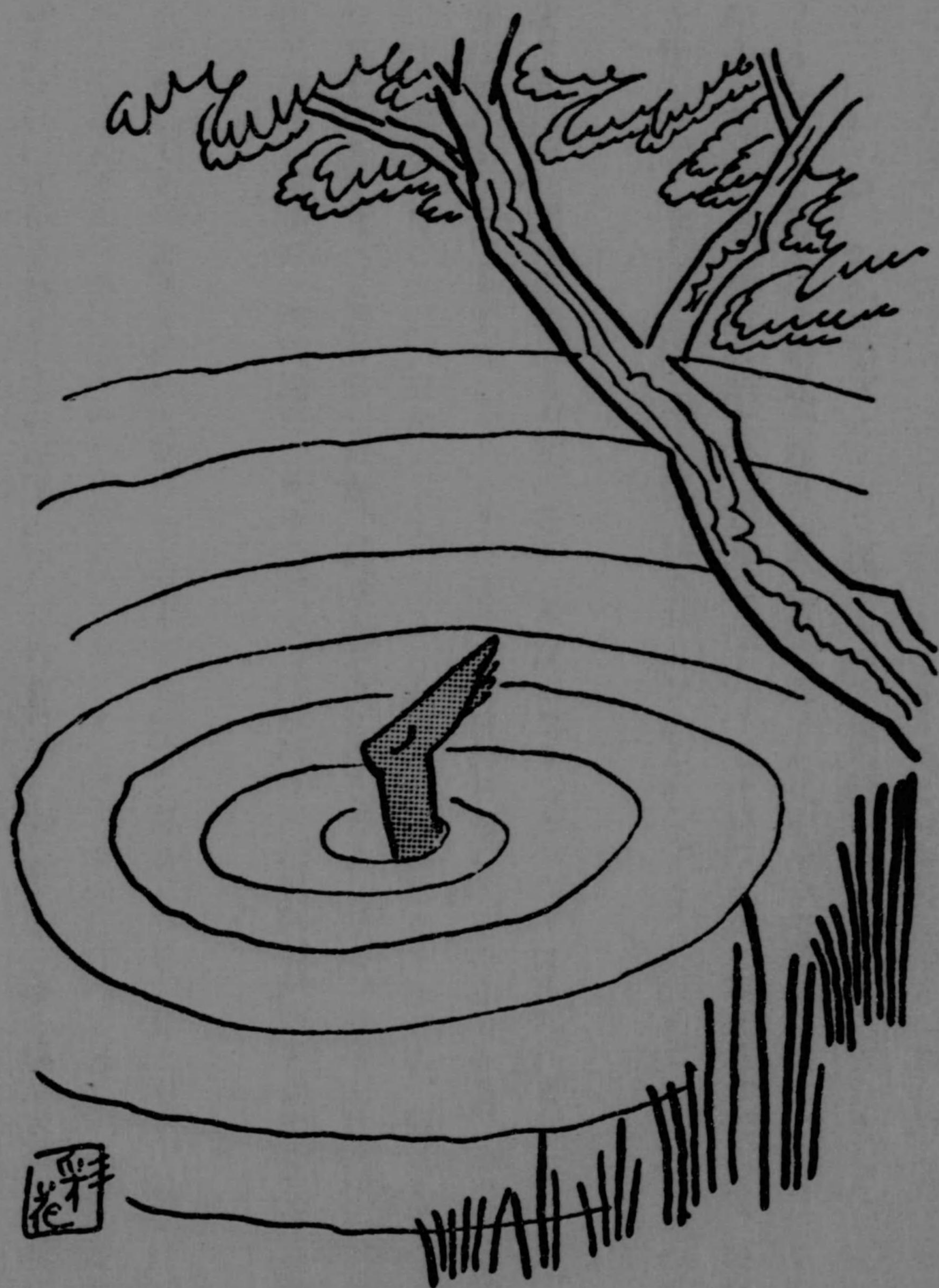
### 道成寺の釣鐘 (藤田)

昔は今と違つて、百千萬民の大勢の念力によつて製造したものを眞の鐘と申したもので、古い釣鐘ほど價が高いといはれてゐます。かの道成寺釣鐘製煉については道成寺檀中總代が羽織袴を着用し、合力つれて寄附方の世話人となり戸毎に勸化した。

農家は斧、鉞、鎌、鋏、鋤等の古金類、商家では一厘錢數百文、天保錢何文に限りなく、婦人は金銀簪、鏡、大家では金銀のべ板等、有りとあらゆる金屬類を寄進した。これを合はせて、何百貫といふ大したものであつたさうです。

當時世話人は或る小屋住居の老夫婦にも寄附を勸化しました。老夫婦が細き煙を立てるのを見ては、氣の毒に思ひましたが萬人の念力が主眼ですから、その事を申し述べた所、病床にあつた老爺は大いに喜び、古鉞を一挺寄進いたしました、その時は老婆は不在でした。

所用有つて近所に行つて居た婆さんが歸つて来て、病の床にある爺さんの枕元に來て、容態は如何、變りはありませんかと伺ひました。すると爺さんは、「婆よ、只今村の寺總代さんが來て道成





寺釣鐘建立につき寄進せよ、鉈でも、鎌でも、鍬でも古道具でよいからと申されましたので、そこにある鉈は如何といへば、これは結構といつて禮をのべて持ち行かれました」と言ひました。これを聞いた婆さんは大いに驚き、その鉈は我等二人の命の親、それを持つて行かれては大變だとその場に泣き倒れました。爺さんは病床から、「私達二人にとつては鉈の大切な事は解つてゐる。けれども道成寺大鐘の仲間入りをして置くことは、後世の爲であるから、どうか諦めてくれ」といつて慰めました。

けれども婆さんはそれでは現在二人が食ふことが出来ませんといつて聞き入れませんでした。それも道理實は毎日米を二三合まではして、お茶を飲まして呉れるものはあの鉈である。その鉈を持つて行かれては、米を得ることが出来ない。今日限り二人は飢死せねばなりません、爺さんも今は理窟につまつてしばらく考へて居りましたが、婆さんが泣き伏してゐる間に、爺さんは病床からのこゝろ忍び出て小屋の裏手の一町程隔つた池の邊まで這ひ行き、南無阿彌陀佛と共に身投げを致しました。

其後しばらく夢現であつた眼を開いた婆さん、邊りを見廻すと爺さんの姿が見えない、驚いて、若しやと思ひ、直に裏手から池の邊へ行つて見ると、果して古草履が一足並べてある。是を見た婆さん、今は身も狂はんばかり胸せき込んで言ふ事を知らず、すぐ様爺さんの跡を慕ふてザンプとば

かり身を躍らして池に飛び込み成佛しました。

その老夫婦が此の世に生れて仇敵同志となり、爺さんは奥州に生れ、婆さんは紀州栗栖川の眞砂に生れ、即ち安珍と清姫となり、傳へられてゐる物語の様な間柄となつて、安珍は逃げる、清姫は追ひかける、とうとう道成寺で追ひつき清姫は恨ある鐘の龍頭をくわへて卷いたから今に残る鐘巻道成寺と世に稱せらるゝは是が爲である。その釣鐘が恨の火で眞紅となり、溶けて残つた跡を見るとかなくその中から古鉈一挺が出たといふことです。

### 道成寺縁起 (藤田)

昔、此のあたりに八幡社があつた。そしてこの社と道成寺との間は二三町許り入江になつて人々は之を「九海士の里」と呼んでゐた。其の時分の頃である、ある日突然海中が鳴動したので海には入つてゐた蟹女達が大人驚いて逃げ惑うてゐた中に、この里の名主宇鷹の妻渚の髪にギラギラ光つたものがあつた。取り上げて見ると神々しい一寸八分の千手観音の御尊像だつた。村人は之を土生と云ふ所の岩上の一ところに庵を建てゝ安置した。その御尊像からは毎夜々々御光りを發し人々はより一層畏れ敬ふた。

ある夜渚の枕邊に靈像たゞせ給ふて「心に願ふ事あらば篤く／＼申すべし」と宣うた。渚は「あはれ大慈大悲の佛力を以て妾が娘に毛髪を恵み給へ」と渴仰すると見て夢はさめた。其夜不思議にも娘も同じ夢を見たのだつた。

その翌日より娘の頭には次第に黒髪生じて丈に餘るに至つた。渚よろこぶこと限りなく其の黒髪の落毛を一筋も土足にふますまいと、樹の枝につるして置いたが、いつの間にか雀が來て運び去り、遠く奈良の都紫宸殿の軒端に巢喰つた。

ある日帝が女の髪の毛が雀の巢よりたれて土上に届いたのを御覽なされて、早速右大臣藤原不比等に命じてこの髪の毛を探せとの御仰せである。栗田の眞人は之を奉じ普く國中を尋ね廻り、遂に九海士の里で渚の娘をつきとめ伴ふて都にかへつた。

渚の娘は世に稀なる美婦人であつたから不比等は自分の養女として宮女姫と名づけ、後の宮にすゝめ参らせた。

然るに後の宮は不思議にも雨の降る日には物悲しき風情に御はしますので、帝之を怪しみ問はせますに、姫は故郷紫の庵に安置し奉る観音あり。雨の日には庵室漏れ尊像の濡れさせ給はん事を憂へる旨、其始終を奏聞した。帝叡感あり、早速紀の大臣道成公に仰せられ舟岡山に七堂伽藍を御建立あつた。それで天皇の音問に係る故を以て天香山と號し道成公苦心の建立故道成寺と名づけた。

落成は大寶元年である。當時は二十八箇坊の末寺があり、百八十餘町の莊園を有した關西第一の靈場であつた。その後亂世を経て次第に衰運に赴いた。天正年間頃尙十六の塔が有つたか本堂、仁王門等を残す外何時しか荒廢してしまつて、今は地藏院、中將院、法華院等が遺つてゐるのみである。本堂及び仁王門は室町時代初期の建造物で其後再三修築を加へたものとみとめられ、明治四十一年には特別保護建造物に指定せられた。

### 入 相 櫻 (藤出)

和歌山縣内日高郡藤田村字鐘巻道成寺に枯れ朽ちた樹幹と僅の枝を残した櫻の古木がある。それでも年々歳々春を忘れず花を開く。これが入相櫻と呼ばれる名木で既に六百年前に入相櫻の名が傳説に語られて居り、往昔は幹の周圍一丈六尺に達し、陽春の頃には其の廣庭花を以つて埋められ枝は一面に地を蔽ひて支柱三六本にて支へ、本堂の椽より其の枝に短冊をつるして風流を競つたと傳へられて居る。が、五六十年前より次第に枯れ初め、數度の大風害に腐朽し今は往古の面影もない、道成寺の能や歌舞伎の舞台に櫻花を以て埋めるのは之を寫したものである。

鐘巻や鐘は見えぬど入相の花は名高く世にきこえけれ

伊 達 千 廣

### 狼 と 辻 地 藏 (山路)

今ものこつてゐる辻の地藏さんがある。昔は鬱蒼と樹木が繁つてゐたさうだ。そしてそこには狐や狸は勿論の事狼も居た。そこを或一人の子供が道を急ぎ足で歩いてゐた。すると一匹の狼がちつと蹲つてゐた。これを見た子供は一生懸命に逃げだした。すると狼は逃してなるものかと後を追つかけて來た。さうして今にも狼の口が子供にとどいた時、其邊は眞闇となり瞬間又一時に明るくなつた。さすがの狼もあつげにとられて驚いて見て居る間に子供はいち早く辻の地藏の後に隠れてしやがんで居た。すると狼は又彼を追つてやつて來てこんどは矢庭に子供に飛び付いた。間一髪その瞬間地藏は大木となつて居た。それで子供は助かつたとさ。

### 日 和 田 の 瀧 (山路)

日高川の中流虎ヶ峰の一部分に瀧がある。僕の家よりは半里足らずで何時も魚釣りに行く所である。瀧と云つても今は唯山峽と急流と岩石にその面影をとめて居るに過ぎない。そのほとりに奇

怪な池がある。之をニゴリ池と云ふ。昔は此の邊一帶は熊笹で晝猶暗いほど繁茂して居た。當時の人々はたれもこの池の近くへゆくものはなかつた。

時は徳川の末頃僕の曾祖父の時代に、ある炭焼きが夕方小屋へ歸つて見ると小屋のそばを大材木がすべつたやうな後がある。うまれつき大膽な彼は平氣だつた。そこは瀧の上の山の中腹だつた。其の晩夢の中に産土神よりの御報を承つてすぐそこを立ち退いた。それはニゴリ池に住む大蛇の通つた後だつた。ニゴリ池は晴天の時はニゴリ雨天にはすみ切つて鏡のやうだ。そうした時自分の顔がはつきりと水面にうつるが水底は杳として見えない。

當時の若者に彌之吉と云ふ者があつた。瀧で鮎の飛ぶのを大タマですくひに行つてゐたが向ふの池の縁に大馬が不意に立つたので氣味悪く早々にして逃げ歸つたが、そのまゝ病になつて直ぐ死んだ。この池で不氣味なと思つた者はだれもかれも死んだ。

この池にはマドウと云ふ物が居て種々變休した。之を見た者は皆家に歸つて病床につき長らく病んで後遂に死ぬのである。此のマドウの食つた笹の食口を見ると鎌のカリマタのやうになつて居ると云ふことである。

今はだん／＼人手がは入つて昔の面影もなく叢がり生えてゐた笹も全然無くなつた。

## 不動明王 (山路)

徳川家も今將に亡びんとする頃だつた。此地の不動瀧の麓に一人の白髪の老人があらはれて瀧壺で齋戒沐浴する事七日間、其後不動の前に何か念佛を唱へて居つたがそのまゝ姿を隠してしまつた。此れを樹の陰で竊に見たのは同村の新作と云ふ魚取の老人だつた、新作老人はそれから毎朝のやうに不動に参拜致しました、丁度三十一日目の朝偶然一月前に見た老人に出會つた。

老人は新作にお前は毎朝此の不動明王に参拜して何か願ひでもあるのかと尋ねた、其の時新作はたゞの信心からですと答へた。

それならば毎朝水で身を清めて然る後参拜せよと教へてくれた。其の後新作は水風呂に這入つて毎日参拜を續けました。

其の後新作の家の發展は電光の如くだつた。間も無く新作は死んで其の子新吉が後を繼いだ。最早其の時は附近でも名高い金満家で人にも羨やまれる位であつた。

しかし新吉の時代になつて信心と云ふ事は知らないかの様に不動明王への参詣がピタリと止まつてしまつた、と共に此の大金持が一月も経ぬ内にもとの貧乏人となつてしまつたといふ事である。

それで村の人は新作の参拜し始めた日を吉日とし毎年の祭日としてゐます。  
今尙此の不動神社の隣にたゞ薬ぶきの一家が存してゐます。其れが其の新作の子孫であると云ふ  
ことです。

### 餅のつかない里 (切目川)

海を少しはなれた静な／＼田園の村、三方は高い山にかこまれて、只南の方には川が流れてゐま  
す。農夫たちは日が出れば田島に出て働き星を踏んで家に歸つて行く。かうした單調な平和な生活  
を送つて居る切目川村にもそれは／＼不思議な傳説があります。

あの大平記の大塔宮熊野落にゆかりの深き切目の里——大塔の宮が切目王子で御宿りになつた時  
御夢の中に髪結びたる童子一人來つて「熊野三山の間は尙も人の心不和にして大義成り難し。これ  
より十津川の方へ御渡り候ひて、時の至らむを御待ち候へかし。兩所權現より案内者を附けまゐら  
せられて候へば御道しるべ仕るべく候」と申すと御覽ぜられ御夢はお覺めになつた。

そこで大塔宮様は其處から切目川村を通られて十津川の方へと入らせられたのです。丁度其の時  
です。切目川村をお通りになる時、あまりの空腹に人家に入らせ給ふて食をお求めになりました。

其の頃は正月の頃であつたのでせう。丁度餅をついてゐたさうです。しかし身なりも卑しかつたの  
で高貴の方とは知らずに未だ神棚にそなへてないのに上げる事は出来ないと言つてさし上げなかつ  
たのです。

さらぬだに岩根こゝしき紀伊路の旅に一しほ哀愁を感じさせ給ふ親王様のお心持ちはどんなであ  
つたでせう。常ならば雲の上の奥深く何不自由なき玉容のさぞ情なく思召されたことでした。

其れからはこの村で毎年正月の餅をつくときつと崇りがあつたさうです。で今でも此村だけは正  
月に餅をつかないさうです。

### 龍神温泉

日高川の上流田邊より十二里の山奥に龍神温泉がある。山奥の事とてあまり天下に知られては居  
ないけれども、その噴出量の強大とその湯の清麗は一度入浴したる者を再び誘致しないでは置かな  
い。効果は主にぎす類によく利き外に諸痛にいちぢるしい利目があるさうだ。

今から何年か前のこと何と言ふ人かは殆んど明かでないが一人の尼僧がこの温泉を通りかゝつ  
た。この尼僧が大金を持つてゐたので、村人の一人が金に目がくれて遂に尼をセンゴと言ふ山道で

殺して終つた。

そのたゞりで種々の不思議な事が起る。その大なるものゝ一つは温泉の家數が全部で二十軒以上になると必ず全焼すると言ふ事である。現に十年程前にも全焼したさうだ。村人は今でもこれを恐れ種々の方法で厄のたゞりを避けて居る。

### なまずの淵 (高城)

或る暖い春の日であります。野山を罩めた落霞もいつしか紫紺に暮れてザーザーといふ風の音とともに邊の草木はゆれ初めました。さうして今まで麗かだつた春光は何處へやら、もう四邊は全くの闇の世界となりました。その折でした。今まで十數人の兵を引きつれて都を落ちのびて來られた護良親王はおそれ多くも空腹と疲労とに苦をなめさせられ宿る家もなく、その夜は瀧のドロの淵で家來と枕を共にせられたのであります。長い春の日のお疲の爲でしたか、親王はそのまま御睡眠になりました。

その夜の事です。ドロの淵の深潭から水を巻き風を起して、岩上につて來た眞黒い怪物がありました。

異様な物音に家來達は刀をおつ取つて下の深淵をちつとのぞきました。さうした家來達は驚かすにはゐられなかつた。なぜなら、其處には三間以上もある大なますが横たはつてゐるではありませんせんか。兵士達があまりさはがしいので、親王はお目覺になりました。このなますこそ親王に悪賊の來襲を御知らせしたドロの淵の主でありました。

かうした傳説を持つたドロの淵は私の家から三町も離れてゐない所にあります。古樹鬱蒼と生茂り淵は濃紺青の渦を巻いて何となく凄愴身に迫る感をさせます。夕立があつて一寸川の水が濁りますと直ぐ釣竿をかついでその岩上に立つてゐる子供を見ます。その主の子であるだらう——といふ人もありますが何んにしても無氣味な傳説を以つた淵であります。

### 出合の河童 (龍神)

龍神村大熊の出合の淵に河童があつた。或時此の里の湯の倉といふ處の田圃の中へ牛を放して置いたところ河童が上つて來て尻を抜かうとした。牛は驚いて河童を引すりながら一生懸命大熊平といふ處まで逃げ出した。村人が飛んで行つて其の危急を救ふといふ騒ぎ、結局河童は生捕られて或は打擲され或は田の草など取らされてこき使はれた。辛抱しきれなくなつた河童はとう／＼「此の

後天に星が無くなり、河に眞砂が消え、龍藏寺に小松が生へるまで此の地の湯野々から上の人には危害を加へません」と誓約して放免された。其の誓文石碑に刻して龍藏寺の手水鉢の下に埋めた。ところが幾年か経つて後のこと龍藏寺に荆山と云ふ僧が住して庭前に二本の小松を植ゑた。果然湯野々の某二人ある時、此の川へ夜釣に行くとして出たまゝ行方不明になつてしまつた。これは龍藏寺に松を植ゑたので河童が災したに違ひないと人々僧に談じて早速松を伐つたといふことだ。

越海瀧 (龍神)

日高川の水源龍神の小森谷奥に越海瀧と云ふ瀑があつて昔金鶏が棲んでゐて今も傍の岩壁に化石となつて遺つてゐるとか。瀧の上なる笹野茶屋や下なる小森の民家では鶏を飼へば必ず凶事があるとして養鶏を忌む風がある。

枕かへし (龍神)

龍神村小又川に檜の大木があつた。或る時七人の柚人がかゝつて之を伐つた。其の夜其の七人が

枕を並べて寝てゐると夜半何者かあらはれて其の枕をかへすと皆忽ち死んでしまつた。檜の精が然らしめたのだといふ。

五百原社の大杉 (龍神)

龍神村大字龍神の五百原重次郎の建立する所の五百原社内に稀代の大杉樹があつた。根廻が四丈直径が一丈三尺といふのである。今から八十年ばかり前此の木を大阪の某商人に賣りはらひ世話人有田郡湯川の甚太夫が之を伐り板にして六里ヶ畝越に大阪へ送つた。其の後十年其のうれ木を以て田邊の江川大橋を落成した。と同時に焼けてしまつて、仕出人戎屋儀助は大火傷を負うた。そして残木を扱うた御坊商人は破産し五百原に火災が起つたといふ。

鉾尖嶽 (龍神)

龍神の土豪皆瀬彈正が戦敗れて、紀和の境なる鉾尖嶽に隠れ、遂に其の終る所を知らずと傳へられてゐるが、其の逃げる時に澤山の財寶を山麓へ埋めて置いたとかで「朝日さす夕日か、やく其の

下に黄金千兩後の世のため」の歌がある。

お 姫 瀧 (寒川)

青白く澄み渡つた初秋を思はせる様な大空には白銀のお月さまがポツカリ浮んだやうに照つて向ひの山や青い田圃や、涼み台の上に思ひくゞに腰を下してゐる人達のサツパリとした浴衣をば、美しく照してゐます。

今日は舊盆の十五日なので、平生は淋しい向ひの田舎道も、浴衣がけの村人の往來がにぎやかで清い夜の空氣を通して田圃の上を傳はつて來る話聲も、はつきりと聞とれる程です。

「もうどうやら秋も近づいたやうだ、こつちは涼しいさかもうくつわ虫が鳴きよるぞー」と兄がつぶやいた。なるほど耳を澄ませば、時々思ひ出したやうにガチャ／＼とくつわ虫が鳴いてゐる。

「今晚お寺で盆踊があるんやて言ふてたが、よう晴れとんで面白からかい、去年は雨でのーやめてしようたさかい、今晚は人が大勢集るやろかい」香氣さうに椿の葉巻をふかし乍ら、となりの婆さんが、誰に言ふとなく言ひ出した。兄は言葉をついで

「婆さん、いくつよー」わしかい、もう數へ年の六七やよ。それでもまだ水波み位は骨が折れんとやるさか、エーよ」婆さん位、長生きすると、昔から面白い話も、恐ろしい事もあつたやろ」そがな事やつたら、いくらでもあるてよー、わしらもうあほうやさか、忘れたけど、それでも、まだ昔から、こつちの人が言ひつたへた話やつたら子供の時にきいてウツスリしつとるよ」一つ何でもエーさかしてくれんかい、何でもエーさか」と僕はすかさず口をはさんだ。

「話をしてくれて言ふても思ひ出せんけどこの話をせーて言ふたら出来るんやが……小藪川の奥の新行に「お姫瀧」ちう、そがいが高うない、瀧あるやろ、若い人にこがな話ししても、ほんまにせんけど、昔からある話やさかして見ろぞ」と新らしく椿の葉を巻きかへてポツリ／＼團扇を廻し乍ら話し出した。

何でも明治の御代にならない、まだ何十年も前の事です。僕の村にはやつと五六十軒の家しかなかつた。田圃や畠も少くよく茂つた山ばかりでほんとに淋しい村だったので。其の頃この平和な山里に、山を越えた隣の村までも聞えた美しい娘の子がありました。今のやうに、身につける飾り物や化粧品がなく、交通不便な他村にまで聞える程も美しい娘さんだといふのだから、ほんとに純な美しさを有つた娘であつたのだらう。娘さんは毎日兩親の膝下で可愛ゆく育つまれました少しばかりの田畠を耕す暇には山に入つて薪をとるのを仕事としてゐる父親の手傳をしてゐました。無雜



作にかむつた手拭の下からそら豆の花のやうなハツキリと澄み切つた瞳、黒い手おひの間から見える白い手の肌顔だちといひ姿といひこの山間には珍らしい美しい娘でした。その度に父親は娘の美しさを話しては喜んでゐました。

家々のゐりも、蓋をせられ梅の花が櫻の花と交代する若々しい春がこの山奥にも訪れまして、長い間雪にうすまつてゐた麥もほんとに生き甲斐を感じてか、グン／＼成長し始めた時なのです。どこから来たのか、一人のお武家さんが、此里を訪れました。武士萬能の當時なので、小さな村の旅宿に滞在してゐる此お士さんに近づく者は一人もありませんでした。けれども、お士さんが来てから、盗人も少くなり追はぎもなくなりまして村人はやうやく此お武家に親しむやうになりました。

其の中に、田圃も青ばみお盆もすぎて、女郎花や男郎花が咲き誇り、山すその柿も眞赤に熟する頃となりました。美しさを誇つてゐたこの娘に、妙に沈み勝ちの日は續くやうになりました。両親始め、村人も、このお姫様のやうな娘のあることを内々誇らしく思つてゐたので皆々同情をし心配をしました。薬になると云ふ草や木の根はみんなとり集めて飲ませましたが、一向きゝめがありません。それのみか宵の中美しく結つてゐた髪も、水でぬらしたやうに、かき亂れる朝が幾日もあるやうになりました。

一方お士さんの方も、毎夜いそ／＼と宿を出て行く事が宿の主人によつて知られまして以來村人

の間には、娘とお士さんとの間がどうの、かうのと噂をするやうになりました。こうした噂が両親の耳に入つた時は秋も終りに近づいて行儀よく掛けて干してある稻に肌寒い北風が吹きつける冬を始めでした。春の來るのが遅く、冬の來るのが早い山里の老人達は、もう綿入れを着る頃です。両親はどんなに驚いたか知れません。それでも可愛い娘がよもやそんなことないだらうと思つたが、或夜娘の着物のすそにそーと、細い糸を結びつけました。かくとは知らない娘は又もや夜半に家をぬけ出しました。両親は、それーとばかり糸をのばして、娘の後へついて行くとどうせう。娘は青黒く水をたゝへた瀧つぼの中へスーツと吸ひ込まれて行くやうに沈んでゆくのです。両親は狂氣のやうになつて、娘の名を呼びつゞけました。するとやがて瀧つぼの一個が渦を巻き始めまして、中からヒョッコリ頭を出したのは笑をうかべて、大蛇に抱かれてゐる娘なのです。

娘は間もなく又沈んで行きました。あまりの事に両親は氣が遠くなりまして、そのまゝそこに打ち倒れてしまひました。翌日やつと村人によつて救はれました。それ以來この無名の瀧がお姫瀧と呼ばれるやうになりました。それからといふものは、若い娘をもつた親は注意しないと蛇に、さらはれると言はれてゐます。そしてお士さんといふのは蛇の化身なのでした。ほつと一息ついた婆さは「あほくさい話やけど、それでも昔からある話やさかいのー」と相かわらず椿の葉をすつてゐる。

もう踊りが始まるのか、お寺の庭に美しい灯がつけられた。僕達はお婆さんと話し乍ら、ぶら

くとお寺の方へ歩いて行きました。二日程して兄と、お姫瀧を見に行きました。なるほど、瀧は三四間の高さだが兩岸が深く茂つた木で包まれ、低い割合に深いどす黒い瀧壺は昔娘をさらつた蛇がゐたと思はれる程不氣味に感ぜられました。

### 大海嘯と南部 (南部)

安政の大地震の時に、南部沖に大海嘯が起つたが、其の時に、大波の上に、一つの赤い玉石が浮んで、其の玉石が鹿島の龍の口には入つた爲に、波は鹿島の所より二つに分れて、一つは田邊の方に、一つは南部川、即ち山内と氣佐藤との間に寄せて來た。田邊の海嘯は大きかつたが、南部には少しの被害もなかつた、といふ事である。それ故南部の山内と氣佐藤の人々は、其の大津浪後は、毎年六月廿五日に必ず千鹿浦の濱で松明を焚いて今後も海嘯の災厄が押し寄せても、どうか助かる様にと鹿島に向つて祈願をして居る。又南部町民は毎年陰曆六月十五日に鹿島神社の海岸で花火を舉行する。赤い玉石は二つあつて、一つは海底にあると傳へられて居る。

南部の鹿島には、昔多くの鹿が住んで居つたと云はれて居る。それで鹿島といふのである。

### 安養寺の古狐 (南部)

私のうちから四五町行つた所に安養寺といふ寺がある。昔は安養寺といへば大きな寺であつたが維新當時七堂伽藍は打壊されて今は小さな一末寺となつてゐる。安養寺のうしろは今は畑になつてゐるが昔山つゞきで竹藪などがあつたといふことだ。

昔この寺の裏山の竹藪の洞穴に年古く住んでゐた一匹の古狐があつた。或る時この狐が病氣にかつた。そこで安養寺の小僧さんにばけて山内の玉井さんといふ醫者の所へ「うちの和尚さんが病氣にかつたから薬を下さい」と云つて薬を貰ひに行つた。

お醫さんは早速薬をくれた。狐の小僧はそれをもたらつてうちへ歸つた。翌日お醫者さんは和尚さんの容体を見て來てあげようと寺へやつて來た。「和尚さんの御病氣はいかゞですか」と問ふと小僧は「いゝえ和尚さんは病氣ぢやありません」と答へた。お醫者さんは和尚さんにあつて昨日のことを話しますと和尚さんは「それはきつと裏山の狐の仕業でせう」といつた。

そこで二人連立つて裏山の洞穴へいつて見ると狐は薬はもらつたがのみ方を知らぬため薬袋をくはへたまゝ洞穴の口で死んでゐた。和尚さんは其死骸をねんごろに供養して葬つたといふ事です。

## 鹿島神社の玉 (南部)

名も高い鹿島、鹿島神社に詣れば玉をお祀してゐるのを見るでせう。それは今より約數百年前に雨も降らねば風もなかつた年の寂しい秋もすぎで、師走の月も暮れんとして今にも新しい年を迎へて美しい晴着を着て面白く遊ぼうとする十二月の末の或夕方頃でありました。

突如として起る大海潮今にも鹿島はぶつぶぶされやうとしたが夜の九時頃から海潮益々荒くなつて人々皆後の高い山へ昇つて海潮の靜まるのを待つてゐた。丁度一月六日頃波も平靜となつてきたので人々は四邊にばら／＼になつてゐる木を集めて假家を設けて僅に眠る事が出来た。それから數日した或日の事南部濱に大きな船がうち上つてきた。町民はそれは何であらうと見に行つた。すると中から二人の男が傷だらけになつて出てきて何やら判然らない事をいふのだが漸やくにして意味が通じた。それは印度人で日本に金銀が多くあるといふので取りに來た事を話した。そして乗組員は百人程もあつたが自分等二人になつて全員ほとんど海潮の爲死んでしまつたといふのである。南部町の人々は不慙に思つて船を修繕してやつたり、米をやつたりしたので、その禮として玉をくれたのであるといふ事である。

## 田ノ岡兵左衛門 (山路)

今より約百五十年前の或年の秋の事である。

村を圍繞いた山々が紅葉に染められて高き青空に映え、稻田に黄金の波の漂ふ頃、稀代の獵師田岡兵左衛門は住家より七里ばかり川下の伊藤の深淵の附近に於て獵業に従事して居た。

目も眩むばかり遙か下に波一つ立たせずどんよりとして、底知れぬ潭を控へる數十丈の懸崖の上端に腰を下して鹿を呼ぶ笛を吹いて居るのが彼である。傍に居るのは近所の男だ。周圍の松にあたる秋風がゴ／＼と物凄く音を立てゝ居る。空は高い。と、その連れの男が次第に首を垂れて居睡り出した。此の道には神の如く老練なる彼は此の何げない有様にも直ちに何物か妖怪變化の近づきつゝあることを悟つた。併し文明の開けない當時深山幽谷に生を送り生物と闘つて殺生するを業とする彼のことだ。是の如き事には別に驚いたらしい様子もなく、依然として鹿の音の出る笛を吹いて居る。松風の中に交つて蕭々とひゞくその音は魔物をそゝのかす聲かとばかり聞こえるのであつた。

連れの男は段々深く眠つてしまふばかりである。魔物は愈々近づくらしい。彼は一段と力をこめ

て笛を吹いた。あたりには何となく五臟六腑に泌み込むやうな魔氣が迫つて來た。いよ／＼これは魔性に違ひないと信じた彼は流石に一種形容のしがたい不氣味さを覺えた。最早と彼は覺悟を決めて、八幡大菩薩の印のは入つた彈丸と伊勢大神宮の劔先とを獵銃に仕込んで姿勢をとつた。あゝ自分の獵もこれが最後かと思ふと感慨の深きは當然なれど、今はそんなことを考へる暇は一刻もない。

しかし彼は確固たる自信を以て今一段と力をこめて笛を吹いた。かくして息も結まる様な緊張し切つた瞬間が流れた。一段の怪氣が身邊に迫つたと見る間に突如!!はるか下の水際近く大男の胸よりも猶太き大蛇がヌツと鎌首を擡げた。さては怪物!彼の豫期は裏切られなかつた。日月を並べた様な爛々たる眼光で、すべての生物を魔壓して、ペロ／＼と二枚舌の出る醜き口からは火を吐いて居るやうだ。あゝ實に物凄き極みである。連の男は最早生色殆どなく死せるが如く魔睡して居る。所謂影を吞まれてしまつたのだ。

伊勢大神宮の劔先と八幡大菩薩の印のは入つた彈丸とは、獵家の一生一代の守りで、これを一度使用すれば殺生稼業を全くやめねばならぬのだ。併し之を使へば如何なる魔物でも必ず止めることが出來、西方に居るものを東方を狙つて放つとも必ず命中すると言ふのである。今は彼の死生の境だ。彼は銃を構へて猶も笛を吹きつゞけた。

併し銃を向けられたからとて怯れる様な大蛇ではない、ヂリ／＼と擡げた首が近づいて來る。凄氣魔氣は刻々に、危機は身邊に迫つて來た。今ははや目前の大巖のかけまで近づいたらしい魔性は又その巖の上にヌツと首を擡げた。此の時である。引鐵に手をかけた彼はグツとそれを睨み付けて「討つが覺悟か」と一言いつた。併し勿論その大蛇は下らない。あゝ實に危険極まる、既にかく接近して對峙した上は機先を制した方が勝である。鎌首は今にも飛びかゝらんとする勢で、その焰の如き毒氣は赤い舌尖からペラ／＼と顔先に觸れんとした。アツと思つた瞬間危機一髪、「ゾドン」轟聲と共に彼は瞑目した。同時に彼は卒倒した。そして此の瞬間過去つた彼の一生が走馬燈のやうに頭の中を駆けめぐつた。全く夢心地である。

やがて今までと異なる爽快な空氣の感じに、パツと瞳を見開いた彼の目には、常と變らぬ河水のせゝらぎの音の外、白煙濛々として何物も映らなかつた。五分間前のそれと少しも變らず松風もゴ／＼と音を立てて居る。傍に死せるがやうであつた男を見ると、目覺めて居る。顔色變じて此の世の人とも思はれぬ。今のは決して夢では無かつた筈。煙も霽れたので彼はその男をつれて銃を肩に岩の絶壁をよち乍ら下つた。と一つの岩壺に赤黒い血の一つばい溜つて居るのを見て兩人は歡呼の聲を上げた。それより崖下所々の岩穴に同様に血の溜つて居るのを見た。彼等は底知れぬ深淵の水際近くまで下りた。するとそこにキラ／＼光る大蛇の鱗二枚を拾つた。兩人は又もとの巖崖を攀

ぢ登つて来るのであつた。家へ歸つた彼は此の二つの鱗を祀つて、それ以後斷然と狩業を止めてしまつた。連れの男はその後長く病床に臥つた末遂に死亡した。後川下の人とその淵の下手に流れよつて大蛇の胴骨を目撃したとのことである。

### 小山峠の天狗（丹生）

和佐笹山の城主玉置權守といへば戰國時代の一方の旗頭として相當に知られてゐました。權守は非常な剛膽と武勇の持主であつて澤山の土地を併せ澤山の城を攻め取りました。そして眞白い壁の大きな城の中に住んで居りました。

丁度師走の二十日過の事でした。何用あつてか權守は供をも連れずに有田へ行きました。その歸り途に、津木より早蘇への山路、小山越の峠にさしかゝりました。暮れ易い冬の日はいつしか西に落ちて寒い北風は遠慮なく吹き荒れます。其上に道は晝でも小暗い淋しい峠です。木と木とすれ合う音や、落葉の音は一層人の心を物淋しくさせます。彼は特別の剛膽ですからそんな事は少しも氣にかけず、すん／＼登つて行きました。ところが七八分位は登れたらうと思はれる頃、ホツと一息ついて前の方を見ると峠の一番道のせまい所に黒い大きなものが立つてゐるではありませんか。其

利那權守は「ハッ」としましたが、「何をこれしきの事」と思つてよく前方を見守りながら登つて行きました。近よつて見るとそれは雲つくやうな大男、山伏でありました。

「道にまよつた山伏かな——」

かう權守は考へて聲をかけようと山伏の顔をながめると山伏は皿の様な目をして、

「誰だ！そこに立つてゐるのは。今時分俺の領へ入つてくるとはけしからん奴だ!!こゝは通す事はならん。命だけは助けてやる。歸れ——」

と眞向から大きな聲でどなりました。氣早の權守「むッ」として、こゝぞ手並の見せどころと思つたか、矢にはに差してゐる大刀を抜く手も見せず、山伏の肩先へ切りつけました。

「キヤツ!!」といふ聲が谷間に木霊したかと思ふともうそこには山伏の姿も何も見えませんでした。後に残つたのは長さ八尺ばかりの鳶色の片羽です。

「さては天狗であつたか。これは良いものを手に入れたわい」と權守は其羽を引きかたげ、喜び勇んで笹山城へと歸つて行きました。城へ歸つてからは、自分の家來は勿論の事、來る人ごとにその天狗の片羽を見せて自慢してゐました。

其後小山で片羽の天狗を見たとか毎夜小山で天狗が悲しさうに泣いてゐたとかいふ噂が、いつしか世間へ廣がつて行きました。さて、權守はあの時から二三ヶ月経て病床についたきり、何が原因か

得休の知れない病氣に苦しめられておりました。權守は立派な醫者を幾人も呼んで見てもらいましたが誰もその原因を知る者はありませんでした。それで權守の病氣は、良くなりもしなければ悪くなりもせず依然として、彼は病床についておりました。

こんな日が幾日か續いた或日の事、由良の開山の住職からだ云つて一人の僧が訪づれて来て、住職が天狗の片羽を非常に所望してゐるといふ事を語りました。その住職といふのは、權守が小さい時から世話になつた、たつた一人の伯父なので、

「伯父のたつての御所望であれば、差上げたいのは山々ですが、此の羽ばかりは、自分の家の家寶として永く子孫に傳へたいから、外の事ならば何でも應じますが其の事ばかりは」と固く辭退しました。すると其僧は立ちどころに大きな天狗に成り變つて

「わしは開山の住職の使でも何でもないのだ。實のところ此の間お前のために片羽を失つた小山の天狗の親類である。此の場合命だけは宥してやるからこれから心を入れかえて、高慢の氣をすつかり取つてしまへ。さうしなかつたならば、お前の家はすぐに亡ぼしてお前の命まで取つてやるぞ。此の片羽はわしの手下のものだから持つて歸る」

といつて高く／＼飛び去つてしまひました。權守は刀の柄に手をかけて一討に斬つてやらうと思つたが身体がしびれて少しも動かすもの云う事も出来ないで口惜しさうに睨んでゐるばかりでした。

## 狼 平 藏 (山路)

昔私の村の小簀川と言ふ所に中の申と言ふ家がありました。その家に平藏と言ふ人があつて僅ばかりの百姓をして居りました。所が平藏は百姓よりも殺生がすきで冬になつたら毎日鐵砲をかついで狩にばかり行つて居りました。又鐵砲を打つことが大そう上手で平藏の筒先にねらはれた鳥や獸は皆打ちたほされねばなりませんでした。

けれどもその頃は肉類を食べれば穢れるといつて村の人も他所の人も肉は決して食べませんでしたから、肉は少しもお金にはならうはづがない。で彼は、澤山取れる獸の皮丈けはぎ取つてそれをお金に代へ、おいしい肉は皆山へ捨て、しまひました。

その時分には私達の村に狼が澤山居て平藏の捨てた猪や鹿の肉を度々御馳走になつてよろこんでゐました。又何故か平藏も狼に丈は筒先を向けなかつたといひます。それで狼も段々平藏に馴れて来て鹿や兎を山の奥から追ひ出して来て食ひ倒して平藏の前へ置くのでした。そんな時には狼に皮丈け呉れようといつて、皮を剥がうとしますと狼は傍にあつて平藏のする事をぢつと見てゐました。そして肉をやるとよろこんで山の中へ駈けこんで行つたといふことです。

この事を知つた村の人は平藏が狼とあまり仲がよいので狼平藏といひ出しました。この様に殺生がすきでしたから一代に獸の皮を千枚以上も取つたので自分の身がおそろしくなつて千枚供養といふのをしてこの人の家の一町程上の岡で「卒塔婆」まで立て、罪ほろぼしをしたのださうです。それで今でも其處を「卒塔婆岡」といつてゐます。

### 雨の森 (由良)

由良開山の弟子の一人が或時切目崎へ遊びに来て、海中から龍の鱗三枚を得た。僧の死後その鱗を雨の森に埋め早時雨を祈る所とした。

### 今宮社前の石 (藤田)

藤田村の今宮社前に大きな石があつた。或時この傍へ雷が落ちて亂暴したので社當の祭神が之を手水鉢で蓋せて捕へ「この石が腐つて無くなるまではこの里へは落ちない」と誓はせて放免された。それから當地へは落雷のあつたことがないと。

### 開山の天狗 (由良)

由良の開山の森には古來天狗が居ると傳へられて居る。安政元年の大地震及び大津浪は丁度闇夜の子刻で咫尺を辨じないといふ暗さであつたのにこの山に凡そ壘一枚ほどの燈火が二つともつたので山影の所まで明晃々々と照らされ人々の避難にはまことに好都合であつた。これは全く天狗の所爲であつたのだといふことである。

### しとゝの藪 (岩代)

日高郡岩代村西岩代の字赤坂三四七番地の畑である。神武天皇熊野に迂廻せられし時岩代に舟を寄せられこの藪に矢竹を徴されたと傳へられてゐる。

### 柳の井 (岩代)

岩代村西岩代の山添二二六番地にある。神武天皇の皇子神亭名川耳命(綏靖天皇)に御産湯を奉りし井

戸であるといふ。

### 馬に救はれた判官 (南部)

雲消る千里の濱の月影は

空にしられてふらぬ白雲

左近衛少將藤原定家が詠まれた日高郡南部町の名所千里馬頭観音は往昔帝の龍駕を止め給ひし跡にして畏くも花山院は千里の濱の石を枕として一夜を爰に明し給ひ

旅の雲夜半の烟とのほりなげ

蟹のもしほ火たくかとも見む

と御一首を詠まれた。また田邊藩主安藤公代々が殊に信仰深かつた由緒のある所である。星移り年變り史跡次第に荒廢して顧りみる者尠なく大正九年五月南部町出身の成功者横濱貿易商故長岡佐次郎翁はこの勝地の世に忘れらるゝを悲しみ自ら資を投じて全山を開き舊跡保存に努め視音堂其他の大建物數棟を設け山上三線の道路を作り舊跡保存開拓に専心努めた。その昔馬術の名人小栗判官助重が観音のお告げにより照天姫にいさり車を曳かれて熊野の靈泉湯の峰温泉に浴り難病が全治し

たといふ小栗判官照天姫のロマンスで有名な話が傳へられてゐるが南部千里観音と小栗判官とに就いて次の様な傳説が残されて居る。

x

x

x

難病に罹つた小栗判官助重が照天姫の貞節によつてさしもの難病も熊野湯の峰温泉で美事に全治しお家再興の大望を胸に抱いて船に乗り京都に下る途中日高郡南部の沖合で一天俄かにかき雲り大暴風に襲はれ浪風は益々加はるばかり船は宛然木葉の様に翻弄されて漂流してゐた。判官は運を天に任して日ごろ信ずる観音菩薩を心に念じて一心に観音經を唱へてゐたが浪は一層に荒れ狂ひ風はいよ／＼強く到抵救助されると思はれず多くの船客は浪に吞まれて溺死するあり女子供は救ひを求めて泣き喚き阿鼻叫喚物凄いうちにも一人判官のみは船室内に端然と座しなほも観音經を唱へてゐた。

アナ不思議やこの時何れともなく馬の嘶が判官の耳を打つた。不圖眼を見開らき見ると判官の前に全身純白な綺麗な白馬が荒れ狂ふ浪中を泳いでゐるのが浪間に首ばかり見へて判官めざして近づいて来る。判官は大きに喜びその白馬に乗り移つた。馬術にかけては天下の名人。馬の手綱をかひぐるや遙か山陸さして荒海を渡り海邊に起つた時白馬はいなきの聲と共に姿は忽ち消え失せた。四方は寂として聲なく濱松風と浪の音のみ、判官は餘りの不思議さに只呆然として佇み海面を眺め



てゐたところ、白馬と思ひの外そは一片の木片が渚に漂つてゐるではないか、これぞ日ごろ念ずる観音様の御加護かなとその木片をいと町重に拾ひ揚げ押しいたゞき七日間の山籠りをして斷食なしその木片に心魂をこめて観音の像を彫み、祠を作りこれを安置した、これぞ千里観音の始めで木片が馬の首に見えたといふので誰云ふとなく馬頭観音と稱へるやうになつた。

星移り月變り春秋茲に幾星霜斯した傳説を持つ南部町千里馬頭観音は附近村落人々の信仰の的となり毎年舊二月八日の初午には老若男女の參詣客が年と共に多く午前四時ごろから參詣客で全山を埋める賑さで最近龍神商會の自動車が海拔千メートルの山上を疾走する。渺々たる大平洋を一望に眺め風光絶佳千里の濱の衣裳くらべ——と唄はれる紀南の勝地南部千里観音といへば實に有名なものである。

### 巨人の足跡 (南部)

南部町高井田山の麓(山内)に大人の足跡といふのがある。昔巨人が何處からか今の鹿島と御靈の森(上南部村須賀社の森)とを擔つて來たが餘りの重さに一寸荷を下した。其の拍子にこんな足跡がつき荷はとろ／＼地上を離れなかつた。そしてそのまゝ鹿島は海に御靈の森は陸に残つた足跡の深さ一尺長さ

一尺位である。

### 平須山 (上南部)

上南部村東本庄邊川にあるのが平須城趾である。

毎年元旦に金鶏がなくといふ。それを聞いた者は福があるといふことだ。此處の馬目樫を取れば腹痛を起すといふ。ずつと前にはこの山をつぶり山と云つた。昔辨慶がこの地を通り草鞋の土を落した。その土で出來た山であるといふ。

### 弘法井戸 (上南部)

上南部村熊岩に弘法井戸がある。昔弘法大師この地に來て水を所望せられたので一老媪がわざ／＼千里濱まで下りて清い／＼溪水を汲んで來て大師に與へた。大師は非常に可哀想に思つて「どうも氣の毒なことだ。私がこの邊へ水を湧せてやらう」と杖でこつ／＼と穴を掘られた、穴からは勢よく清水が湧き出でそれからはどんな早魃でも水が枯れたことがないといふことだ。

### 水湧かぬ地 (南部)

南部町堺奥に水の湧かない地がある。それは弘法大師が熊野詣の途次に路傍の家に立ちよつて水を請はれた。然るにその家では大師とは露知らず「お易いことだが水がないので」とほんの乞食坊主だと思つて断はつた。それからこの地に水が湧かないのだと、今でも溪水を飲んでゐる。

### 袈裟井戸 (南部)

昔弘法大師が南部氣佐藤を通つた時、とある井戸に立ち寄つて水を汲まうとし誤つて袈裟を落した。その井戸は今も堅田家の近くにある。それからこの井戸を袈裟井戸と呼び附近の地名にも訛つて氣佐藤となつてしまつた。

### 高見松 (南部)

昔大殿様が南部に來り高見の松を見て突然「之は何年位になるか」と庄屋に問ひかけた。庄屋は即

座に「私共の見ました所では一千八年だ思ひます」と答へた。

「それは又どうして左様詳しくわかるか」と

お尋ねになると庄屋は「さればでございます。昔より松は千年たてば枝が地に届くと申します。この松の枝が地についてより八年目でございます」と答へた。

殿はからくとお笑ひになり御機嫌殊に麗しかつたといふ。

### 要石 (南部)

南部町鹿島の下に地震の神があつて、ともすればその暴威を振はうとするが鹿島明神が上から之を壓へつけて居るので往古よりその地方に地震、津浪、災害が起らぬのだといふ。そしてこの神がこの島へ遷つて始めて坐し給ふたと云はれて居る石が海中にある。大きな磐石であつて中央に凹んだ穴がある。方三尺四方その内に徑二尺五寸位の大珠石があつて干潮の外見る事が出来ない。

傳へて鹿島の要石といふ。

(近頃御鑿石とたゞへて島の上へ上げて戦捷観音堂の傍にすえてゐる)

二二 鍋 (南部)

上南部村筋超世寺の東方に一抱大の石が二つある灰黒色隋圓形で恰も鍋のやうだ。今は二箇しかないが昔こんな石が天から三つ落ちて來たので三鍋(南部)といふ名が起つたのだといふ。之は隕石である。今はこの岩神と崇めて新年には注連繩を張りに行く。此の石は正月元旦に微妙なる音をたて、歌をうたふともいふ。

有馬王子と結松 (岩代)

有馬王子は孝徳天皇の御子である。結松は日高郡岩代村西岩代にあつたが今より約三十年前枯死した。

有馬王子は齊明天皇の三年病んで牟婁温泉に(湯崎温泉)に遊ばれ都に歸らせ給へば天皇又紀伊に行幸あらせられた。留守の官蘇我赤兄有馬王子を失せ奉らんと王子を陽つて四年の十一月四日王子をとらへて牟婁温泉に送り奉つた。

是に於いて中大兄皇子(舒明天皇の御子時の皇太子)自ら皇子を訊問された。皇子答へて「天と赤兄と知るのみ、

我知らず」と一日皇子岩代坂にて絞られ給ふた。

皇子牟婁温泉に送らるゝ途次磐代の里(岩代村)にて

磐代の濱松が枝を引結び

まさきくあらば亦還り見む

家にあれば筈に盛る飯を草枕

旅にしあれば椎の葉に盛る

かく磐代の里の濱松を結び神に誓願し給ふた、結松の名古今に名高い。元岩代村役場前附近を「結び」といふのはこの「結び松」があつたからである。

花山天皇の御遺跡 (南部)

花山天皇熊野に行幸あつた時千里の濱王子神社に御參詣あそばされ、しばらく御休憩せられ御頭痛の靜まるまで御枕にせられた石は今なほ當神社拜殿前にある。

### 安養寺の黒佛さん (南部)

南部町大字芝に安養寺といふ寺がある。其所に「恵心僧都」と呼ぶ僧侶があつた。この僧人にすぐれて眉目秀麗まことに美僧であつた。凡人達は毎日のやうに遊びに来て勉強の妨害をする。それで此の僧は顔へ墨を塗つた。それから誰も遊びに来なくなつてしまつたといふ。その後讀書三昧の傍自分の像を彫刻してこの寺へ残した、今黒佛さんとして参拜するのはこの御像である。

### 片倉峠の櫻 (南部)

南部町と岩代村との境に片倉峠といふ坂があります。左程に高くないが峠に信長の植ゑたといふ櫻の木が一本あります。信長が天正年間天下に號令せし當時里程改正せられ五十町一里とした時一里毎に植ゑさせたのが今に存在して居るのだといふ事です。

### 豪力 瀬田 (上南部)

日高郡上南部村東本庄一之宮に三百貫餘の石の手水鉢が疊々たる大樹のもとに横つて居る。

昔田邊奥伊佐井田に瀬田といふ大變な豪力があつた。ある日瀬田は南部奥に柴を刈りにいつて歸る途中信心深い彼は一宮に参詣して一服して行かうと肩の荷をおろさうとすると豈はからんや三百餘貫の大石が柴の中から轉げ出た。

しかし瀬田程の豪力だから別に何とも思はずに。

「あゝこれは柴を束ねた時知らずに一緒に束りこんで来たのだなあ。道理で少し片荷がつると思つた。」とつぶやきながら晝食をすまして内にかへつた。それが今日の手水鉢であるといふことです。

この瀬田の豪力振りについての傳説がもう一つある。それは對岸の淡路島の豪力某は瀬田の有名を聞いてはる／＼紀淡海峡をこえて伊佐井田に來り瀬田の家を訪問して立合を申しこんだ。

「今日は」敷居を跨げると九十餘りの彼の母である婆さんが一人留守居をしてゐた。彼は瀬田と力だめしの試合に來た事を告げた。すると老婆は「まあそんな考ならゆつくり待つて下さい。今小供は仕事に出て行つて居るがもう歸つて來ます、それ見なさい。あんなに雲蔭がさして來ましたよ。」といひながら鐵の長火鉢を軽々と片手でさげて來て一服を促した。淡路力士は大變に驚いてほう／＼の体で逃げ出した。そして上陸地の田邊に力限り走りつゝけた。やがて山から歸つて來た瀬田は一部始終を母から聞いてそれは殘念——とどん／＼追つかけて淡路力士を呼びとめた。

彼も力士と呼ばれるだけに呼びとめられてからはもう逃げようとはしなかつた。とう／＼大濱で取組むことになつた。

頼田は早速二本の大きな孟宗竹を取りよせて一本をそのまま自分の取纏に他の一本を相手に與へんとして節を二本の指でひしやいでやつたので、さすがの淡路力士も震へ上つた。勝負は無論頼田のものであつたのはいふまでもない。

今も西牟婁郡稻成村大字伊佐井田に頼田の墓があるといふことである。

### 南部 鹿島 (南部)

寶永四年十月四日午の下刻ばかり大なる山もくづれ地もさけ家居なんぞも倒るゝかと人みな肝をけしあわてさわげり。かゝる折柄俄かに大なる浪よせ來りて山内村の家居共にこと／＼く見るが中に流れ失せけり。老若男女この有様を見てあなおそろし海づらより高浪こそ立ち來たれ逃げよ通れよ聲々におめきさげびて手にとるものをだにとりあへず。山岡に走り登りければ我もまた人にをくれじと財寶などを打捨て井野山といふ所に分け登り苦ぶきの菴して苔の薙に草の枕三夜四夜ばかりのおきふしは、いとあさましかりけり。しかはあれど川より此方へは浪も來らず、家居もあ

やまたすおだやかなりしこそ有難くおぼえ待りけれ。

彼山にありつる程にある人のかたりしは是よりはるかに海づらを見待りしに鹿島沖より彼山を五つ六つ重ねあげたらん程の浪立來る中に白く圓にして妙なる光ありけるものゝ見えければあやしく目もはなたす、と見かう見、しばしが程見けるにその浪沖にして大と小と二つにわれ大なるは東のかたへ行き小きはこの浦へよせ來る。彼圓に光りしもの大なる浪のうち打ちかこみてつれゆきしが芳養の沖わたりとおぼしき所よりその浪を放れ鹿島の御山へ飛歸りてかくれぬ。こは不思議なりけりかゝりし事もありける事にやと、いとこまやかに語り待りき、是則鹿島の御神躰にいさゝか、うたがふ所なかるべし。さてこそ一邑のみにしてこの里には浪も來らざりけれ。誠にかたじけなしといふもおろかなりけり。

沖つ浪われもしづけし鹿島なる神の御池の深きめぐみに

幾ちとせあれじな此の浦のかしまの磯のつきぬかぎりは

沖つ波くだけてかへるうれしさは鹿島の神の恵みぞ知る

うちかすむ鹿島の宮の朝日影長閑に照す春をむかへて

すみのぼり光をわけて三笠山鹿島の宮よ有明けの月

鹿島なる神の御幸を松が枝に浪のしらゆふけふかけて見ゆ

浦の松榮もしるき三鍋や鹿島の浪にそふるひゞきに

寶永五才子年六月吉日

山内重賢謹白

右は鹿島神社所藏の記録を原文のまま寫したものである。」

鹿島は紀州南部灣の周圍十八町廣さ六町ばかりの小島で南部海岸から半里ばかりの海上にある。島は東西二峰に別れてともに鬱乎たる森に覆はれて居る。峰には石階數十級を登つて上にさゝやかな鹿島の社がある。神々しい木下蔭に名も知れぬ鳥が亂れ飛ぶ。見る目はるけき大平洋の青海原が木の間を洩れて見える。抑々この社には武甕槌の神の御神躰を納めてあるのである。鹿島は近時都人士の遊樂地として一日の清遊に杖を曳くものが多い。鹿島は古くから世に知られて居たものと見えて大寶元年持統天皇の熊野に行幸せられた時に供奉の人のよんだ歌……  
「三名部の浦潮満ちそね鹿島なる、釣りする海人を見て歸り來む」といふのが萬葉集に見えて居る。これで見るとその頃は鹿島は潮の干た時南部の埴田から徒涉が出来たものらしい。

### 河童石 (南部)

南部町埴田の日追川に河童石といふ岩がある。里人傳へていふ、河童は夏は海に、冬は山に居つ

てよく人間の尻を抜く。何でも頭に大きな皿のやうなものをのせて、その中に水のある間は活動するが水がなくなれば死ぬ。若し子供が瓜の蓐を食べて泳ぎに行くと必ず彼に尻を抜かれるといふ。

### 千人壺 (上南部)

上南部八町田圃の村道を行きつめると小石のまじつた赤土の十間程の高さの崖がある。即ち千人壺である。昔大飢饉のあつた時南部川奥の窮民が此の邊へ出て來たが誰も食をあたへる者がなかつたのでばかりと餓死する外はなかつた。丁度あの震災の被服廠のあとのやうにうめき重なりながら、そして其多くは千人壺へ飛び込むのであつた。

今から何年か前其の前の道を作つた時此處の土を取つた事がある、其の時人間の骨が累々と出た。それを木の小箱へ入れてお寺へ埋め變へたなどいふ噂がある。今でも小雨降る夜など餓鬼亡者どもが陰火となつてふら／＼飛び廻るさうだ。闇の夜など其の前を通ると何んとなく鬼氣が迫るやうで身体が急に寒くなるやうに感ずる。

### 人魚となつた濱の娘 (南部)

南は大平洋に面した紀州南部町の灣曲した海濱の中間から約十町を距て、鹿島と呼ぶ島がある。無人の孤島であるが不思議なことには此の島には風も吹かず、潮が満ちた時もまた干たときも一寸も潮の上げ下げがないと傳へられてゐる。

それは元祿時代であつたともまた寛政年間ともいふ。南部の里に苗字帯刀までも許された、田尾源十郎といふ豪家があつた。源十郎の嗣子に彌三郎と云ふ若者があつたが幼少より病弱の彼は常に両親に勤められて南部の海濱や磯邊、または海濱から沖合遙の鹿島まで舟を泛べて釣を垂れるのを日課としてゐた。

彼が釣を垂れに沖へ出るときは南部の濱に住む藤太と云ふ老漁夫が櫓をおして常に彌三郎の伴をしてゐた。藤太にはお清と稱ぶ十七歳の娘があつた。お清は漁夫の娘に似合はぬやさしさを持つ美人だつたが、漁夫の娘だけに舟を操ることも上手だつた、自然彼女は父に代つて彌三郎の伴をして沖に出ることもあつた。

二人はいつしか戀に落ちた。

まづ二人の戀をそれと氣付いたのはお清の父藤太である。然し誰れならぬ若旦那と可愛い一人娘のお清との戀、彼は見て見ぬ振りをしてゐたがそれを知つて怒つたのは彌三郎の父源十郎だつた。古き家門の誇りと傳統に生きる源十郎は彌三郎の戀を以ての外と憤り、遂に彌三郎の釣を禁じ、

監禁同様にしてしまつたのであつた。そして一方では彌三郎の爲にその妻女の物色にとめた。

一室に押し込められた彌三郎の戀はますます募つた、もう我身を忘れ果て、焦立ちながらお清を思ひつめた。お清も同じ心であつた。彌三郎の姿が見えなくなつてからは獨その小さい胸を痛めた。

ある夜彼女は物狂はしくなつて家を出た。夜は更けてゐた。濱には一人の影もなかつた。初戀に氣の狂はしくなつた彼女は波の音ばかり聞ゆる夜の濱邊を駆け廻つてゐた時、

「お清ぢやないか」呼ぶ聲にふり返ると

「お、彌三郎さま」

彼女は物も言はず戀しい人の側に走りよつた。

「それでは彌三郎さま、あの鹿島まで」

お清は濱の渚を歩み出した。彌三郎も吸ひよせられるやうにお清の後に隨ふた。

聴てお清が先に立つて濱に引き上げてあつた小舟をおろして打ち乗ると彌三郎も無言で乗つた。船は鹿島につけられた、二人はつゞいて上つた。お清はもう氣が落着いてゐた。彼女は凝つと彌三郎の顔を見ながらさも嬉しさうに微笑んだ。

「お清、私はなあ、嚴父に押し籠められてゐたが、なんだか何處かでお前の聲がするやうに思へて

ならなんだ、それで裏の開き戸を開けて外へ出ると吸ひ付けられるやうになつて濱まで来たのぢや」

彌三郎は身を慄はしながらさう言つた。

「彌三郎さま、とても此世では妾と貴郎とは添ひ違げられません、妾の身分が卑しいので……。」

「私とても父が他の縁談を勤めて困つてゐるのぢや」

島の渚に蹲つて黙つた二人は、それでもしばし恍惚として夢の世界に我れを忘れた。

「おや舟が流れる！」

ふと面を上げた彌三郎は吃驚して叫んだ。

「わたしが！わたしが流したのです」

お清は平然としてゐた。

「それではお前は死ぬる氣か？」

彌三郎の聲は顫へてゐた。

「どうせ二人は此世では添はれぬ妾は人魚となつて遠い／＼海の彼方で貴方と一緒に添ひます」

彼女は心の裡に何の不安もなさうに彌三郎を見た。彌三郎はその無邪氣さうなお清の面を見瞻めてゐると、知らず／＼死の世界へ引ずられて行かれるやうに思はれた。

「妾は此世にあつたとき貴郎と一緒にさまよつた此の汀を永劫に波風にもあてず此儘に残して置きませう、そして永久に人魚となつて此の場所を守りませう」  
さうして二人は靜に身を投げたのであつた。

行たら見て來い 南部の鹿島

根から生えたか浮島か

今も尙ほ其の地で唄はれてゐる漁歌は、このお清と彌三郎の姿が消えて間もなく唄はれるやうになつたのだといふことだ。

## 牛のやど

——傳説を訪ぬる熊野の旅日記の中より——

二人づれの旅人があつた、凍てた道が薄い冬の太陽にあたゝまつて濕潤がちになつてゐた、そうした緒土道は草鞋の底から足袋にまで滲透んで爪先きは氷るやうに冷めたかつた。カサコソと雑木林の落葉を歩いて餌を漁る何鳥かチ、と鳴く。

かうした熊野の山坂の險阻な旅の日が幾日かつゝいた。さもなくとも暮れ易い冬の日が高い山と



山との間に峽まつた熊野の村里は一層冬の日が短かゝつた。次第に暮色の迫る山道に二人の旅人の歩調は早められた。

さうしてとある村の旅人宿に草枕の一夜を求めた。旅人宿といつても軒には藁を山のやうに積んで居て鎌やクワの農具が無雑作に置かれてゐる、庭には米搗臼がある。二人の旅人が上り框に腰をおろして脚絆を脱いで埃を拂はうとした時頭の上で、コ、／＼と突如に牡鶏が鳴いた。なるほど鶏部屋がつい頭の上にある、幸ひ鶏の首がこちら向きだからいゝ、若し尾がこちら向きであつたら糞を頂戴するかも知れない。

やがてすゝぎ盥で足を洗つた二人の旅人は薄汚ない一間に通つた、そこには古びて縁の焦げた箱火鉢が一つ置かれてゐた。旅人は藁灰の中の釜炭の燃えさしを掻きながらあたりを見廻した。襖には東郷大將や乃木大將の肖像や富士山の石版刷りの繪などが貼られてゐた。床の間に 天照大神と筆太に書いた軸物がかゝつてゐた。

煤けた釣りランプがジシ……と音を立て乍ら火が入つて明滅し出した。旅人の一人は口金をあちこち捻ぢ廻して見たが、やがて火がホヤの中に一ぱいになつて果ては燃え上るので周章てゝ吹き消してしまつた。

四十恰好のおかみさんがお風呂をおめしなさいといつて襖を開けると室内が眞暗いのに驚いたや

うにすぐ蠟燭を点火してランプの掃除をしてくれた。お風呂といつても柴納屋と並んだ處にあるらしい、旅人の一人は先づ衣類を居間に脱ぎ捨て、禪一つになつて外に出た、サツと吹き下す石船風になガタ／＼顛へながら風呂場にいつた。

それはよくある鐵砲風呂で釜の火は鬼の赤い舌のやうにめら／＼と燃えてゐた。荒壁の隅の三角棚にカンテラが燈つて熾に煤煙を上げてゐる、彼は可成り熱い風呂を我慢しながらチツと浸つて天井を眺めた、天井といつても棟木そのまゝで眞黒く燻つてゐる。

例の赤い鬼の舌の火はめら／＼と風呂桶の高さまで威勢よく燃え上る、その都度シューと熱い湯の玉が尻の方から湧き上る、彼はたまらず飛上つた、と頭から顔にかけて蜘蛛の巣が一面に絡つた。おかみさんは遅ればせにお加減を伺ひに來たので二杯も三杯もうめさして、火を引いてもらつた、此度はやゝ落付いて頸ぎり浸ることが出來た。

吹雪になりさうな空模様は又もやさつと吹き風す木枯に油煙のカンテラはフツと消えてしまつた。遙か向ひの黒い杉山の上に宵の明星が青い光を地上に投げながら瞬いてゐる。彼はうそ氣味悪るい風呂にうづくまつてゐると其時であつた、不意に彼の頭をペロリと舌で甜めたものがあつた。彼は思はず首をすくめて無氣味に慄へた、しばらくすると又ペロリと甜めに來た。彼はもう居堪まらなく恐ろしくなつて果ては氣も心も失なはんばかりに風呂を飛び出した。碌々拭ひもしないで連

れの旅人に此ことを話した。

第二の旅人はそんな馬鹿げたことがあるものかといつたものゝ餘り氣持ちはよくなかつた。それでも半ば恐怖心と半ば好奇心に驅られ乍ら風呂場にいつた。風呂場は眞闇だつた、突如に黒い空に流星が一つ青い長い尾を引いて飛んだ、彼は身振ひした。

彼が風呂に浸つてから間もなくであつた、例の舌はペロリと彼を舐めた。彼は思はず首をすくめた、しばらくして又ペロリ舐めた。彼はつとめて度胸を据えた、そしてきつと暗闇を睨んだ。今度來たが最後引摺みくれんと待ち構へた、やがて三度目である、ペロリと來た時彼はすかさず兩方の猿臂を伸した。すると何だか堅い尖つた滑らかなものに兩手が觸れたと思ふとしつかと握つて離すまいとした、怪物の方が強くて彼は風呂の中で危ふくぶつ倒れさうであつた、それでも彼はやつきになつて怪物を離すまいとした、その時であつた、彼の耳元で一聲高くモーと叫んだ、彼は思はず攫んだものを手から離した。彼は牛の角を攫んだのであつた。そして二人の旅人は何れも牛に舐められたのであつた。

風呂釜の燃えさしの梢火うすあかりしてすぐ隣りが牛小屋に接いて風呂場との間に牛の首の出入する程の窓が開いてゐたことがわかつた。

不許複製

昭和五年七月十日印刷

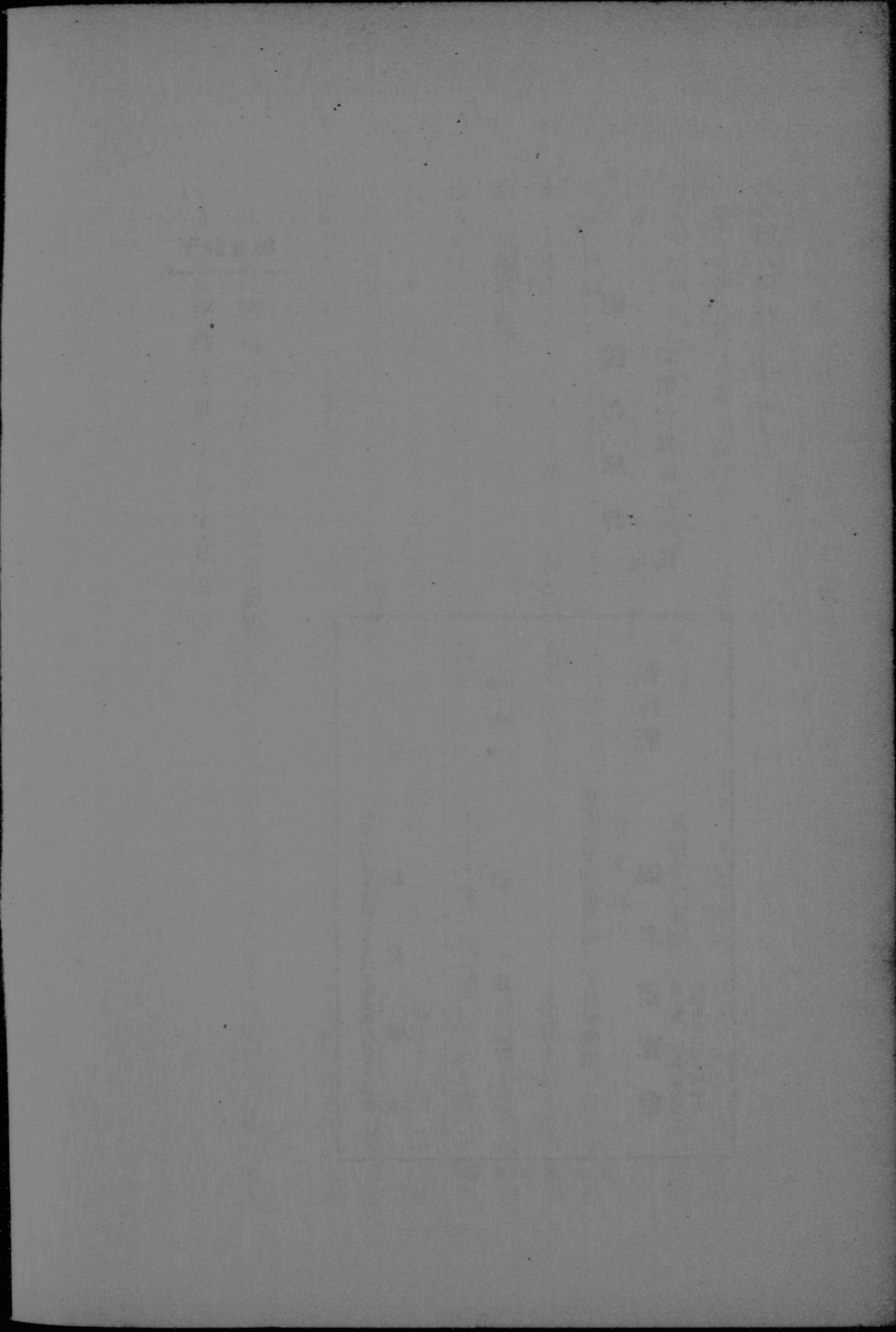
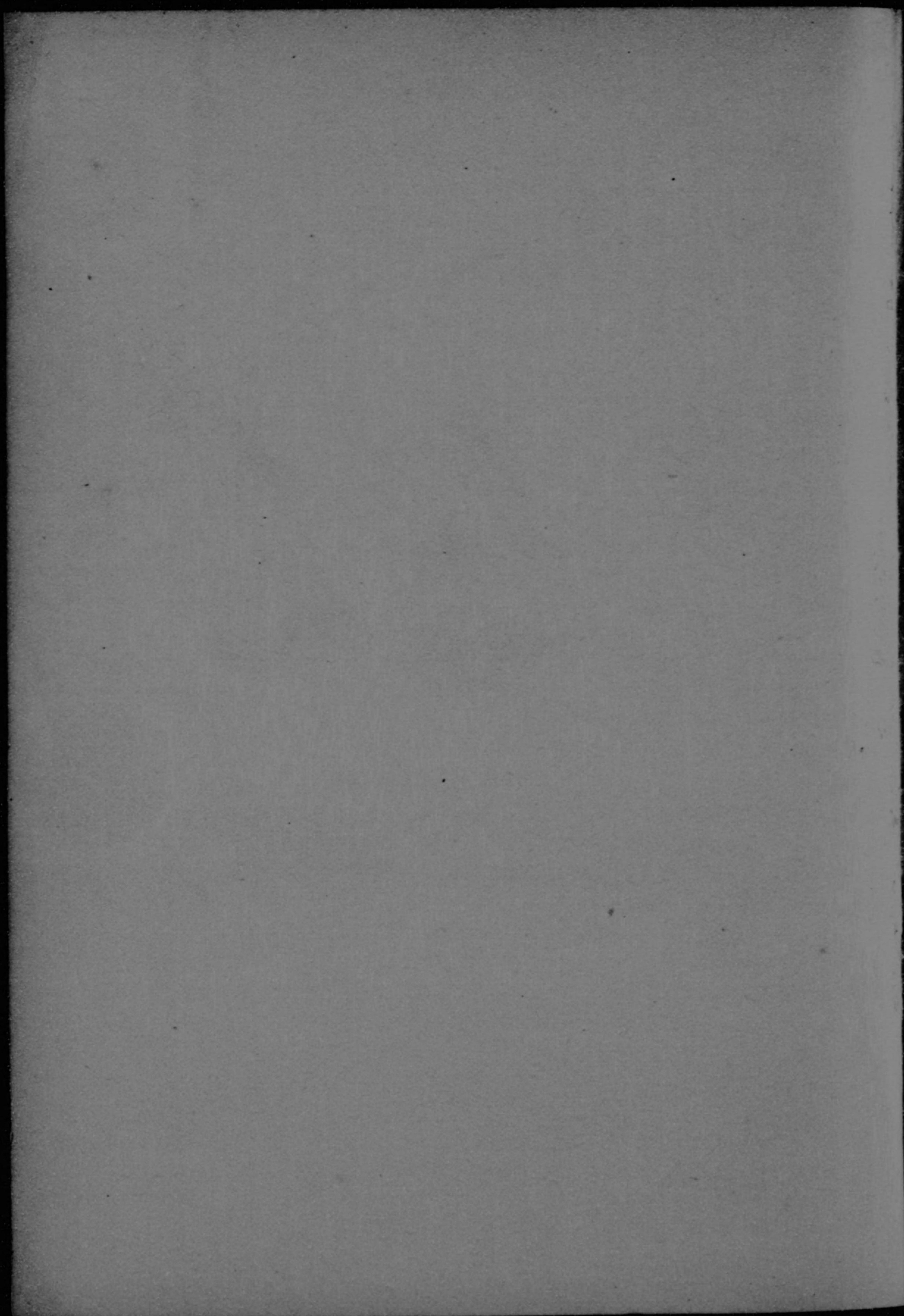
昭和五年七月十五日發行

七

著者	和歌山縣西牟婁郡田邊町大字中屋敷町百十一番地 那須晴次
發行所	和歌山縣西牟婁郡田邊町三丁目七番地 宗文社内 郷土研究會 電話 一一一五番 振替大阪二二四一番

關宗文社印

傳説の熊野  
定價金壹圓五拾錢



578  
296

